

ふるさと園復元概報

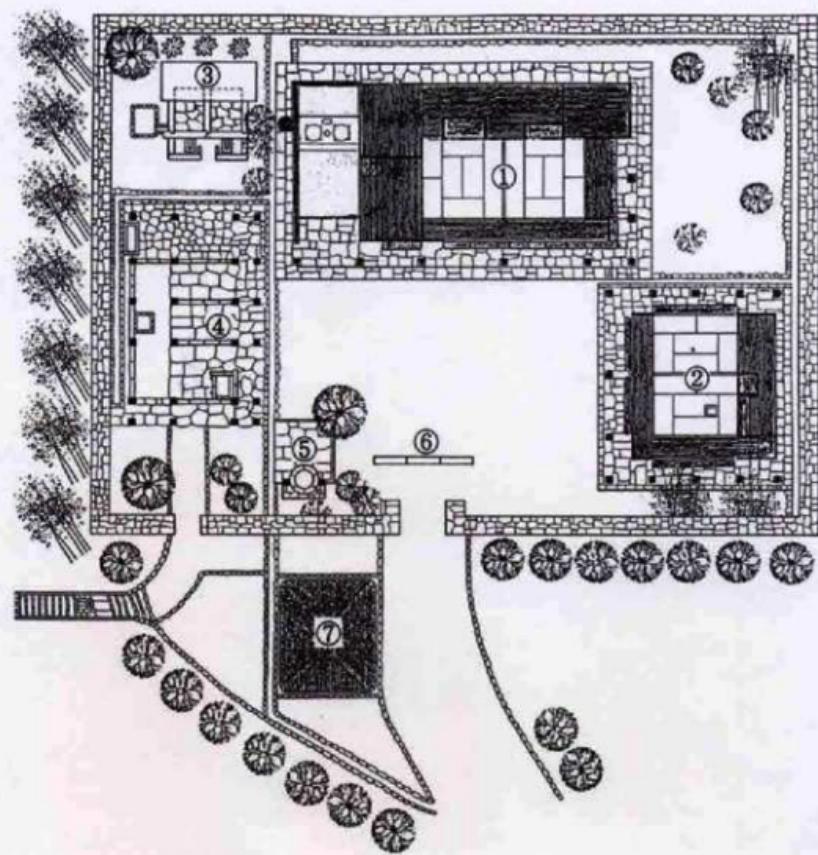
——保存と復元——



1987年3月

沖縄市教育委員会

ふるさと園平面図



①	母屋	⑤	井戸
②	アサギ	⑥	ヒンブン
③	豚舍	⑦	高倉
④	畜舍		

はじめに

市民の皆様方が待ち望んでいました明治末期から大正時代にかけての農家の移築復元が、昭和60年度着工以来2年の歳月を費やして完成することができました。

当書を発刊するに際し、母屋を寄贈していただきました久場良昌氏、それに豚舎（フルヤー）を寄贈していただきました平田嗣祐氏には厚く感謝申し上げます。

それと同時に、当時の建築の方法や資料を提供していただきました方々はもとより市民の皆様のご協力をいただきましたことを深く感謝致しております。

一棟の民家を保存することは、それを創り育んできた人達の生き方、生活、地域の歴史を知る手掛かりとなり、またそれを造った人達の技術、素材への取り組み方やその他様々なことを堀り起こして我々に伝える事になると思います。

利用方法も、出来る限り住まいとしての本来の機能に近い活用が出来るよう計画しております。

当園が歴史の生き証人として若い方々にも顧みられ、市民の手によって守り育てられ共有の財産として活用され末永く生き続けてゆくことを願ってやみません。

沖縄市教育委員会教育長
比嘉徳進

(目 次)

はじめに	
I 環境	1
沖縄市の位置と環境	1
嘉間良の沿革	2
久場家の沿革	2
II 古民家保存の意義と移設に至る経緯	6
III ふるさと園の復元	8
復元の構想	8
工事経過	10
造成工事に伴なう地盤調査	23
旧久場家母屋の解体と移築の概略	29
アサギ	29
マチフールの解体と移築の概略	29
井戸	31
畜舎	32
高倉	33
ヒンブンの移築と南面石積み	40
植栽	41
技術伝承	42
IV 市内の古民家分布と保存の概況	69
V ふるさと園の活用及び施工業者一覧	93
図 版	95
あとがき	159



I 環 境

沖縄市の位置と環境

九州から台湾に至る約1300kmの洋上には大小の島々が円なりに連なっている。列島中最大の沖縄島は南北約130km、幅が平均10kmほどの南北に細長い島である。沖縄市は沖縄本島の中央よりやや南、県都那覇市より北方約19km（車で1時間弱）に位置し、北は恩納村・石川市、東は具志川市、西は読谷村・嘉手納町・北谷町、南は北中城村の7市町村に囲まれた本島中部の中心的商業都市である。面積は4,873haで土地利用現況は畠が800ha、住宅地477ha、その他の住宅地180ha、森林および原野522ha、基地1,857ha（総面積の約39.5%）である。

地形は北・南部の丘陵、中央部の台地、東部の低地に大きく分けることができ、最高海拔は倉敷の210m、最低海拔は字比屋根の0.1mである。

人口10,4409人、世帯数30,815戸（昭和61年7月1日現在）。



沖 縄 市 の 位 置

喜聞樂の沿革

嘉間良はもともと越米村越米の一部であったが、屋取集落として発達し戦前（昭和16年）に行政区として分離独立した集落である。

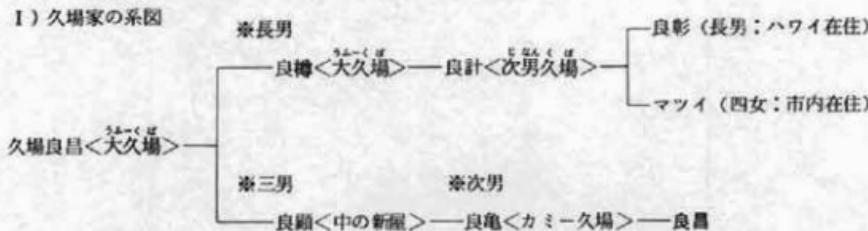
1945年(昭和20年)4月、越來グスクに戦車部隊を結集した米軍は、その南ふもとに位置する嘉間良に宣撫隊本部や避難民収容所を設置した。これによって嘉間良は次第に賑いをみせ、2ヶ月後の6月には人口が6500人を越えたため、隣接の室川・越來・安慶田の3部落も収容地区にあてられた。嘉間良を中心とするこの一帯は米軍によって「キャンプ・コザ」と呼ばれ、戦後には越來村の中心地となった。人口の増加とともに役所・学校・孤児院・郵便局・警察署・治安裁判所・映画館などが設置され、当時、未だ地元への復帰が許可されてなかった北谷村の仮役所も嘉間良に置かれた。

1950年(昭和25年)、胡屋一帯の米軍用地が返還され、都市計画に基づいて役所や他の官庁は胡屋に移され、越米村の中心が胡屋・センター区に移ると当地域も次第に住宅地域に変わった。

現在沖縄市の字で、住吉・センター・八重島区などの行政区となっている。

各場所の沿革

1) 久場家の系図



凡例

- ・資料は久場良昌氏より提供『馬氏門中：久場姓の分布及び系図』より転載した。
 - ・上記系図の良計氏（屋号：次久男場）は今回移築した赤瓦屋の建造者（当初所有）で、市に寄贈された良昌氏は、良計さんの長男：良彰氏より赤瓦屋を購入した。

II) 久場家移築までの経緯

沖縄市が譲り受けた久場家（移築以前は字室川1-2-25に所在）は、移築寸前まで久場良昌さんの次男である良孝さんが住んでいた。良孝さんが新築をし移転した為、それをきっかけにアカガーラヤーを取り壊し、良昌さん自らの家を新築する計画を立てた。アカガーラヤーを取り壊すにあたり、良昌さんの御好意で沖縄市に寄贈することになり、「沖縄こどもの国」に移築される運びとなった。

久場良昌さんの経歴

良昌さんのお父さん良亀（屋号、カミー久場）さんは大正7年、良昌さん（当時5才）と妹（当時2才）をお爺さんの良顯さんに預け南米（ペルー）へ移民した。その後、良昌さんが14才の頃、お父さんに呼ばれ伯父さんとともに南米へ出稼ぎに行った。

良昌さんが南米に行って3年たった頃、両親が沖縄へ帰る。お父さんは良昌さんに一緒に帰ることを勧めたが、「まだ手柄をたてないので帰るわけにはいかない」と居残った。伯父さんとともに農業に精を出し働き続け、18才の時に独立した。21才の時、所有していた土地を売り、その土地代の一部を横浜の銀行に預け、残ったお金で事業を始めようと思い土地を探していた。すると、そのことを知ったお父さんが沖縄から「帰れ」という電報を打ってきた。何事かと思い折り返し沖縄に電報を送るが返事がなかった。（当時電報を打つと50円かかった。50円の価値は米俵が8俵買えるぐらい高いものであった）「もしかしたら父が危篤なのかも知れない」と思い昭和11年に南米を引き上げてきたが、父は元気で電報は良昌さんを引き戻すための手段であった。

その後、横浜の銀行に預金していたお金が満期になると引きだし、現在住んでいるところから国道330号線を隔ててコンピューター学園のある所まで坪単価3円で400坪を購入した。昭和13年徴兵になり、1月10日に熊本の13連隊部隊に入隊。支那事変に参加、約4年して帰郷。帰ってくると同時に今度は八重山に現地招集された。戦争から帰って来ると、妻がミシンを持っていたので洋裁をし（当時はとても少なかったので儲かった）、そのかたわら雑貨店を経営した。その当時は何でもよく売れた。そうやって、妻と一緒に一生懸命働き、お金がたまると店を拡張することはしないで、土地を買い求め財を殖やしてゆき今日を築いた。

Ⅲ 良昌さんが良彰さんから家を買い取るまでの経緯

以下、久場マツイさんから伺がった話を紹介する（良彰さんの妹で沖縄市に在住）。

久場マツイさんは明治39年11月5日生まれで、久場家を建築した久場良計さんの4女にあたり、久場家の歴史を語れる唯一の人である。5人兄弟であるが2人の姉と1人の兄は幼少の頃からハワイに行き、一人の姉は沖縄に在住していたが、久場家を建築する時には嫁いでいたため、久場家にかかわる歴史について語れる人はマツイさん以外に存在しなくなつた。

この移築に関して、マツイさんの話をもとに、久場家の歴史に少しふれてみることにする。

1. 久場良計さん（屋号・次男久場）について

良計さんは久場良樽（屋号・大久場）さんの次男として生まれた。マツさんを妻として迎え、室川（移築前の久場家があったところ）にヤータチャ（分家）として宅地を貰

い受け、カヤブチヤー（茅で葺かれた家）を建てた。子供5人にも恵まれ、農業を営み生活していた。

マツイさんが2才の時お父さんは単身でハワイに行き、後に3人の子供たち良彰（長男）・ツル（長女）・カメ（次女）をハワイに呼んだ。マツイさんが14才の時、お父さんがハワイから帰ってきたので、お母さん、3女、マツイさんと4人で暮らした。それから、4年程たって、隣の土地を買い求め、家を新築した。

2. 久場家建築に係わった人と材料

アカガーラヤーを建築した大工は棟梁山内昌博（市内八重島に子孫在住）さんを中心にして4~6名の人で、工期は半年程だった。

屋根瓦は泡瀬産で、瓦大工が荷馬車で毎朝運んできた。カジラマーイ（軒石）石は読谷産のもので、石大工は親戚の久場ヨシテルさんという腕のいい職人さんが行った。

※ 当時瓦工場は泡瀬の古謝ヌメーと比屋根の天理敷屋取にあった。

3. 当時の屋敷の建造物と生活

当時は母屋のはかにカヤブキの畜舎もあり、牛と山羊を飼っていたのでよく草刈りもした。二基連結のマチフルもあった。水汲みは日課で台所のハンドドゥーガーミにムルカガーガー（室川ガー・市役所本庁の北側崖下に立地）から汲んできて使用した。

4. 久場家建築後

家を新築してから2年程たつと、お父さんは再びお金を儲けにハワイに行った。ハワイでの仕事は主にマウイ島でのキビ作りであった。それから2年後、マツイさんが嫁ぐことになったので、お父さんは帰ってきた。

5. 戦時中の体験談

戦時中は孫（長男の子供）が葬られている墓（亀甲墓でとても立派なものであった）に避難し、アメリカ兵に発見され出てきた時は、お父さんがハワイを行き来して英語ができるので、随分助かった。

当時、自分の家に戻ってみると読谷や各地から来た避難民で一杯になっており、「自分の家だ」と主張しても「あとから来た人を入れるわけにはいかない」と入れてもらえないかった。仕方がないので「裏座でもかまわないから入れてくれ」と懇願して、やっとのことで入れてもらえるという混乱状態だった。

しばらくして落ち着くと、お母さんは3女（カマド）の居場所が分かったので会いに行こうと思い出掛けようとした矢先に、脳溢血で倒れ帰らぬ人となった。葬式も戦時中の混



母屋／一番座の柱／弾丸の痕跡

乱している時とはいえ、自分の家の仏間のある所にも寝かしてもらはず、3女とお父さん二人で板の上に載せて運び、ひっそりと葬った。

久場家の建具はチャーキーの一枚板で出来た立派なものであったが、戦時に誰かが取り外して持って行き残ってなかった。

屋根の瓦も一部が戦災によって壊れ、一番座の前の縁側の柱には今でも弾丸の痕跡が(移築後も柱はそのまま使用)生きしく残っており“鉄の暴風”といわれる激しかった戦争の歴史の一端を証言している。

6. 久場良昌さんに久場家を売家するいきさつ

母を亡くし、世の中が落ち着くと父は久場家にマツイさんを住まわせ、再度、ハワイに出稼ぎに行き、何年かたってマツイさんが久場家を出ると、父はハワイから帰ってきて再婚した。再婚して5年後父は他界し、その後、後妻1人で久場家に住んでいたが高齢であることもあってか、ハワイに居る長男が父の財産処分をかねて沖縄に来た。そこで屋敷(移築した赤瓦屋舎む)を親戚の久場良昌さんに買ってもらい、義母を連れてハワイへ引き上げていった。

7. 久場良昌さんが買い取った金額と年月日

1967年5月10日 二筆420坪を25,000ドルで買う。

8. 久場家を買い取った後

久場家を買い取った後は人に貸貸していたが、その後、息子が住んだ。久場家はほとんど譲り受けた当初のままであったが、息子の良孝さんが住むようになると雨戸をアルミサッシュに替え、一番座の隣にトタン屋根のコンクリートの小さい部屋(勉強部屋)が増築された。



室川井泉
(ムルカーガー)

II 古民家保存の意義及び移設に至る経緯

沖縄市では、昭和50年7月に「沖縄市文化財保護条例」を制定し、数件の文化財指定と諸調査を実施してきた。有形文化財は、その性質上社会情勢の影響を受けやすいものであるが、特に、沖縄の伝統的民家である赤瓦家は、去る大戦で多くが戦禍により消滅した。又、戦禍を免れた民家も戦後の生活様式の変化や新しい建築材料の普及により、鉄筋コンクリート造へと改築されていった。

現在、本市には明治から大正にかけ建築された沖縄の伝統的な赤瓦家22棟が確認されているが、このまま建て替えがすすめばこの十年ほどの間にこれらの民家は取り壊され姿を消してしまうであろう。

沖縄の伝統的民家の特徴については、専門家が指摘しているように、台風と夏の高温多湿、冬の寒さと亜熱帯特有の自然環境を考慮した間取りと家の構造は、先人たちの生活の知恵と体験から考えだされた合理的な工夫を随所にみることができる。

しかし、戦後40余年、特に復帰後十数年経た今日、生活環境が著しく変化したことは、かつて我々が経験しなかったことである。そして自然も環境も一変した。古くて役に立たないものは急速に取り壊され、新しいものがとてて変わった。

住居も、特に台所のように機械的で便利な器具のついた設備で衛生的なものに変り、旧来の土間のある台所の在り方は大きく変わった。さらに、家族一人ひとりの生活を主張する現代の生活様式は間取りのとり方も大きな変化をみせた。

このような状況の中で、古民家を現状保存することは時代の流れに逆行する行為だとみられるかも知れない。しかし、私たちの生活環境は歴史的な積み重ねであり、その環境の一つである民家を保存することは、地域社会の文化遺産として保存、継承は、私たちの責務であろう。

この度、教育委員会で移築保存することになった民家は、大正10年頃の建築のもので、旧来の伝統的な赤瓦家である。これは、市内室川にあり、昭和59年度に所有者の久場良昌氏から新居建設のため、取り壊す予定があるという連絡が市にあった。

その情報は、中部のある村にも流れ、そこからもぜひ譲ってほしいという働きかけがあったようだ。その後、文化財担当である教育委員会文化課で協議があり、文化課としても文化財保護の立場から移築保存の方法について検討することになった。

教育委員会で民家を受け入れ文化財としてとり扱う場合に次のことが問題になった。

1. 同民家を移設し昔ながらの屋敷形態を再現するためには、約200坪(660m²)以上の敷地が必要となるが、場所をどこに確保するか。
2. 建物の状態により、相当の補修が必要だが、予算をどう見積りするか。

3. 移築後、どのように活用していくか。さらに、管理をどのようにするか。

取り壇しは、目前に迫り、問題は山積しており非常に困難な状況にあった。

これらの問題は、教育委員会だけでは解決できず、予算の問題は企画部及び中部広域市町村圏事務局に願い、移設に伴う技術的な監理は建設部建築課が担当することになった。

関係者が何度も協議を重ね、三役のご了解もいただき、移築場所を「(財)沖縄子どもの国」内とし、単に「文化財」としてではなく、郷土文化の体験学習の場として、広く市民が活用できる施設として移築保存することになった。



久場家解体前と移築後位置図

III ふるさと園の復元

復元の構想

本計画は、主として旧久場家主屋の移築保存事業であるが、民家の生活全てにわたる体系（あさぎ、井戸、フール、牛馬の家）を再現し、土文化の体験学習のできる社会教育の場として位置付けてあるのが特徴である。

本来、古民家の保存の在り方は、現地保存が原則であり今回のように建物を他所へ移し保存するということは次善の策である。この場合でも、博物館に収納するような凍結的保存の仕方は避け、できるかぎり旧状の生活体験を復元し、自然環境と人工環境とが一体となるように保存することが望ましい。さらに、市民に対して公開、活用の機会を充分に与え、共有財産としての認識をもつよう働きかけることが大事である。

幸い、年間の入園者が28万人にも達する「(財)沖縄こどもの国」内に移築することにより、沖縄市内ののみならず、中部の各市町村を含めて、多くの市民の共有財産としての活用が期待できる。そこで復元の基本構想を次のように設定する。

I) 年代想定

沖縄の民家は、長い期間にわたり階級によって、屋敷、家の制限を受けていた。これらの諸制限は鹿児島県後10年経った明治22年（1889年）まで続いた。諸制限の緩和と同時に各地方では、財力に応じた家づくりが行われたといわれ、現在、各地方にある貫木屋瓦葺きの石垣囲いなどのある屋敷、建物は多くが明治中期以降のものであるといわれる。

旧久場家は、大正中頃に建築され、その後去る大戦により被害を受け、何度か修復工事がなされた。しかし、間取り、主な資材は旧價のままで伝統的民家の態様をなしている。

そこで、年代を明治後期から大正中期までとする。

II) 設置場所

旧久場家の移築場所としては、次の条件があげられる。

- ア. 主屋だけでなく、その他の施設（あさぎ、牛馬の家、フール、井戸、高倉）も再現するため 660 m² (200坪) 以上の敷地が確保できること。
- イ. 市民の活用しやすい場所であること。
- ウ. 完成後、施設の管理運営が容易であること。

以上のことと検討した結果、移築場所を（財）沖縄こどもの国内とする。しかし、こどもの国の施設は、都市公園である沖縄市中央公園の一部であるため必然的に旧久場家の施設も沖縄市都市公園条例の規制を受けることになる。

こどもの国内における旧久場家の設置場所の条件は、

- ア. 都市公園法及び都市公園条例に適合すること。

イ、子どもの国の諸施設と総合した活用ができる場所であること。

ウ、台風及び季節風から建物を守れる場所であること。

エ、監理しやすい場所であること。

オ、公園の自然環境との調和が計れること。

以上の諸条件を検討した結果、設置場所を公園の北側とした。

この場所は子どもの国の手づくり郷土館と隣接し、さらに北側には、台風や季節風から建物を守る小高い自然の森がある。東南には、子ども広場があり位置とし、良い条件である。ただし、敷地全体が東に位置するダム側に傾斜しており、地盤も不安定なために相当の補強を要する。

Ⅲ) 展示の方針

旧久場家は、主屋の他あさぎ、牛馬の家、フール（豚舎）があり、屋敷も石垣囲いで比較的大きな農家であった。しかし、現在の建物の状況は、去る大戦の戦禍に見舞われたり、戦後の生活様式の変化に伴い大正年代に建築されたもので残されているのは主屋のみである。本計画では、旧民家の体系をなす全ての施設（あさぎ、牛馬の家、フール、井戸、高倉）と石垣、生垣を含む屋敷囲いを再現し展示するものとする。しかし、旧久場家に存在しなかった高倉まで計画に盛り込むということは、生活を無視した形式のみを追った計画になる危険性は否定できない。したがって、旧久場家の復元ではなく、学習の場として、又、来訪者に対し郷土文化のすばらしさを伝える施設として公園的な手法によって表現するものである。

全体配置 主屋の向きは南に向けてつくられる。周囲の石垣は厚さ0.4～0.5メートル、高さ1.5～1.7メートルとし、あいかた積みと布積みの混合したものとする。門から入ってヒンブンを右に行くとあさぎに至る。あさぎの前を通って、一番座側へ、ヒンブンを左に廻れば、井戸及び牛馬の家の前を通って台所へ通ずる。

台所の近くにフール（豚舎）を配置し、高倉は門の側（屋敷外）に配置する。（ふるさと園平面図参照）

主屋 旧久場家の主屋を移築する。ただし、戦後に改造されたと思われる台所は、建築当時の土間打ちとし、カマドも復元する。資材はできるだけ古材を使用するが、その状態により新材で補強する。

あさぎ 新築とする。

牛馬の家 旧久場家と同年代に建築された具志川市赤道にある久田家のものを参考に模築する。

フール 白川集落にある平田家のものを模築する。

井戸 市内に現存するものを参考に模築する。

高倉 大宜味村喜如嘉にある平良家のものを参考に模築する。

生垣 石垣と組み合わせ防風や防火の目的でフクギを主にして植栽する。

工事経過

I) ふるさと園工事日程表 (I期工事 昭和60年12月～昭和61年5月)

	造成、整地工事	建築工事	電気工事
12月	17日 伐開作業 21日 地鎮祭 24日 表土切削、除根作業 25日 表土切削、除根作業 26日	25日 監理事務所設置 31日 工事用看板設置	27日 仮設電気工事
昭和60年1月	15日 切盛作業 18日 24日 土質調査、ボーリング実施3ヶ所 27日 標準貫入試験28回	7日 久場家解体 11日 13日 解体資材の再利用選別と磨き 15日 アサギ木工事の加工 24日 25日	
年2月	14日 撃壁工事 23日 客土搬入、転圧	14日 母屋木工事の加工	17日 石積基礎配管
3月	5日 28日 工事完成	4日 5日 アサギと母屋の造方、アサギ土間コンクリート工事開始 6日 母屋の土間、配筋コンクリート打設	6日 あさぎ、母屋の土間配管 20日 埋設配管
昭和61年4月		2日 アサギ島石敷き、束石すえ付 4日 アサギ軸組、小屋組等開始 8日 アサギ野地竹、板貼り 10日 アサギ屋根ルーフィング貼り	

		造成、整地工事	建築工事	電気工事
4 月			14日 アサギ瓦葺き開始 16日 母屋軸組、小屋組み開始 23日 母屋野地竹、板取付	13日 あさぎ床、天井隠べい配線 27日 母屋床下、隠べい配線 28日 幹線設備工事
5 月			1日 給排水工事埋設配管、母屋瓦葺き開始 6日 アサギ水屋、炉製作 母屋の仮壇製作 7日 アサギシックイ仕上	2日 幹線設備工事 7日 母屋幹線立上り工事 8日 母屋、天井隠べい配線
昭和 61 年			10日 母屋カマド工事 14日 建具搬入取付 15日 仮検査 16日 手直し 19日 清掃 20日 竣工	13日 配線器具、取付等工事 14日 16日 電気保安協会検査 20日 工事完了

II) ふるさと園工事日程表 (II期工事 昭和61年10月～昭和62年1月)

	建築工事	植栽工事	電気工事
昭和十一年	1日 監理事務所設置 3日 現場小屋設置 9日 フールヤー、井戸の遣方確認（第1回工程会議） 10日 白川のフルヤー解体 11日 フールヤーの石搬入 13日 フールの堀削 14日 井戸用、テスト鋼板 打ち（第2回工程会議） 排水床掘 15日 井戸・鋼板打込み 17日 フール栗石敷き 18日 19日 井戸堀削 20日 フールヤー組立 鋼板打込み 21日 フール組立（第3回工程会議） 日鋼腹起、組立、堀削 22日 フール組立 井戸堀削 23日 フール錐石組立 井戸石搬入 24日 フール、マス組立 井戸、赤土埋戻し 25日 マス石積み 井戸、赤土埋戻し 26日 井戸、赤土埋戻し 27日 マス石積み 井戸石積み 28日 同上、井戸回り転圧 （第4回工程会議） 29日 井戸石積み、回り転圧 31日	1日 準備作業等 7日 リョウノヒゲボットに植込 8日 9日 1,300ポット植込完了 10日 オキナツケ等の準備 北部でフクギの準備 11日 低木等の準備 フクギの根廻し 13日 低床の準備 高木の準備 15日 メーカリスト提出 設計事務所へ	1日 現場巡視 6日 同上 工程表作成 9日 配管ルート（台床、床） 決定 10日 電灯設備工事、自火報 設備工事の床配管砂り 埋戻し 11日 15日 メーカリスト提出 設計事務所へ
	1日 排水石加工 3日 井戸石積み砲り転圧		22日 承認図作成 23日 29日 総合警二面手配 30日 自火報総合警二面取付 31日 感知器配線 1日 3日 火報配線

		建築工事	植栽工事	電気工事
		排水石加工 4日　〃 (第5回工程会議) 5日　〃 井戸腹おこし解体		4日 母家白熱灯配線 5日 自火報受信機取付
昭和六年一月一年		6日 井戸、石積み、回り転圧 7日 井戸、失板抜き、敷石加工 畜舎造方 8日 井戸、石加工、失板抜き 10日 井戸、石加工 畜舎塗剤 11日 畜舎割石敷き (第6回工程会議) 12日 畜舎捨コン打設 井戸、立上石積み 13日 畜舎、地中梁配筋 井戸、立上り、石積み 14日 畜舎、地中梁コンクリート打設 15日 畜舎、地中梁養生 井戸立上り石積み 排水石加工 高倉造方 17日 畜舎地中梁脱型、解体 18日 畜舎柱芯出し 井戸立上り石積み 排水、敷石加工 19日 排水、敷石加工 (第7回工程会議) 畜舎排水配管 高倉塗剤 20日 高倉フーチン検査、コンクリート打設 排水石加工	5日 同上 樹木検査 検査地：与那城農場 本郷町 今帰仁村 6日 樹木の灌水等管理	14日 畜舎床配管(電灯、自火報) 配管検査 畜舎床コンクリート打設立合 15日 高倉周辺概設の埋設配管の確認 17日 電灯、自火報、夕部配管接続砂埋め 20日 高倉 スミ出し、立上げ配管 フーチン、コンクリート打設立合

	建築工事	植栽工事	電気工事
十 一 月 昭 和	善舎の壁石搬入 24日 高倉フーチン解体、埋戻し 善舎柱石搬入 25日 善舎、柱石と敷き石搬入(第8回工程会議) 26日 排水、石加工と石敷き 高倉栗石敷き 27日 善舎石柱建付 28日 善舎石柱建付 排水石敷き 29日 善舎石柱、石壁建付 高倉石柱、石壁建付 30日 倒溝石敷き	30日 同上	25日 高倉基礎石穴削 29日 水銀灯ポール、安全器具 灯具、ランプ、白熱灯 器具、搬入、水銀灯ポール建柱、インターホン機器搬入、取付
六 十 一 年 十 二 月	1日 善舎、石柱、石壁建付 高倉材料加工 倒溝と石垣の石積み 6日 7日 ヒューム管配管 フールのマスの配管 8日 善舎、石柱、石壁建付 高倉、材料加工 倒溝と石垣の石積み 9日 ~ (第10回工程会議) 11日 12日 善舎、石敷き、材料加工 倒溝と石垣の石積み 13日 高倉材料加工 14日 石垣石積み 15日 善舎石敷き、材料加工 石垣石積み 16日 善舎石敷き、材料加工 (第11回工程会議) 倒溝と石垣の石積み フェンス基礎づくり	1日 移植準備 8日 同上 母屋に向て左側ノリ 面等の不陸直し 9日 不陸直し 600 m ² 芝搬入 10日 赤土で芝張り予定場所 補修 11日 赤土補修 芝張り、ノリ面芝張り 100 m ² 張 12日 地盤の平地芝張り 平地は50 m ² 張 13日 右側ノリ面、平地、池 ぞいの芝張、内部中庭 の芝張 15日 芝張面への灌水等管理	4日 善舎電灯配管立上げ スイッチボックス取付

	建築工事	植栽工事	電気工事
	17日 喬木石敷き、材料加工 側溝と石垣の石積み フェンス溶接、取付		17日 喬木基礎より石垣基礎 間の配管
	18日 喬木東石、材料加工 井戸石敷き 側溝と石垣の積み フェンス移築基礎コン クリート打ち		
	19日 喬木、東石、材料加工 切込み 井戸石敷き 側溝、石垣の石加工 石階段造方の確認		
昭和十六年二月一日年	20日 喬木、東石、材料加工 井戸石柱建付 石階段床場	21日 同上	
	21日 喬木軸組み、東石取付 石垣積み		
	22日 喬木軸組 井戸石敷き 石垣積み 堆肥置場整地	22日 管理作業 リュウノヒゲ植込準備 石垣のブッソーゲ植込 準備	
	23日 喬木タル木組立 (第12回工程会議) 井戸 石敷き 石垣積み 階段石加工	23日 リュウノヒゲ(約10m ²) 15×15cm間隔で植込み、 土壤改良剤混入 ブッソーゲ 100本植込 り、土壤改良剤 1.5kg 当たりを混入植込	
	24日	24日 管理作業	
	25日 高倉ワイヤー掛け基礎 準備 階段石敷き 側溝石加工		
	26日 高倉ワイヤー掛け基礎 コンクリート打 階段石敷き 側溝石加工		
	27日 喬木 野地竹敷き 石垣 石積み 階段 石敷き		27日 高倉～石垣間の配管

	建築工事	植栽工事	電気工事
昭和六十一年一月	28日 外部側溝石敷き フール排水マンホール取付 29日 高倉軸組 外部側溝石敷き 階段石敷き 30日 " (第13回工程会議) 31日 高倉軸組 階段石敷き	30日 同上 清掃、安全対策等 31日 正月休み	
昭和六年一月	1月 正月休み 2日 3日 高倉タル木取付 畜舎野地竹取付 4日 5日 畜舎野地竹取付 6日 畜舎床張り (第14回工程会議) 階段石敷き アサギ清掃 7日 畜舎の床敷き ヒンブン割栗石敷き 8日 高倉カドもたせ組立 階段右敷き 竹ガヤ刈り (宜野座村 漢那のカニンドウ山)	4日 同上 5日 芝張面の不陸直し 6日 芝面や植込地の整形、 不陸直し 7日 同上 8日 整地、不陸直し	5日 高倉への予備線入線 畜舎入線 7日 水銀灯 ポール建柱入口右側 1本 入線器具付結線 2基分
昭和六年二月	9日 高倉鶴居、敷居取付 階段石敷き 10日 高倉カヤ葺き 11日 外部整地 12日 高倉カヤ葺き 畜舎 鶴居、敷居取付 13日 (第15回工程会議) 14日 高倉カヤ刈り込み 畜舎の瓦搬入 消火栓の掘削 ヒンブン石加工 15日 高倉カヤ刈り込み	9日 同上 生垣支柱グイ (L = 90 cm) 等搬入 10日 石垣内芝張り 植栽地の不陸直し 12日 高木植栽 植穴埋剤 (フクギ、ユ ウナ、シヨロ、センダ ン等用) 支柱立付け 芝生搬入 500 m ² 芝張り 13日 高木植栽の植穴埋剤に	9日 防犯カメラ設備配管 水銀灯基礎コン増打 10日 ケーブル吊架、入線 12日 防犯カメラ設備の配管 立上り部コンクリート 打ち 13日 防犯カメラ、モニター

		建 築 工 事	植 裁 工 事	電 气 工 事
		畜舎瓦葺き	支柱 (L = 1.8) の打込、取付番線結束 高木等の搬入準備 芝張不陸直し	テレピード搬入 防犯カメラ用配管、事務所外側
	16日	高倉カヤ刈り込み 畜舎瓦葺き 消火栓配管	自土用赤土ダンプ 2台 12m ² を搬入 自土掛け作業	事務所室内コンセント工事 14日 自火報ケーブル 母家→アシヤキ間、入線、結線 (総合盤 2面)
	17日	母屋、アサギの床換気口作業	14日 フクギ、シユロ、ユウナ等の支柱番線結束	防犯カメラ仮試写立合
	18日	ヒンブン石積 畜舎クラッシャー敷き	15日 芝張り、不陸直し (池側)	15日 防犯カメラ、モニター テレピード
昭和六一	19日	畜舎石流し台取付 母屋の床換気口作業	16日 育木植栽用29本全数量への支柱打込み、結束完了	取付、結線 自火報受信機結線 ・試験
十月	20日	母屋、アサギ建具取り付 (第16回工程会議)	搬入搬込み準備	16日 畜舎、電灯配線、結線
		高倉、チニブ、クラッシャー敷き	17日 フクギ、ユウナ、シユロ等の高木搬入	17日 インターホン結線
		ヒンブン取付	18日 フクギ、ユウナ、シユロ、センダン28本の植込み、土壤改良剤25kg	
		整 地	19日 高木への木柱結束 (28本) 終了	
		消火栓配管	下木の生垣支柱取り付位置出し	
二年	21日	畜舎赤瓦シックイ塗り ヒンブン目次取り 外部整地	生垣支柱クリ (L = 90cm) を40cm打込み唐竹取付	
	22日	畜舎赤瓦シックイ塗り 高倉アミ掛け ヒンブン目次取り 外部片付	20日 生垣支柱、唐竹取付、しゅろ繩結束 低木搬入	20日 消防検査
	23日	案内板の基礎打設 清掃片付	オキナワブツソーゲ、ニシキアリファ、ゲッキツ等の植込み	
	24日	設計事務所の仮検査	モクタチバナ (5本)、ムクゲ (5本) 搬入	
	26日	消火栓ボックス取付 手直し	生垣総長 66m オキナワツゲ (74本)、ニシキアカリファ (68本) ゲッキツ (71本)	
	27日	本検査		

	建 築 工 事	植 裁 工 事	電 气 工 事
		搬入 21日 低木の搬入、植込み、 結束 22日 タイサンチク（3株）、ホウライチク（15株）、 ネズミモチ（10本）搬入 土壤改良剤混入、低木 は1.5kg以上を混入 23日 リュウキュウハギ（5本）、タビオカ（5本）、 バナナ（3本）、パパ イヤ（3本）搬入植込み 入口側、不陸直し後、 芝張り 24日 フクギ周辺等不陸直し 芝張り準備 25日 フクギ周辺不陸直し後 芝張り等 雨の為目土が運べない 26日 芝張目土作業 手直し作業 27日 各樹地の清掃等を行い 竣工とする。	
昭和 六一 十月 二 年			22日 書類作製 23日 設計事務所へ書類提出 24日 設計事務所の検査

三) 建築工事日誌

昭和60年度(Ⅰ期工事)

12月21日 地鎮祭の内容、進行等の検討

23日 地鎮祭の準備

24日 地鎮祭、仮設小屋、便所等の打合せ

25日 工程表作成。監理事務所設置

26日 現場事務所にテーブル等搬入。工事の全工程打合せ。第一回工程会議

27日 工程表手直し

28日 工事用看板発注

30日 外注打合せ

31日 工事用看板設置

1月4日 久場家解体前の写真撮り

6日 外注打合せ

7日 久場家解体工事着手。足場設置。瓦解体。仕口のスケッチ。写真撮り

8日 久場家解体。瓦解体。小屋組解体。解体進行打合せ

9日 久場家解体。小屋組、内外部壁、床組等解体。瓦現場搬入。第2回工程会議

10日 久場家解体。軸組等解体。瓦現場に搬入。足場解体。資材を木工所に搬入

11日 久場家解体。石解体の準備の為に現場片付け

13日 解体された資材の選別、磨き

(打合せ事項)

使用不可の古材選別は役所、設計事務所立合いでやる。再利用できない古材は番号を付けて写真を撮る。仕口はスケッチをする。

14日 解体された資材の選別、磨き

15日 同上。アサギ木工事切込み

16日 同上

第3回工程会議

24日 同上。施工図(仕口)製作

2月14日

1 母屋材料加工。建具板、床板、壁板、天井板加工 第5回工程会議(17日)

17日

18日

同上

23日

24日

同上。壁板、床板、天井板加工

第7回工程会議(27日)

3月4日

5日 同上。アサギの土間コンクリート工事開始、クラッシャー搬入、敷きならし転圧
土壤処理、型枠取り。母屋、クラッシャー搬入。アサギと母屋の造方

6日 アサギ、配筋。母屋のクラッシャー搬入、転圧、土壤処理、型枠、配筋。コンク

- リート打設。
- 3月7日 建具製作準備。現場墨出し。散水、コンクリート養生
- 8日 前日と同様
- 9日
- 10日 建具製作準備 第9回工程会議（13日）
- 15日
- 17日 石を工場で加工
- 18日 同上。石を現場搬入 第10回工程会議（20日）
- 20日
- 21日 石を工場で加工
- 22日
- 25日 同上。石を現場搬入
- 26日 石を工場で加工。石工事準備（墨出し等）
- 27日 アサギ、木工事に必要な石敷き。母屋の石、工場加工 第11回工程会議
- 28日 母屋の石、工場加工
- 29日 同上。アサギの石工事と島石敷き
- 30日 同上。母屋の石、工場加工
- 31日 同上
- 4月1日 同上。東石すえ付け
- 2日 アサギ、石工事と島石敷き、東石すえ付け。母屋の石、工場加工。アサギの木、軸組搬入。
- 3日 アサギ、軸組、小屋組の立込み及び材料搬入。母屋の石、工場加工、第12回工程会議
- 4日 アサギ、軸組、小屋組の立込み。母屋の石、工場加工。杉板、野地板、野地竹搬入
- 5日 こどもの国の行事のため工事中止（中森明菜コンサート）。母屋の石、工場加工
- 6日 アサギ、小屋組、たる木、筋違い工事
- 7日 アサギ・外壁貼り。母屋の石、工場加工
- 8日 アサギ・外壁貼り、野地竹貼り。母屋の石、現場搬入
- 9日 アサギ・野地竹、野地板貼り、根本組み。母屋・石搬入、石敷き
- 10日 アサギ・外壁貼り、屋根ルーフィング貼り及び東石すえ付け。母屋の石工事、島石敷き。瓦材料搬入 第13回工程会議
- 11日 アサギ・床貼り準備、東石東石すえ付け及び瓦工事準備
- 12日 アサギ・床下クラッシャー敷き、床板貼り、瓦材料、杉板等搬入
- 13日 アサギ・瓦・棟上げ
- 14日 アサギ・内部の壁板貼り、瓦葺き開始。母屋・石工事、台所壁石すえ付け、東石

すえ付け。杉材、さお縁、廻り縁等搬入

15日 アサギ・内部壁板貼り、天井貼り、瓦葺き、給排水配管。母屋・石工事、東石すえ付け、軸組、小屋組材料搬入

16日 アサギ・天井貼り、廻り縁、ナゲシ取付け、瓦葺き。母屋・軸組立込み及び材料搬入

17日 アサギ・瓦葺き。母屋・軸組み、小屋組み立込み 第14回工程会議

18日 アサギ・外部回り清掃、クラッシャー敷き。母屋・軸組、小屋組立込み

19日 アサギ・内部、ナゲシ取付け、壁貼り。

20日 書類整理

21日 アサギ・石工事、内装工事。母屋・軸組、小屋組立込み

22日 アサギ・内装工事。母屋・たる木取付、野地板、ルーフィング搬入

23日 アサギ・内装工事、石工事、島石敷き。母屋・たる木、鼻隠し、野地竹、野地板取付け及び床下東石すえ付け。

24日 アサギ・石工事、仕上ハツリ、内装工事。母屋・野地竹、野地板貼り、床組の準備 第15回工程会議

(打合せ事項)

アサギの換気口は東西に設置する。仮塀の形状寸法を検討する。瓦の配置は色むらがないように、新古材は北側に配置する。

25日 アサギ・同上。母屋・野地竹、野地板、ルーフィング貼り、根太組
久場邸の整地作業

26日 アサギ・石工事、ハツリ仕上と壁板、雨戸等搬入。母屋・根太組、床下クラッシャー敷き転圧、外壁貼り及び瓦工事墨出し。

28日 アサギ・石工事、ハツリ仕上。母屋・床板貼り、外壁貼り、雨戸道取付け及び防虫液散布

29日 母屋・外壁貼り、床板貼り。雨戸道製作、石工事の仕上作業（石敷き、石積み）
瓦葺き準備及び壁板、床板、天井板搬入

30日 母屋・外壁貼り、床板貼り、天井貼り準備。石敷き、石積み仕上工事。瓦葺き準備、瓦棟上げ。廻り縁、さお縁、ナゲシ等搬入

5月1日 母屋・床板貼り、天井貼り。石敷き、石積みの仕上工事。瓦葺き。給排水工事埋設配管 第15回工程会議

2日 母屋・天井貼り、ナゲシ取付、内部壁板貼り。石敷き仕上工事。瓦葺き。雨戸搬入

3日 同上

4日 母屋・瓦葺き工事

5月6日 アサギ・水屋、炉製作。母屋・内部壁貼り、仮壇製作、ナゲシ取付け、石敷き仕上、瓦葺き

7日 アサギ・シックイ仕上、水屋、炉製作。母屋・同上

8日 アサギ・水屋、炉製作。母屋・内部壁貼り、仮壇製作、ナゲシ取付け

第17回工程会議

9日 アサギ・瓦シックイ仕上、水屋、炉製作。母屋・仮壇、床製作、石敷き仕上、瓦葺き

10日 アサギ・同上。母屋・同上、カマド工事

12日 アサギ・同上、建具搬入建付け。母屋・同上

13日 アサギ・建具建付、瓦シックイ仕上。母屋・同上

14日 アサギと母屋・清掃。設備工事、器具取付等。仕内検査。母屋・同上、建具搬入建付け

15日 収査。アサギと母屋の手直し及び清掃。母屋の瓦、シックイ仕上。ガラス搬入取付

第18回工程会議

16日

1 手直し、清掃

17日

19日 清掃

20日 竣工。設計事務所検査

造成工事に伴なう地盤調査

I) 調査概要

造成工事に伴ない擁壁設置箇所で掘削を行なった際、数ヶ所ですべりと崩壊現象が生じた。地盤調査は、その①原因を把握する資料②その後の対策資料③設計検討資料を得る目的で、調査ボーリングと土質試験を行い、調査は「新藤土質調査（合資会社）」に委託した。以下、調査報告書から資料を転載し紹介する（部分的に削除）。

II) 地形・地質概要

① 地形

本調査地区である沖縄市照屋地区は、沖縄本島中部地域に位置し、沖縄本島主軸を形成する脊梁部が南北に延び、脊梁部から東海岸及び西海岸にかけて不規則な地表面を有する斜面が分布している。

脊梁部は、沖縄市市街地から北中城村屋宜原方面にかけて分布する丘陵地で標高60m～120m程度を有している。調査地区的沖縄こどもの国地区は小規模な丘陵地形が発達し、底の広い船底状の横断形状を有し、その谷部に越木ダムが形成され部分的に泥質堆積物特有の谷地形を観察することができる。

② 地質

調査地の地盤を構成する地質は、新第三紀鮮新世である島尻層群の泥岩と、この島尻層群に由来する冲積堆積物である。

島尻層群は、新第三紀～第四紀初頭にかけて海底に堆積した泥岩及び砂岩の総称で沖縄本島中・南部に広く分布し、この地域の基盤を形成している。調査地付近では褐色の砂岩が分布し、東南方向（太平洋側）に向かってやかな傾斜をもっている。この砂岩は、直接地表に露出する部分では上層部に褐色の風化帯を伴うのが常であり、今回の調査ボーリング地点においても、色調は暗青灰色であるが風化帯を若干分布していた。

本島中南部地域では、この島尻層群の上位を第四紀琉球層群（琉球石灰岩）が不整合に覆うのが普通であるが、調査地点においては欠如している。洪積層は、台地起伏面を開拓する谷底に小規模ながら分布するこの層は島尻層群の泥岩に由来する粘性土から成り所々に泥岩の円錐片を点在させている。

III) 調査業務内容

- | | | |
|--------------------------|-----|------|
| (1) 調査ボーリング | 3ヶ所 | 計28m |
| (2) 標準貫入試験 | | 計28回 |
| (3) 不攪乱試料採取（シンオールサンプリング） | | 3試料 |
| (4) 室内土質試験 | | |

a) 物理試験

比重試験・液性・塑性限界試験

b) 力学試験（三軸圧縮試験）

1.7 使用機器

(1) 試錐機	加納 50型	1台
	大野 100型	1台
(2) 標準貫入試験器	レイモンドサンプラー	1式
(3) 室内土質試験器		

土質工学会基準・JIS規格に準じて実施。

IV) 土質標本

地質調査ボーリング時に得られた貫入試験試料は、標本箱に納め整理した。

〈ボーリング調査〉

調査孔番号	施工深度(m)	標準貫入試験(回)
No. 1	10.25	10
No. 2	7.35	7
No. 3	11.23	11
合計	28.83	28

端数切り捨て 28.00m

〈土質試験〉

土質名	数量
粒度試験	3
比重試験	3
液性限界試験	3
塑性限界試験	3
三軸圧縮試験	3

V) 調査ボーリング結果

別紙「調査位置図」に示す3ヶ所で実施したボーリングの結果に基づいて調査地地域の地盤の地層(土質)構成とその分布状態を想定したのが、後述の「土質推定断面図」である。

本調査地における地層(土質)の層序としては次表のように区分される。

<調査地の地盤層序>

地質時代		模式柱状図	地層名(土層名)		区分記号	主な土質	
現世			盛土・埋土		+	礫混じり砂質粘土・粘土 ・シルト質砂	
第四紀	更新世		洪積世	丘陵性堆積粘土		粘土	
新第三紀			島尻層群	泥岩	+	シルト質砂	土

(1) 埋土

本層は、起状のある旧地形面の凹地に人为的に埋土されたもので、埋土材は全て現地発生土のシルト質砂及び粘土からなる。埋土部の層厚は3m～9mで、N値は3～12の範囲内で示しており、全体的には6以下が多い。又、所々に砂岩の固結岩塊を転在させている。

(2) 盛土土

本層は、主に現工事に伴う盛土で本調査孔No.3地点のみの分布で、層厚約2.5m N値3～4の範囲内で粘土を主とし島尻固結片及び腐物を混入する。

(3) 洪積粘性土

本層は、調査地域の現地盤層と考えられる地層で、粘土を主体とする丘陵性の堆積土でその分布は0.55m～3m程度で、N値は8～12を示し、中位な層状を示している。

(4) 島尻層群

本層は、本島中部地域の基盤を形成する地層で、泥岩及び砂岩から成り、本調査地区においては、地表面では泥岩部は分布せず、砂岩層未固結細粒砂層(通称ニービ)が広く分布しているが、深部に伴い泥岩(固結粘土)が優勢になり、ボーリング結果においても基盤は泥岩層となり、N値22～50以上を示す。

小 結

以上、「赤瓦屋移築保存工事(造成)地盤」の調査報告書から資料を一部転載して紹介した。調査報告書は、下記の目次に基づき総頁数80ページにも及ぶ、量的に多いためここでは紙数の都合で全部は紹介できない、なお、詳細資料は当教育委員会保管の上記調査報告書に委ねたい。

項目	
まえがき	1
調査地案内図	2
調査位置平面図	3
1. 調査概要	4
2. 地形・地質概要	6
3. 調査ボーリング結果	7
4. 土質試験結果および土質定数の決定	9
5. すべりの検討	
5.1 地盤調査による地すべりおよび崩壊現象の把握	11
5.2 安定計算によるすべりの検討	13
6. 地盤の支持力および沈下量の検討	
6.1 設計定数の検討	17
6.2 支持力の検討	17
6.3 沈下量の検討	
・土質推定断面図	22
・ボーリング柱状図	23
・調査孔含水量測定データ	26
・すべり算定データ	29
・土質試験データ	36
・村録	69
・調査状況写真	71
・試験状況写真	80

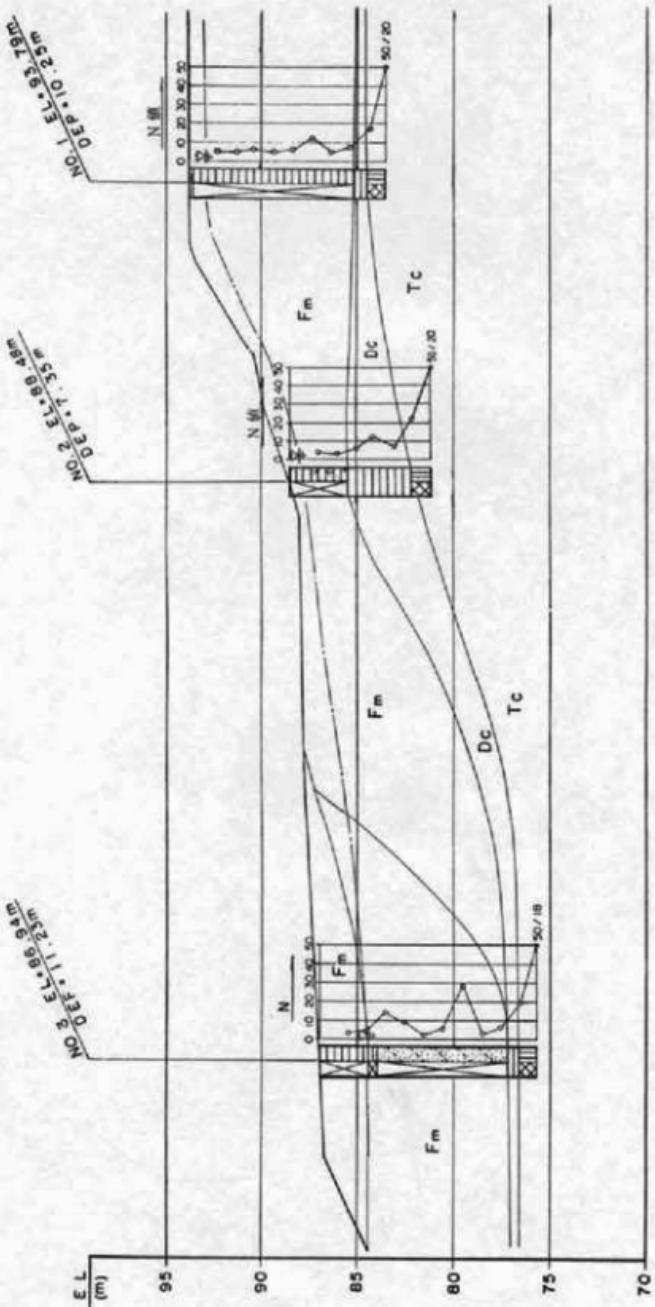


造成全景（南より）

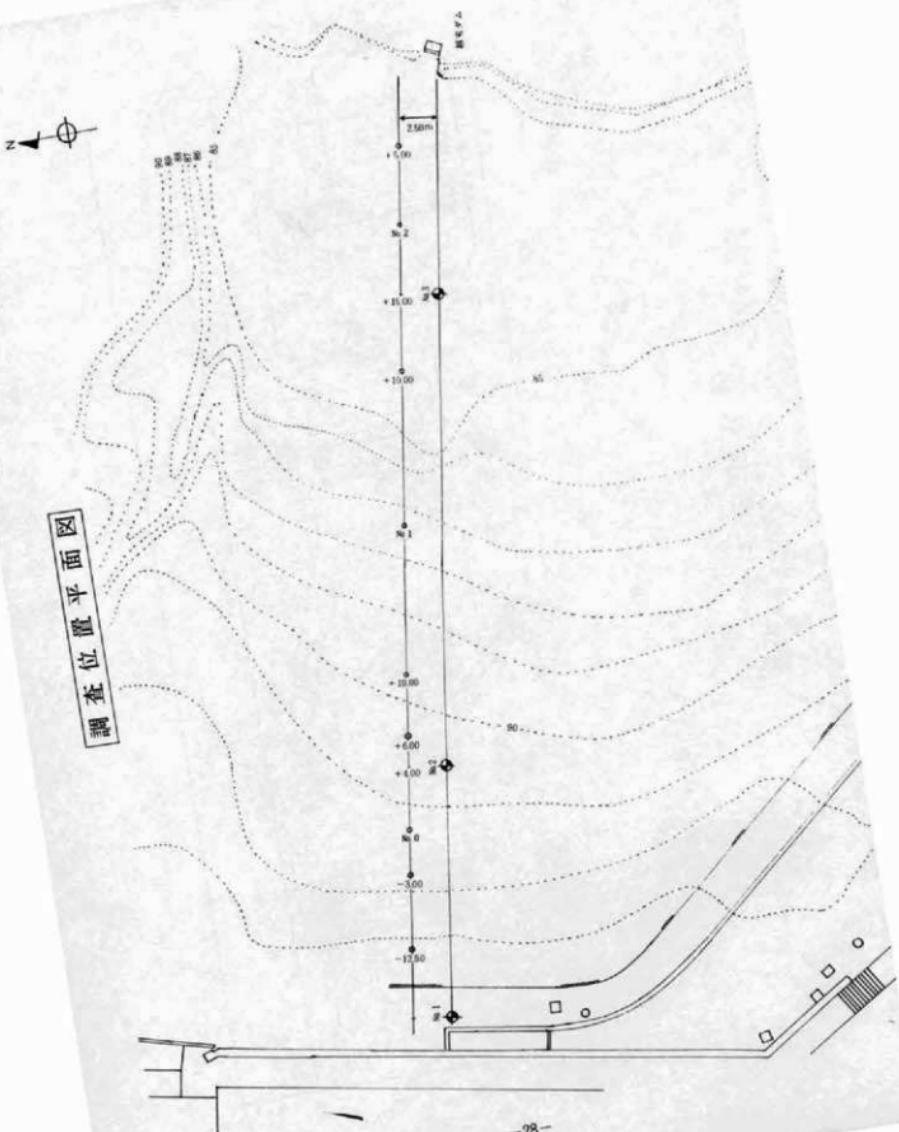


造成全景（東より）

ボーリング柱状図



調査位置平面図



旧久場家母屋の解体と移築の概略

旧久場家母屋は沖縄市室川1丁目2番20号に所在。所有者は、久場良昌氏（佐吉1丁目8番14号）で昭和60年度に沖縄市に寄贈された。次に、解体前、解体、復元等の概略を述べる。

I) 解体前

母屋は大正13年に建築され、床面積（104.72 m²）・建築面積（127.06 m²）の木造赤瓦家である。保存状況は、柱脚、小壁とも腐食が進行、小屋組も風化しぬみが見られ、瓦は剥げ落ちそうな状態で一番座の東側、一番座から二番座の裏座、三番座はコンクリートで増築されていた。使用材料は、化粧材がチャーキ（イスマキ）、構造材はイーク（モツコク）が使用されており、一番座、二番座の化粧構造材以外の材料は転用材が多く柄差し柄穴等が一部残っていた。

II) 解体

建物解体は昭和60年1月7日から11日まで要した。作業は瓦取りはずし後、各部材へ番付を行い、小屋組解体・軸組解体・床組解体の手順で進行し、各部材は解体後、保存小屋へ、瓦は瓦大工が保存した。骨組材料は選別を行なったが再使用可能な材料は3割で、特に床板・壁板・天井板等は傷みがひどく再使用は無理であった。東石・石壁・敷石等の石材は大方使用できた。（工事経過参照）

III) 復元

建物の復元は昭和60年3月5日から5月20日まで要した。復元に際し骨組材料は3割しか古材が使用できなかったので残りは新材で補填し、特に野垣竹・床板・天井板・壁板等は全部新材を用いた。なお、完成後は古色材を一切使用しないで新材と古材が判然と区別できるようにし、瓦は傷みがひどいのと解体中の破損品が若干見られたので、その穴埋めを瓦大工保存の在来瓦を再利用させてもらった。

アサギ

アサギは、一般的に「一番座の前方横に建築された離れ座敷で、俗に前の家ともいう。（中略）、一般的には、息子が嫁を娶った時、あるいは老人の隠居部屋または来客の宿泊などに用いられた。」（『民家』西日本新聞社 昭和63年2月25日）

模築の建物で床面積（43.55 m²）・建築面積（64.28 m²）の木造赤瓦家で、建物の施工は母屋と同時に3月5日に造方を行ない竣工が5月20日である。（工事経過参照）

マチフルの解体と移築の概略

概略

移築したマチフル（豚舎）は今から約60年前に作られた石造の有形文化財である構造上の特徴として、各部は櫻で連絡し豚を飼育する部分の半分はアーチ構造の天井を被せている。豚舎と廻がセットになり、人糞は豚が処理する仕組で市内での使用事

例は第2次世界大戦前から終戦直後のある時期までで、勝手は県内一円で見られた。

調査地の所有者は、沖縄市中之町2丁目236-3、平田嗣友氏である。マチフルの移築前の所在地は、字白川に属し、この一帯は第2次世界大戦前まで屋敷集落を形成していたが、終戦後は米軍基地に接収され、現在、黙認耕作地となっている。寄贈は兄の平田嗣豪氏（字美里499番地）を介して昭和58年度に行なわれ、3年後の昭和61年度に調査と移築復元が行なわれた。

I) 調査

調査は考古学的発掘調査で行ない、①伐採②グリット設定③発掘④実測⑤写真撮影の順序で昭和61年7月15日から9月3日まで実施した。次に各作業の概略を紹介する。

①雑草・雑木等の伐採（7月15日～17日）

②グリット設定（7月18日）

マチフル東西ラインの中心をグリット主軸線に設定し、それから東西・南北2m四方一区画のグリットを基盤状に造構に被せた。各グリットは便宜上、東西にアルファベットのD～G、南北に算用数字の4～8の番号を付けた。

③発掘（7月21～22日・8月15日）

マチフル内部と周辺、そして肥溜（クエーチブ）の表土剥ぎを行なう。造構はほとんど地表面に露出し、土の堆積は薄い部分で1cm前後、厚いところは20cm前後を測るが、肥溜は例外で内部は30cm前後の石灰岩壁が投げ込まれていた。

④実測（7月22日～8月25日）

実測は次の手順で行なった。

A. 平面図作成の造り方（7月22日～24日）→実測（7月25日～29日・8月4日）



B. 正面見透し図作成の割り付け（7月30日）→実測（7月31日）

C. 西と北方向、両面の見透し図作成の割り付け（8月7日）→実測（8月7日・8日・11日～13日）



D. 全景・細部・出土遺物等の写真撮影（8月12日）

E. クエーチブ（肥溜）図作成の造り方（8月15日）→実測（8月18日～22日）



F. 写真撮影の補足（9月3日）

II) 解体

解体は10月10日に実施し、所要時間6.5時間で、作業に先立ち造構各部に算用数字の番号を記入したガムテープを貼り、図面上も同一番付図を作成した。施工は昭和61年度工事を担当する（有）嘉陽田建設が主体となり、石大工（勝連町平敷屋の丸雄建設）の方々の技術と機械

力等を投入して行ない、構造上、特徴ある楔部分と材質などを破損しないよう慎重を機して進めた。

Ⅲ) 復元

解体後はダンプでこどもの国の現場に搬入し、①屋敷内の位置選定②基礎掘りと栗石敷き③復元の順序で、昭和61年10月17日から10月28日まで作業を実施した。次に各作業を紹介する。

①屋敷内の位置選定

県内の事例として屋敷が南面する場合、敷地の西北隅に建てるのが一般的であるという観点から母屋の西側に決定した。

②基礎掘りと栗石敷き（10月17日）

基礎掘り後、床面に拳大の栗石を敷き直上に砂を被せ、更に厚手のビニールを表面に覆い、その上にマチフールの造構を備え付けた。

③復元（10月20日～28日）

復元は10月20日～28日まで実施し大まかな作業の流れは図版のとおりである。今回は頁数の都合で記述・図面・写真等の詳細な報告は省略し、先に紹介した項目等も含めて将来、正式な調査報告書を発刊したい。

④現状変更

クエーチブ（肥溜）に水が溜まらないよう18cm直径の排水用ビニールパイプを埋設。パイプは隣りの畜舎の排水パイプと途中で合流し、母屋のメーナー（前庭）土中を横切り、ジョー（門）前面のマンホールに連結される。

井戸

水道普及以前は日常の生活用水の機能を帯びた井戸も、水道の普及で無用の長物と化し、埋められ、そして新たに造られる事も少なくなった。また私達の身近かでも次第に消えつたり、井戸の造構・造る技術等が文化財的性格を帯びてきているのはたしかである。

井戸は、母屋のメーナ（前庭）に位置する。模築で構造は石造、材質は石灰岩である。施工は、①基礎掘り②基礎工事③井戸内部の石積④地上部の工事の順序で進行した。次に各作業を述べるが、構造上の名称と作業名は調査不足のため仮称で紹介する。

①基礎掘り

石積工事中の土留めと安全柵を兼ね6m四方にバイルを密に打ち込み、その内側を10m削削したが周辺の地盤が軟弱で不安定のため壁が序々に崩れを生じたので、状況検討後の対策として枠内を赤土で6m埋土し転圧して基盤の強化を行なった。

②基礎工事

石積の根石になる部分で井戸中心から半径1.50cm内は大きさ50cm前後・厚さ20cm前後の平石が根方として据えられ、その周辺は石灰岩躰を敷き詰めた。

③井戸内部の石積

石積作業は、井戸中心線決定後に3段階の工程を経て地上部に達する。次ぎに各段階の施工概略を述べる。

A. 第1段階

石積み立ち上がり部分で、形状は半径80cm、高さ150cmの円筒形である。5段の石積みと裏じめは3~10cm前後大の栗石とセメントで固め、更に周囲は赤土で埋土し転圧した。以下の第2~3段階でも裏じめの材質・施工法等は大体同じである。

B. 第2段階

第1段階石積の最上部から内面に傾斜して石を積む部分。公配60度、高さ85cmで裏じめの処理は第1段階と同じである。

C. 第3段階

第2段階石積み最上部から地上に至る部分。形状は半径45cm、高さ150cmの円筒形で第1段階からここまでに至る工程は足掛け8日を要し、完成断面は長頸の瓶に類似する。

④地上部の工事

地上部の工事は、井戸縁部分・石柱建立・周辺の石敷・井戸縁背面の石積の手順で行なわれた。次に各工程の概略を述べる。

A. 井戸縁部分

水を汲む場所で筒状になっている。筒は一枚ではなく8分割で、高さ70~100cm、厚さ20cmの加工石を取り付け、縁上場から井戸内部の底まで4.10mである。

B. 石柱建立

井戸縁部分の両脇に、高さ2m、幅25cm直四角の石柱を建てる。この石柱上部間につるべを下げるゴルマー（骨車）取付の桿木を渡す。

C. 周辺の石敷

つるべで水を汲み、洗い物、水の搬出等を行なう場所で、石敷を行ない周囲は四角石で縁取りし面積は5.40m²である。

D. 井戸背面の石積

両脇の石柱背面と井戸縁の南半分を加工石で野面状に積み取り固む。

畜舎

畜舎は、牛・馬・山羊（方言名・ヒージヤー）等の家畜小屋で、総称して「イチムシヌヤー」（方言名）と言う。模築の建物で床面積（31.59 m²）・建築面積（54.73 m²）の赤瓦建物で具志川市赤道・久田友光氏宅（第二次世界大戦前の建造）の畜舎をモデルにしたが、洗面所を新設した分だけ面積が实物より増えている。

模築に際しては、現場での実測調査を創建設計事務所が行ないそれをもとに図面を作成した。施工は①基礎工事②石柱建立③壁石建立④小屋組⑤瓦葺き⑥石敷・肥溜・洗面所取付等の順序で進行し、④~⑥の施工は新材料を用い、石柱と壁石は古材を利用した。

高倉

高倉は穀物倉で、脚柱が4・6・9本、高さ1.70m前後の高床式でねずみと湿気を防ぐ構造の造りである。

屋敷外に位置し向きは東である。横策で床面積6.94m²・建築面積10.85m²、大宜味村嘉如嘉461番地・平良真次氏所有の6本柱高倉をモデルにし、現場の実測調査を市建設部建築課・文化課・創建設計事務所が合同で行ない、図面は後者が作成した。以下で用いる細部名称は、「南西諸島の民家」(相模書房)と、茅葺きの方々(勝連町平敷屋)から聞き取りしたの併用して紹介する。施工は、A基礎工事・B下部構造組付・C上部架構組付と小屋組・D竹茅葺き・Eチニブ編み・Fはしご作成の順序で進行した。(高倉断面略図参照)

A・基礎工事(仮称)

床堀り後、セメントで礎石(イシジ)用の台座を6個作成、その周囲4隅にセメントで台風対策のワイヤーロープを引っ掛ける台座を4個埋設した。

B・下部構造組付(仮称)

イシジ・柱・貫の取付。施工は、台座にイシジ取付後、柱を立て次に柱間は貫(NUK i)で連結し、貫の末端は栓をし固定。寸法は柱が直径210前後・貫は75×90、材料は両方ともチャーギを用いる。

C・上部架構組付と小屋組(仮称)

組付は、①受梁(Uke b a i)②脚柱(Dō b a y a)③胴桁(Dō g e t a)④サス(Sas u)⑤キチモタシ(Kichimotashi)と下柱(Sagekichi)⑥床(yukaita)⑦受梁(Uke b a i)⑧栓(kichi)⑨広小舞(kusa hane)⑩クビモタシ(kubimotashi)とシマルー(Shimma L)の順序で進行した。

①受 梁

脚柱の上に掛け一巡する。寸法は210×110・材料はチャーギを用いる。

②脚 柱

先端がY字状の自然木の又木を継ぎに使用し、上述の受梁に尻を通し柄差しとする。

寸法は直径105前後・材料はイークを用いる。

③胴 桁

胴柱の先端間に掛け一巡する。寸法は105×105・材料はチャーギを使用する。

④サスと棟木

サスと妻サスの尻は胴桁に差す。先端は妻サスは棟木の下に差し、それ以外のサスは棟木の上で交叉し釘留めする。寸法は、サスが直径80前後、棟木は105×105、材料は両方ともチャーギを用いる。

⑤キチモタシと下柱

サスの上からキチモタシを横に渡し屋根4面に巡らし釘留めする。その後、棟木の上から4隅にサスと同じ勾配で棟を縦に配りキチモタシに釘留めし、更にキチモタシと棟はスルガーナー（シユロ繩）でサスに縛り上げる。寸法は、キチモタシが直径35前後、下棟は直径45、材料は両方ともイーグを用いる。

⑥床

棟と平行に厚手の板を張る。寸法170×60、材料はチャーギを用いる。

⑦受 梁

上述①紹介の受梁とは異なる。キチモタシと下棟を軒近くで受け、寸法は75×90、材料はチャーギを用いる。

⑧棟

先端は棟木の上で集合し、尻手前が上述⑦紹介の受梁に固定される。直径35、材料はイーグを用いる。

⑨広小舞

棟の軒先近くを4面巡らす。直径60・材料はイーグを用いる。

⑩クビモタシとシマルー

クビモタシの先端は⑦の受梁に、尻は①の受梁に取り付けたシマルーに柄差しする。寸法は、クビモタシが35×90、シマルーは60×90、材料は両方ともチャーギを用いる。

D・竹茅葺き

竹茅葺きは、①竹茅刈り②ユチブクとウシブク取付③竹茅葺きと茅の刈りそろえの順序で進行した。次ぎに概略を述べる。

①竹茅刈り

竹茅は宜野座村瀬那カニンドウ山が産地で、長さ150mの竹茅を500束（直径35cmの束）搬入した。

②ユチブクとウシブク取付

ユチブクとウシブクは屋根を葺く下地になる。屋根4面にユチブクを横に渡し、その上からウシブクを縦に配り、両方ともスルガーナーで棟にらせん状に巻き固定する。材料は直径10前後の山原竹を2～3本1組で用いる。

③竹茅葺きと茅の刈りそろえ

竹茅葺きは、A) ニーブチ、B) ホンブチ、C) イリチヤ葺きの順序で進行した。

A) ニーブチ

ニーブチは、屋根の軒まわりをニースフア（n i i n u h w a・北）→アガリ（a g a r i・東）→フェー（f e a n v h w a・南）→イリー（i l i・西）の順序で一巡し、竹茅の根を軒先に向かって葺く作業をいう。

作業は、屋根外側（表）と内側（裏）に分かれる。外側では竹茅を軒下から受けとった後、竹茅をばらに並べその上からウシブク（山原地方に産する自然木を利用。根の部分はとがらす）を横に渡しあさる。内側は先端にスルガーナーをおした木製の針（方言名・ヤーフチバーイ、寸法直径25・長さ900）を外側に突き刺す。その際、お互いに合図し外側は木製の針を受けとり、ウシブクの上からスルガーナーをまわし、再度、内側にスルガーナーも一緒に貫通させ一巡する。外側と内側で掛け声を掛け合いながら、外側は足と植でウシブクを数回叩き竹茅を締め、内側はスルガーナーを手で引き締め棟に強くからげる。以上の作業を何回も繰りかえしてニーブチを完了する。

B) ホンブチ

軒まわりのニーブチが済み、次はホンブチである。ホンブチはニーブチ直上の勾配部分から棟に至る葺上げで、作業は上述と同じ、違うのは葺き重ねで竹茅の根がニーブチと逆方向の棟に向かうことである。ニーブチからホンブチに至る間に竹茅の葺き種ね回数は、都合8段で勾配は45である。

C) イリチヤ葺き

断面かまぼこ形を呈し、長さ1.50m・高さ80cmの屋根頂上の棟葺き部分を「イリチヤ」という。ニーブチとホンブチが屋根勾配を覆う作業であるのに対し、イリチヤ葺きはその頂上（棟）に水平に竹茅を被せる作業で、桁と梁方向に交互に4回重ねする。重ね途中とイリチヤの外周にはアンダガヤ（ヒトモトスキ）を混ぜるが、アンダガヤは油っぽい性質を帯びるのでその性質を利用して雨もりを防ぐためである。棟の横（桁方向）に4本のジーファ、縱（梁方向）に2本のユングを刺し、各重ねとも1.50m前後の高さに達したらジーファによりつけたスルガーナーを強く引き締め、仕上げはイリチヤアンムン（アマダ）で取り囲み、調整して固定する。その後、茅の刈りそろえの作業を行なう。

イリチヤアンムンはすぐれ社を呈する。両端はアディク木、中間は山原竹（5cm間隔で配り）を用い、結びはスルガーナーで行なう。作製はホンブチの片手間に行なわれた。

E・チニブ（Chinyubu）編み（網代）の竹壁

チニブ編みの竹壁は古米、アナヤーの壁・高倉の壁・屋敷囲い・ヒンブン等に用いられ、また網代のモチーフはバーキ（b a a k i・ざる・かご）にも見られる。

ただ竹を配って編んであるのではなく綾杉状に密に編み、できあがりは幾何学文を呈する。一種の造形美さえ感じられ、県内本島の残在する高倉の壁はこの手法であるが、北側の奄美大島は板壁作りである。

近年、市内ではチニブ編みの竹壁は確認したことがない、また編める方も年々少なくな

っているのが現状であり、今回は名護市の宮城栄吉氏（字久志 841番地・昭和5年4月15日生）と宮里健一郎氏（字久志 847-3番地・昭和16年3月6日生）をお願いした。以下、製作の順序と概略を述べる。

①山原竹刈り

②材料の選別

極端に大きい竹は取り除き中間程度の太さの若竹（編む方の直観による）を用い、節のデコボコは鎌で削り調整する。

③チニブ編み

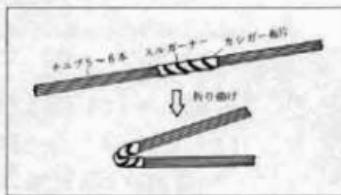
チニブ編みの工程を便宜上、仮称で紹介する。

A・横束作り

竹を5・6本束ね真中にカマジー（かますのこと）の布片を巻きスルガーナーで強くからげ、次ぎに竹束の中央部から折り曲げる。チニブ編みの棒上下に用いられ、チニブ（山原竹）を鉄む役割をし必要寸法に応じてチニブ編みが長い時は途中で竹束を中継ぎする。

（製作図解）

A. 横束作り

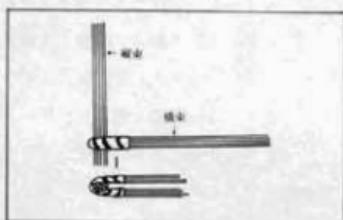


▲

B. 縦束を鉄む

B・縦束を鉄む

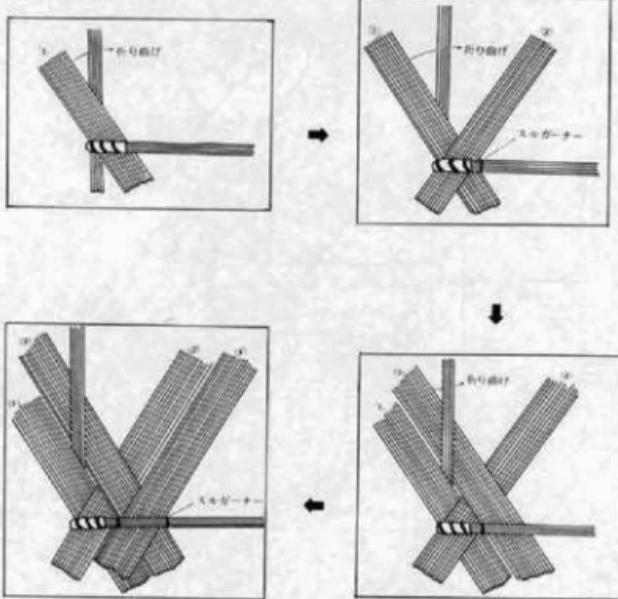
竹束数は上述と同じ、横束の折り曲げ部分に鉄みチニブ編みが済んだら末端も同じ処理をする。



C・チニブ編み

チニブ（山原竹）を使って具体的に編む作業で、本土で網代編み^{あじかみ}という。編み方は、横束にチニブを鉗むが、その際、前者に対して鋭角と鈍角に互いに交互に配って、その繰り返しで網代文様を形作る。

C. チニブ編み



(凡例 ①→④……編む順序)

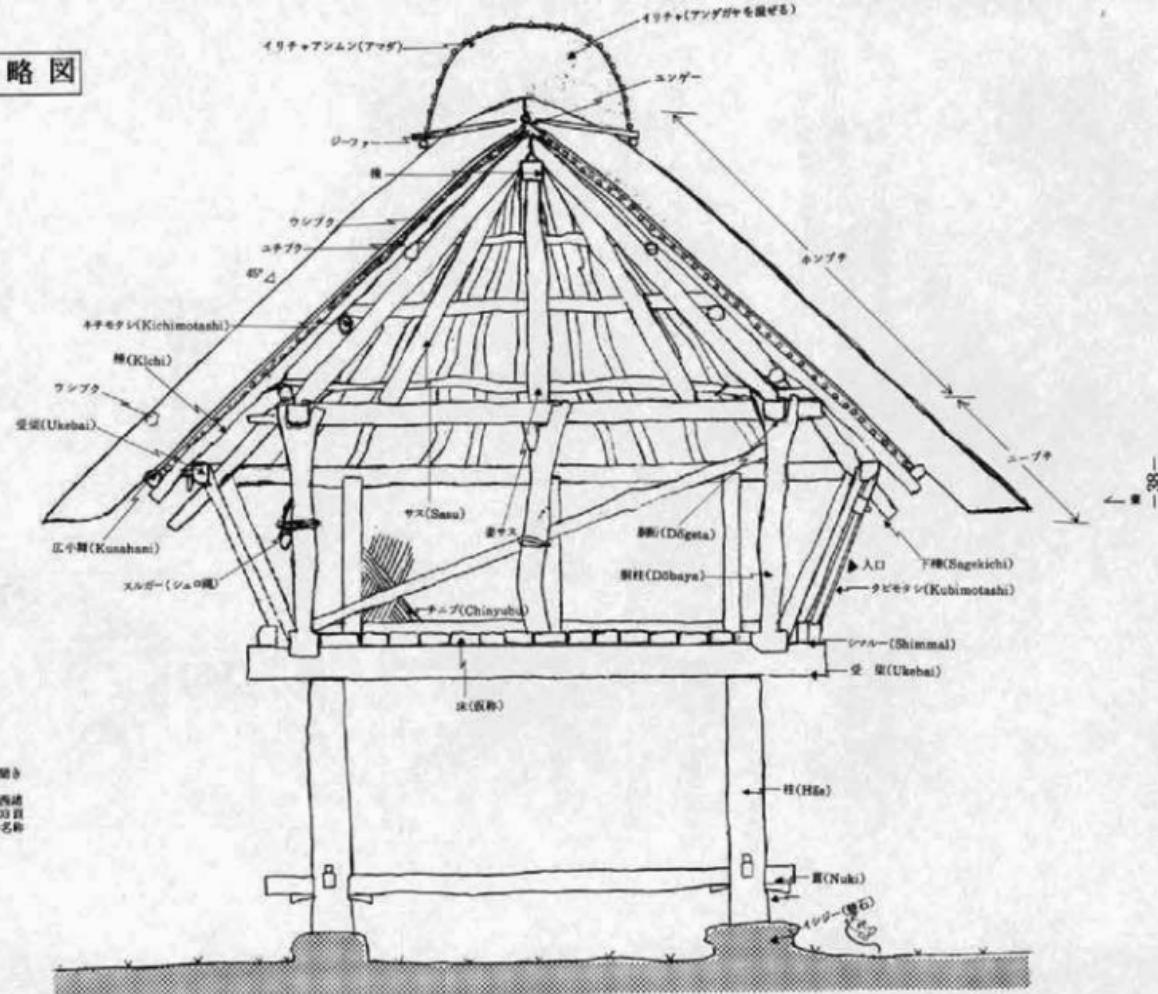
以下、同じ網代編みの繰り返し

F・梯子の作成

梯子は穀物等を搬入する際の足場で直径 150・長さ 2,000 のチャーキを割り貫いて作成する。足を掛けて上る階段は 5 段で、その先端は高倉入口の受梁に引っ掛ける。

高倉断面略図

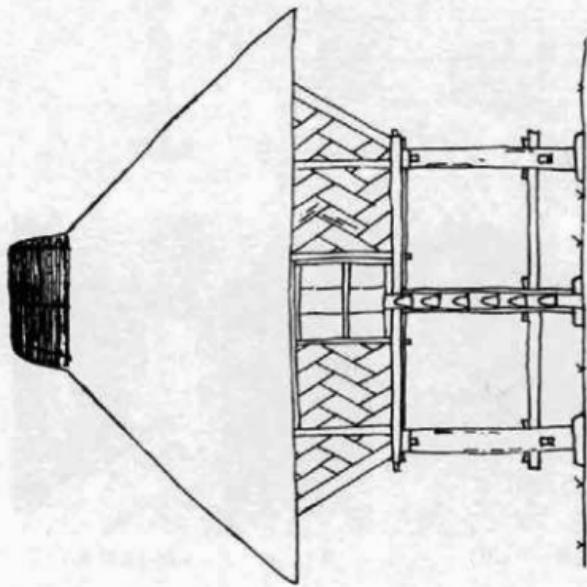
西 →



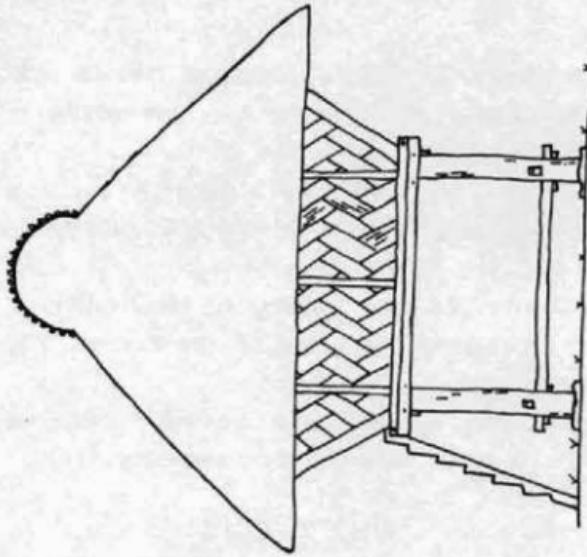
凡例

- カタカナ表記の表記は複元中に聞きとりした名称
- カタカナとローマ字表記は『南西諸島の歴史』、相模書房発行の203頁第2-2-2回沖縄門氏宅高倉の名称を用いた
- 図はフリーハンドによる。

高倉竣工図



東立面図



北立面図

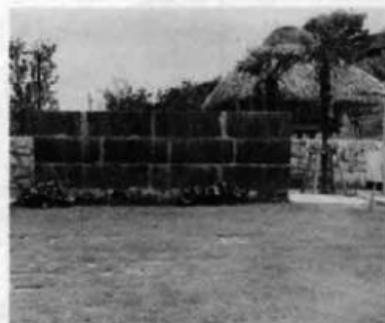
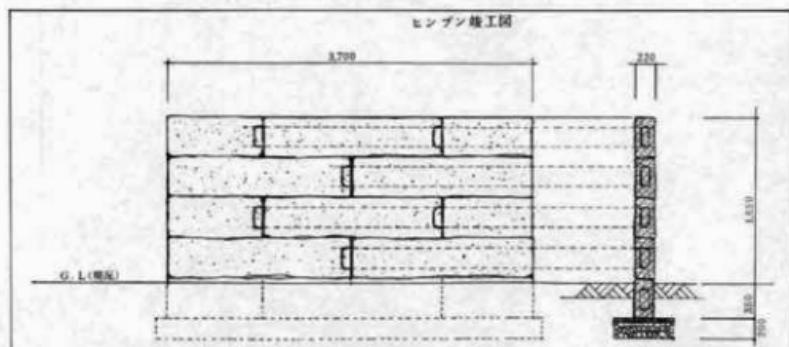
2 m
0

ヒンブンは、「屢敷の正面の門と母屋のあいだに設けられた屏風状の垣。呼称は中国（北言語）の屏風（仕切壁・開い障子・屏風などを意味する）に由来する」（『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社）といわれる。

当園のヒンブンは久場良昌氏の提供。母屋とセットで復元し石材は港川石を使用、寸法は縦（高さ）1.65m・横3.70m・厚さ22cmをはかる。高さは若干変更しており、基礎部分で55cm追加している。

南面の石垣はあいかた積みの構造で、ジョー（門）と堆肥搬入口の2ヶ所入口を設置した。石材は具志川市地荒原に産する琉球石灰岩を用い、寸法は全長32m、石垣の高さ1.40m、石垣天場の幅70cmをはかる。

なお、他の東面・北面・西面の石垣は、石材と構造の様相が上述と全然異なる。南面が沖縄本来の石垣の雰囲気を意図しているのに対し、残りの三面は擁壁の機能だけで終っている。



竣工／ヒンブン／全景（北より）



竣工／ヒンブン全景（北西より）

植 裁

第二次世界大戦以前の沖縄の屋敷囲えは台風（夏）襲来と防寒（冬）を兼ね、周囲を塀・石垣・屋敷林等で囲うのが一般的であった。それは屋敷囲いとして茅葺き・赤瓦等の建物とマッチし沖縄独特の集落景観を醸していた。このような風景も年々、減少傾向にあり、また極端に分布が限られてきているのが現状で、近い将来、特定の保存地区と記録写真でしか見れなくなることが充分に察知される。

当ふるさと園もつとめて景観と雰囲気が先述に合致するよう、屋敷内外に①台風と防寒②日常生活と結びついた植物③造型美等を意図した高木・低木・地被などの植栽を行なった。その内訳は、高木植栽が5種類・中低木植栽が13種類・地被植栽が5種類で、景観と雰囲気が建物とよりマッチするのは10年、もしくは20年後かもしれない。（植栽配置図・植栽一覧表・参照）



竣工／フクギ



竣工／ユウナ／
バナナ

技術伝承

概要

戦後、経済の高度成長期と時を同じくして伝統的な建物が、自然と一緒に調和のとれた風景が、我々の前から日をとうごとに姿を消しつつある。それは景観の影響ばかりでなく、それに伴う優れた伝統的な技法、工法が次第に失われていくことを意味し、ひいては文化遺産が喪失することを意味しているともいえる。

沖縄の風土の中で築きあげられてきたそれらの技術文化は、かつては特殊技術の技能者ということで重要視されていたが、新しい建築材料の開発とともに技術を生かす場所が失なわれ少くなり、技能者も高齢化し、それに伴う後継者の育成、技術伝承もむずかしい段階にきていている。

そこで、今度「ふるさと園」に移築もしくは模築した建物を造るにあたり、伝統的な技術を駆使して下さった石大工と、赤瓦を葺く時になくてはならない漆喰の製造にスポットを当ててみてみることにした。

I) 石大工

沖縄の地質面積の30%は石灰岩で占められている。その為か、沖縄にはすぐれた石造建築物が数多くある。それは、我々の祖先が沖縄の気候風土の中から、身近でしかも最も容易に手にはいり、丈夫で耐久性に優れているもの（石灰岩）に目をつけ、それをうまく利用し生み出したからにはかならない。

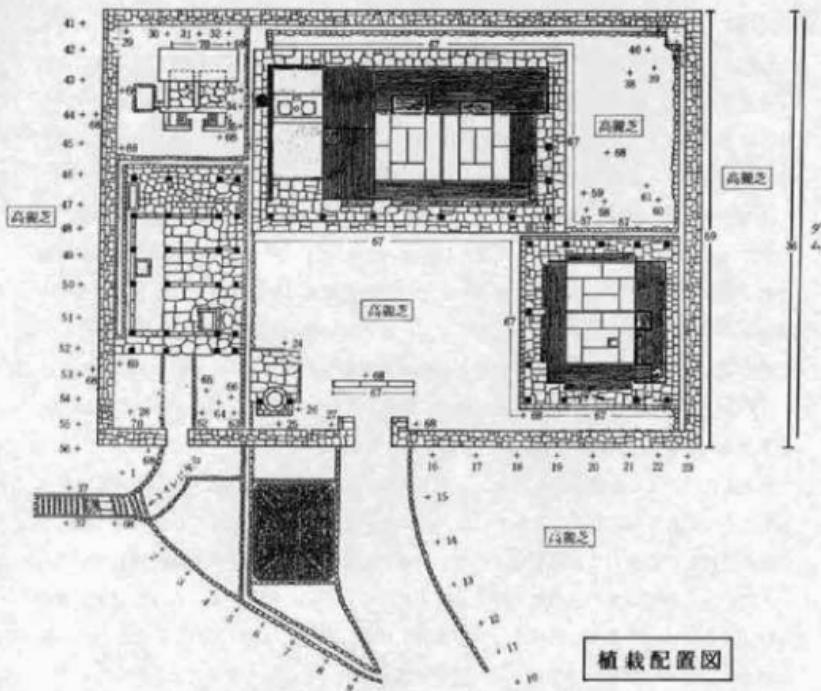
それでは、それらの石造建築を生み出していく石大工についてみてみることにしよう。

(I) 石大工の仕事と工程

石大工の仕事は重労働の上に、夏は炎天下の中、冬は木枯らしの中と外で行なわれる仕事なので大変なものである。

作業工程においても、現在では電動カッターやクレーンなどを用いることもあり、昔ほど人力を必要としないまでも、ひとつ、ひとつ石を積み上げてゆく作業は心と技が一つにならないとできない仕事である。

使われる場所の石を選択し、石斧を用いて割り、ノミで削り調整して1つの石の顔を造ってゆく。それは分担して行なわれ加工された石がある程度できると建造する場所に運び積み上げていく作業に入る。積み上げた石を調製する時は主にバールが用いられ水平器には必ず目を向けている。数人の職人によって重い石を積み上げていくわけだから、ちょっとした油断も許されないばかりか、お互いの心がひとつにならないと出来ない仕事である。その時の職人の顔というものは真剣そのものだし、ビーンと張り詰めた一種異様な空気が漂い、見ている人でさえも一瞬息をとめてその工程を見守っている。作業が進むにつれて職人の顔はいつしか石粉で真っ白になり、1日の仕事が終わる頃は頭の上から爪先



植栽配置図

No.	名 称	規 格	株 间	株 号	植 栽	株 间	株 号
	植 栽 工 事						
高木 植栽工							
1~20 フ ク キ ツ	H=1.5 C=0.70				37 ツバキノキ	0.60/m	12
21 テ ピ ド ブ	H=1.5 C=0.73				38 フ ッ プ ノ	0.60	6
22 ハ イ ノ ヴ	H=1.5 C=0.73	3			39 オオイ テ ピ	1.5m H=1.5 C=0.73	2
23 ハーク リーダー	H=1.5 C=0.75	1			40 ア ニ レ ピ	0.60/m	100
24 ハ ウ ノ ツ	H=1.5 C=0.70	3			41 高木 一 等	平均 0.60m	250 50 5
中高木 植栽工					42 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
25 ハ ナ ノ ツ	H=1.5	3			43 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
26 ハ バ ノ ツ	H=1.5	3			44 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
27 ブ ッ シ ノ キ	H=1.5	100			45 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
中 低木 植栽工					46 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
28 ハ バ ノ ツ	H=1.5	28	111		47 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
29 ハ バ ノ ツ	H=1.5	48			48 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
30 ハ ハ ノ ツ	H=1.5 28/m	73			49 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
31 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		50 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
32 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		51 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
33 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		52 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
34 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		53 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
35 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		54 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
36 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		55 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
37 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		56 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
38 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		57 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
39 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		58 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
40 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		59 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
41 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		60 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
42 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		61 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
43 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		62 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
44 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		63 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
45 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		64 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
46 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		65 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
47 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		66 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
48 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		67 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
49 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		68 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
50 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		69 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
51 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		70 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
52 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		71 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
53 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		72 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
54 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		73 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
55 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		74 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
56 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		75 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
57 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		76 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
58 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		77 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
59 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		78 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
60 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		79 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
61 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		80 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
62 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		81 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
63 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		82 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
64 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		83 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
65 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		84 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
66 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		85 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
67 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		86 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
68 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		87 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
69 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		88 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
70 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		89 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
71 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		90 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
72 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		91 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
73 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		92 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
74 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		93 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
75 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		94 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
76 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		95 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
77 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		96 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
78 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		97 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
79 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		98 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
80 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		99 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100
81 ハ イ ノ ヴ	H=1.5	2	4		100 ハ イ ノ ヴ	0.60/m	100

植栽一覧表

凡 例
No.1~70……番号は植栽配
置番号と同一

まで真っ白になる。まるでその白さが、職人の勲章でもあるかのように眩しく見える。

(2) 衰退する伝統的技術

石大工の仕事はご覧のようにカッコイイ仕事ではないし、それに、技術を覚えるのに時間も要するので、この仕事を受け継いで行こうという若者は残念ながら少ないという。今度「ふるさと園」で石造建造物に携わった職人の平均年令も約50才で一番若い方で56才であった。ここでも後継者のなりてが少ないので悩みだという。

「ふるさと園」で石造建造物に携わった職人は昔から「すぐれた職人は良材が多量に産出する付近に多い」といわれているように、県内でもトラバーチンの産地として有名な勝連町平敷屋の職人と読谷石灰岩を産出する読谷の職人であった。石大工はほとんどがその道10年以上の経験を持つ熟練工で、石を見ただけで産地をあて、性格を読み加工していく。産地が生んだ職人はあらゆるところで産出した石を加工してきているが、やはり、なんといっても自らの所で採れる石が最も加工し易いと平敷屋の石大工の方は語り、その石が本土は国會議事堂にも建材として使用されていることを誇りにしている。

石大工の一人はこう語ってくれた。石大工になりたての頃の仕事は、石山のカスカー（細かい石のこと）掃除で2~3年やった。その後、現場に行くようになり、先輩達の仕事ぶりを目にし、観察して技術を身につけ、仕事をしていく中で自分の腕を鍛磨していった。一人前になる期間はその人の能力によっても異なるが、勘に頼る仕事だから最低7~8年はかかるという。そして、石を1つ1つ積み上げる、あるいは敷いていくことは、石の顔を造ることなので、そう簡単にはいかないと職人気質のところを見せてくれた。

この仕事は辛い上に、技術を覚えるのに時間も要するので、今の若い者になりてが少ないのは仕方ないこととも知れませんねと寂しそうだった。

今回携わった石造建造物の中で最も難しかったところはという問いに、全てむつかしいですよと答えつつも、マチフルのようにアーチになっている部分とか井戸で筒型に積み上げてきたものに勾配をつけていくところが一番大変だったと話してくれた。それでも一番むつかしく神経を使うのは亀甲墓であり、昔の人々の知恵と技には勝てないと感服していた。

石大工さんらの仕事は職人の域に達した人が後世になって認められ伝統的技能保持者といわれるものであるから、やはり、コツコツと石を刻み顔をつくる地道な仕事に違いない。

(3) 文化財復元

最近では個人の家を対象とするのは時間とお金がかかるので石大工としての仕事は少なくなってきた。それにとってかわり文化財級の建造物の復元や修復が多くなってきたという。ということは、伝統的な建造物があるかぎり復元や修復は行われ、熟練した技能者がどうしても必要となってくる。ところが、現状では後継者は少なく衰退していっている。まさに今、目の前から伝統的技術がなくなりつつあることは否定できない「ふるさと園」

でみごとな技術を見てくれた石大工さんらは、ここが終わるやいなや、首里城正殿の復元へと移動していった。

首里城正殿復元の基本理念のひとつに『伝統的技術の継承』が謳われた。このことは、現状で技能者の後継者が少なく衰退していっているのを踏まえ、地域間係が技能者の育成にひと役買ってくれるものと期待される。

(4) 石大工の道具

石大工の使用する道具は、直接、石材加工に用いるものと、加工前に用いる計測用具類に分けられる。後者はパンジョウガニやスマップなど木大工の使用するそれと何らかわりはない。したがって、ここでは前者の中で代表的なものを2～3とりあげ、簡単に紹介する。なお、石大工の道具実測図は沖縄国際大学文学部社会学科・考古学研究室の下地傑氏の提供である。

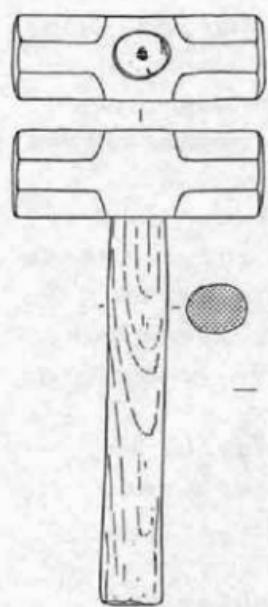
イヤー：大小あり、石材の粗削りに使用。切り込みの入れられた石材にこれをしあみ、頭部をハンマーで叩いて割る。主に大型石材を二つに割る場合用いる。

ハツリノミ：石材の粗削りや、面の調製の際に用いる。粗削りは小型の石材が主である。ハンマーを併用。

タンキリ：ある程度、形の出来上がった石材の縁辺をきれいにそろえる時に使用。ハンマーを併用。

ユーキ（ユーチ）：数種の形態があり、加工された石材の最終的な面調整に用いる。石材の面に刃を垂直に当て軽く叩きながら調整する。

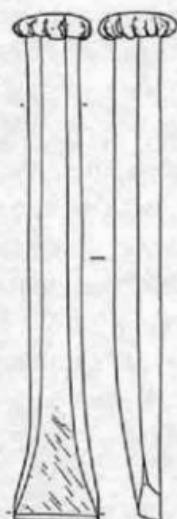




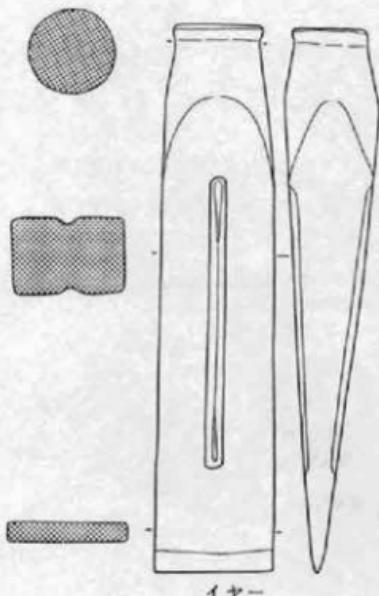
セットハンマー



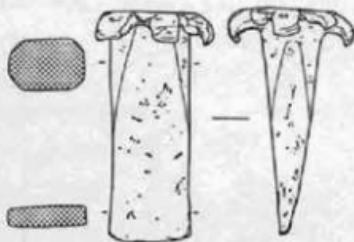
タンキリ



ハツリノミ



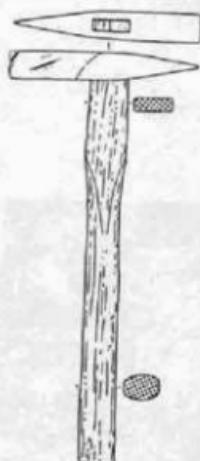
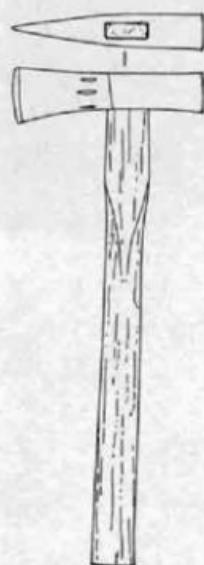
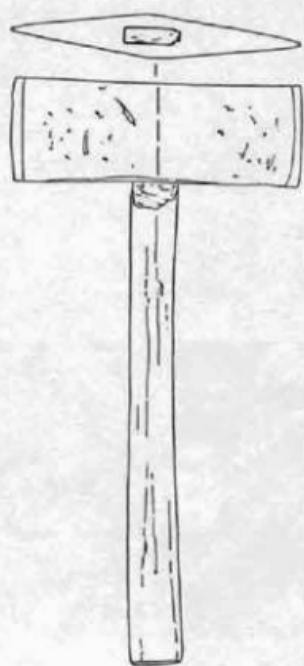
イヤー



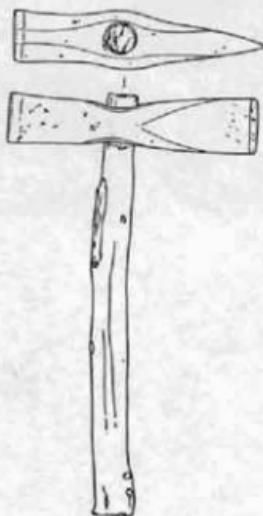
イヤー

0 10cm

石大工の道具



ユキ (ユチ)



石大工の道具

0 10cm



石加工／セットハンマーと
タンキリ



石加工／輪郭線記入後の
石切断



II) 漆喰

沖縄での瓦の焼造は17世紀末とされているが、平民の住家建築に瓦葺きが認められたのは明治の前期である。

沖縄の民家の瓦葺き（アカガーラヤー）は社瓦（おがわら）社瓦（めがわら）軒丸瓦（のきまるがわら）によって葺きあげた本瓦葺きで、他府県には例のない特徴がある。野地竹（リュウキュウチク）の上にこねあげた土をのせ社瓦を三枚重ねで葺き、さらに社瓦のあいだに土を盛って社瓦を重ねる。社瓦の縫ぎ目地を漆喰（ムチ）で塗り、金綬（かなごて）で仕上げる。（タイムス大百科事典）

この独特の工法は沖縄の風土気候を考慮に入れた立派なもので、台風の多い沖縄でいかなる台風でも瓦が剥がれて飛散することがないよう工夫されている。その赤瓦の縫ぎ目に塗られた漆喰（ムチ）の製造と当時のことについて古波蔵石灰工業の古波蔵さんに訊いてみた。

（調査年月日 昭和62年2月20日）

恩納村仲泊の窯は4～5年前まで海岸線に残っていたが、取り壇わされ、現在では金武町中川の漁港海岸線にそのありし日の姿を見ることができる。

仲泊の窯跡位置図



凡例

- ・古波蔵氏の石灰焼窯跡
- ④ " の石灰工場
- 島石灰

漆 喰

古波藏石灰工業 恩納村仲泊 1354-10

古波藏清喜 (S 4. 1. 20 生)

質) 何歳からその事業に携わったのですか

答) • 23歳頃から（1952年頃）お父さんと一緒に始めた。

質) 当時、仲泊には何ヶ所の窯がありましたか

答) • 当時、最盛期の時は仲泊においても7～8個所ありました。しかし、人夫賃が高くなるにつれて品物は出なくなってきたので、7～8個所あった窯も少なくなって、私1人生き残っているわけです。

質) 窯づくりもなさったんですか

答) • はい。窯の作り方は以前から知っていたものですから。そうですね、12～13日くらいかかりました。

質) 窯の材料になる千枚岩、クチャ、石の調達の日数もはいっているのですか

答) • いいえ、石をとるのに10日くらい。なぜかといえば窯に使う石は海にあるので、それをヤーやバールなどで割って、トラックで運んでくるので時間がかかるわけですよ。石積んで、土を入れてそれを繰り返し行って丸くし窯を造るわけです。造り方はセンターに棒を立てて、それから紐を引っ張って（図で説明）、こういうふうに造っていくわけです。

質) この窯は何年くらい使われましたか

答) • 14～15年位なるんじゃないですか。窯の口の石が欠けた場合はえらいことになるのでこの窯をとり壊して造り替えようと思っていたんですが、このバーナーを使うにつれてですね……以前は薪で行っていたんですよ。しかし、燃料が薪からバーナーにかわったのでそのまま使っていたわけです。

質) 薪で

答) • はい。マーチ（松）。

質) 火を焚く時間はどれくらいですか

答) • 二晝夜半から三昼夜。

質) 燃やす材料が松の場合ですか。

答) • 松でも、バーナーでも3日間燃やします。いや、いずれを使っても寝ちゃあいけないです。

質) 交代制でみるとなんですか

• そうですが、しまいには自分1人でずっと起きていた。

復帰後からいろいろと公害問題が出てきていたので、これではいけないということでバーナーを使うようになったんです。安謝にもたくさん窯があったんですがね。

質) 安謝にもあったのですか

答) •たくさんあったんですよ。今、ここでやっている島石灰は那覇の方なんですがね。那覇の方は安謝のものを購入していた。それで、そこの古い窯を払い下げてもらって(10ドル?)自分で造った窯の中にレンガをはめこんで、それからバーナーを使って。その時から重油を使ったわけですよ。重油は製糖工場始まって、しばらくしてからほとんど重油を使っておりました。

質) それでは、松、木を燃やしていた時、その材料は買ってやっていたんですか

答) •はい。山原からトラック一台いくら……というふうに。

質) 値段は憶えていますか

答) •1台分 13,000 円だったように憶えています。

質) 燃やす松の材燃入手は

答) •当時は製材所もたくさんあったので、船材の切れっぱなしを譲ってもらったり、「松を倒すから枝はいりませんか」というふうに連絡が来る時もあれば、たまたま松の木を切り倒している所を見た時に「売って下さい」といってお願いする場合がありました。

質) たいへんな仕事ですね

答) •私はずっと国頭村辺戸まで行ったんですよ。

質) 松以外のものを燃やすといけませんか

答) •松以外のものを燃やすと、火花といいましょうか、ウチリ(薪が燃えて炭火のようになつたもの)だけであって、炎がでないんです。だから石が焼けないわけなんです。

質) 3日間窯を燃やす間に使う松の量は

答) •トラックの2~3台分を要します。

質) 1回の窯で石灰の取れる量は、どれくらいですか

答) •その当時の窯は小さかったものだから1袋20kg入りのものが200ぐらい。窯を造った当時は軍工事が沢山あった。それで、鉄筋コンクリートの建物はセメントと石灰を混ぜて建物を造らないと検査がとおらなかった。この仕事をする前は私、軍に勤めていたんですよ。ところが、妻の実家が石灰業をしていて、もう1つ窯を造るのでやってみないかと言われたので、軍を辞めて、石灰業をお父さんと共に始めたんです。当時は軍の中へはバスがないと出入りができなかった。それで私が勤めていたところのサージュン(軍曹)に理由を

告げて辞めることを話し、バスを返すと、サージュンは私のことを信用して下さり「お前は私がこのバスを取ってしまったなら、ここへは遊びにもこれなくなってしまうよ」と言い「もし、あなたがこのバスのことで何か言われるようなことがあれば、私が受け取らなかつたといいなさい」と好意だった。サージュン（軍曹）も軍に尋ねられたら「私も忘れて受け取らなかつたと言うから」とお互いにそうしようねということになった。それで、その当時嘉手納基地内のゲート3の所をよく出入りしたものだった。私はそのバスを持って営業して回り大分仕事をしました。

質) 何年くらいの話ですか

答) 昭和27~28年くらい。だいたい60年頃から復活した。その当時、軍の中に建物を造るといって本土から建築会社が大分きていた。私はDE（District Engineer軍の検査官）がいたところコンクリート用の石灰の検査を受けた。どれくらいの圧力があるかというふうに。その時から私の石灰を使って貰うようになった。いろんな規制などがあったんですが、建築が多くなると漆喰を使う量も多くなるが建築業者に使用証明がないため、私のところに「是非下さい」といってくる会社もあったんです。

質) 石灰の検査があったとおっしゃっておりましたが、その時の火の加減で石灰の出来具合も違ってくるんですか

答) そうじゃなくて、粒度ですね、細かさ。

質) 細かいのがいいのですか

答) 網に通して検査をしていたものですから。軍の規格としては、エンジニアディストリックといいましてそこで検査をするわけですよ。細かさが30メッシュ。30メッシュというと、1インチにですね、30の網の目があるんですが、それから通ったものでないと検査は合格しないんですよ。

質) 石灰が細かく出来るというのは火の加減ですか

答) そうですね、強く焼けないと荒くなるんです。

質) 網の上に石灰岩をおいて焼くんですか

答) いいえ、そうすると、網はとけてしまうので、そのまま石灰岩を窯の横と上から入れて。窯の入口はバーナーの火が通るように3本の溝（空気穴みたいなもの）を造るわけです。

質) 焼いたあとは下にそのまま沈み溜まるんですか

答) いいえ、そのまま上が焼けるまで火を通しますよ。それで、入口（トンネルになっている部分）が詰まってしまうと、熱が窯に伝わり窯がとけてしまうので、そこが詰まらないように注意して、掃除をしたりする。これは肉眼では見えないものですから、綿ゆめのサ

ングラスでみて判断する。

質) 焼けてきましたら

答) • 上まで焼けたら白みがかった色になります。それで判断して、火を止めて、翌日出来上がった石灰を取り出します。水蒸気が出て暫くすると石が赤くなるので、その時に一旦蓋を閉める。

質) 蒸すんですか

答) • いいえ、蓋を閉めたら、火は燃えっぱなしです。煙突がありまして。

質) 石が赤くなると蓋を閉めますが、蓋をしめてからはどのくらい焼くんですか。だいたい焼けているなということはどういうふうにしてわかるんですか

答) • 石というのは初めは黒いんですが、焼いていくと次第に赤くなり、そのあと、また、白くなってくる。焼けたのが一杯あっても、どの部分が焼けてないということは経験でわかります。

質) 見るのは上から覗くんですか

答) • いいえ、横（ブーブーミー）から見ます。

質) 見えるようになっているんですか

答) • はい。

質) 焼き物と一緒になんですね

答) • そうです。こういう具合にバーナーで焼くと温度が1,500度ぐらいになりますから、火の入口が詰まってしまったら、熱が別のところにいって窯が全部壊れてしまう。

質) 火の入口が詰まらないように気をつけるんですね

答) • はい。だから常時、詰まらないように掃除をしないといけないです。窯が詰まっているか、いないかは長年の経験でわかります。また、目で見ても分かるし。詰まったときは、一応火を消して、バーナーをとり除いて掃除し、また火をつけるんです。

質) 県内でこのような窯がどこにあったかご存じですか

答) • 我々がやっていた当時は、羽地に1ヶ所、南恩納に1ヶ所、宜野座にもあった。中部は、泊瀬に1ヶ所、与那原にもあったんです。西海岸、那覇と糸満にあった。その当時は仲泊で10ヶ所くらいでしょう。

質) すごいですね。仲泊は石がよく取れるから多かったんですか

答) • 仲泊は中部で、昔から本場であったらしいですね。

質) 仲泊で一番最初に始められたのは古波藏さんですか

答) • いいえ、私たちの前は、大城さんと大城勝康さんという方がやっていたわけなんですね。

当時は松村さん、教進さん、また私の妻のお父さんがやっておった。100年くらいというと大袈裟かもしれませんが、私たちが生まれないまえから窯があったんです。ずっと昔から窯があったらしいですよ。

質) 漆喰造りもその頃からやっていましたか

答) • 漆喰は那覇が本場であった。

質) 古波藏さんが造られたのはいつ頃からですか

答) • 私たちは、1959年頃からだったと思います。

質) 漆喰を造るきっかけみたいなものは……。

答) • 儲かると思って。

質) 誰に教わったんですか

答) • 教えてもらうというより、左官をしている方々や、他人から話を聞いて、ミミガクモンをしていたので……知っていました。

質) 自分で焼いた石炭と藁を……最初はどういうふうに造るんですか

答) • 石灰を窯から出して、水をかける。すると、石灰が熱を持ち蒸気が出てくるので、その時に切られた藁を混ぜ合わせ、蒸すんです。そのようにかきまぜることでより軽らかく質のよい漆喰になる。那覇は臼とアジム（杵）の搅拌は機械力を用いていたが、中部は機械ではなく人力でついていた。

質) 石臼に石灰を入れて水かけて……。

答) • そうじゃなくて、地面で石灰と藁を混ぜ積んでおく。そうして約10日ぐらいたってからアジムでついた。

質) すぐつくといけないんですか

答) • すぐつくとわらがうまく混ざらない。

質) 石灰と藁を混ぜ合わさるのは数回か、それとも適当ですか

答) • いいや。

質) 石灰と藁はよく混ぜ合いますか。

答) • はい。

質) よく混せて、10日くらい置いて、それからこの機械（搅拌機）でつくんですか。

答) • はい。藁の繊維が無くなるまでつきます。

質) これを石臼でつくとなると、かなりの重労働ですね

答) • そうですね。二人でやるんですが……。

質) お餅をつくみたいにですか

答) • はい。ムチューク（瓦大工）がいるんですが、あの方々が瓦を葺いたら、ムチュークのムチチャーといって、ムチチャー歌があるでしょう（民謡等にあるよ）。トゥイスヤース ヌーシン ナイルスルなんていう歌があるでしょう。ムチチャーはよくこの歌をうたった。

質) ムチュークがムチをつきにきたんですか

答) • はい。

質) そうしてムチを買っていくんですか

答) • 当時は瓦葺の家を造っているところに行って「私に家を造らさせてくれませんか」と仕事を受けてきたんです。そうして、ムチュークが、石灰と藁を買ってきて、自分でつくっていた。

質) ということは、昔は瓦大工が自分で材料を買ってきてムチをついたんですね

答) • はい。

質) 古渡藏さんがムチを造るようになった時、藁はどこから入手なさったんですか

答) • その当時は稻をだいぶ作っていましたから、羽地、今帰仁、金武などで。

質) 遠くまで買いに行ったんですね

答) • はい。

質) 草を切るのは自分で

答) • はい、押し切りで。

質) 作り始めた頃はよくでしたか

答) • そうですよ。

質) このムチは赤瓦以外にも使いますか

答) • セメンガーラとかね。

質) 今は瓦家が少なくなっていますよね

答) • そうですが、また、徐々に増える傾向にありますね。

質) ムチというのは瓦にしか使用しませんか

答) • そうですが、他には、飲食店のインテリアとして壁に使われたりしています。

質) それじゃあ、最近は徐々に動きはじめているんですね

答) • そうです。

質) 薬を買いにいくのは自分でやるんですか

答) • はい。今は台湾とか、方々から仕入れているんですけどね。

※ 以上は室内における聞き取りであるが、以下は構内における機械や材料を見ながらの聞き取りになる。

石灰は以前は石のままつかわれた。(サンゴが積まれているところを指して)

質) 石のまま使ったわけですか

答) • 現在は機械で粉にして、それに水をかけると、ほら白い煙が出てきたでしょう。こういう具合に熱が出るんですよ。この上に薬をかぶせ、蒸すんですよ。

質) 石灰に水をかけ熱が出ると直ぐ薬を入れてかき混ぜていいくんですか

答) • はい。今は練るのも機械でやっているものだから、二日ほどで蒸喰を造ることが出来ます。

質) この機械は何ですか

答) • 搅拌する機械です。

質) 出来上がって袋に入っているものはどのくらいもちますか

答) • 10~20日ほどはもちますでしょう。

質) 使えなくなると棄てるしかありませんか

答) • 固くならいうちは使えますよ。

質) もし、固くなったらどうしますか

答) • もう使えません。ネバリけが無くなつてツヤも出なくなります。

質) ムチの質の良し悪しの判断は

答) • 質はですね、石灰がよく焼けたかで決まる。石灰が上等であれば、ムチも上等ですよ。

質) 混ぜ合わせ時の水の入れ具合ではないんですか

答) • はい。水を入れ過ぎるとやわらかくなるし、これはだいたい決まっています。

質) 昔シックイ造りに使った道具は

答) • 石臼、アジム、ショベル、クエーカチャーなど。

質) クエカチャーというのは

答) • 肥やしなどを搔き出すもの。堆肥などを取り出すもの。

質) 使われた道具はそれだけですか

答) • 三段になった桑の木片も使いました。

質) 石灰に水を撒くのに方言で何て言いますか

答) • アミケーを造ると言うんです。アミケーする。石灰を溶かす。

質) その次に藁を入れるのは

答) • アミケー・チクン。それからムチになるんです。

質) アミケーを造って10日間寝かすのには何んて言うんですか。混ぜ合わせたものを置いておくのは、寝かすなどと言いませんか。

答) • これは……。

質) そうやって置いて、あとは、アージンでチチュンって言うんですか

答) • はい。

質) つくことには

答) • チチュン。

質) ムチ・チクンと言ふんですか

答) • いえ、ムチ・チクイン。

質) 出来たのは

答) • ムチ・チチュン。

質) ムチを造る過程で一番難しいのは何ですか。もっとも、技術がいるところですか

答) • 石灰さえ、焼き方が上等であれば、ムチも上等になる。藁の長さなんですが、今はこれくらいですが、以前は五寸ぐらい。

質) 結構長かったんですね。

答) • その時はみんな自分らでやるわけでしょう。だから誰れしも疲れてしまうから長く切ります。

質) モチをつく時のことを考えて小さく切った方がいいのでは?

答) • 藜を小さく切ると、それだけ手間暇がかかる。つくにしても藁を取って見て大丈夫かどうか試してからつくわけなんです。だから石灰と藁を混ぜ合わせてから冬はおよそ二週間か10日ほど置く。夏だと一週間ほど置いてつくんです。夏と冬では置く期間が異なります。

質) 夏は暑いから、置く時間も短くなるわけですね

答) • そうです。長く置いても腐ってしまうしね。

質) そうなると、欠損ですね

答) • はい。

質) ジャ、注文を受けてから見当をつけ、それから作らないといけませんね

答) • そう、そう、そう。

質) 現在ここで漆喰を作ってる方は那覇の人ですか

答) • はい。

質) その薬はどこから買っているんですか。

答) • 台湾。

質) 高いですか

答) • 高いらしいですね。

質) 漆喚の値段も昔に比べると高いですか

答) • そうです。だいぶ高い。

質) 一袋でいくらですか

答) • 1,500 円。薬は（薬を積み上げてある所を指して）、梱包されてくるんです。沖縄でも注文すれば薬はあるんですが。

質) （梱包された薬を見て）どれくらい（値段）するんですかね。

答) • さあ、どれくらいするんですかねえ。

質) どういう単位で貰うんでしょうか。個人でか、組合単位でか

答) • 個人で買っているようです。商売はいろいろと裏表があるので、おたがいライバル同志だから、私が「そうだよ」といっても、相手はまた逆にとってきますからね。
• 漆喚はこれ（サンゴを焼いて造ったもの）が一番いいらしいです。だけどこれが大量生産になると間に合わないんですよ。

質) ムチつくるのにですか

• 今は用途が多いものだから。

質) これだけ焼いていたら間に合わないわけですか。

答) • 製糖工場なんかですね。ムチは本当は珊瑚のはうが上等らしいです。

質) 今は山原の山でとれる石を使っているわけですよね。

答) • 藍染めなんかに使うんですがね。

質) 染物をやったことがないのでよくわからないんですが、石灰をいれるんですか

答) • 藍をもってきて、原料（染物の）を作るのに石灰を入れて置いておくんです。腐れた時分にまた……。

質) それにも、山の石で作った石灰よりも、珊瑚の方がいいんですか

答) • はい。

質) 昔の人はいろいろと考えていたんですね

答) • 伝統芸能の方が以前においてになったことがあるので、……そして、もし県からの要請があったら窯を造ろうとおもって、石は買ってきて置いてありますか。

質) それじゃあ、これは大切に置いてあって、今は山の石を主に使っているわけですね

答) • これは大切にして置いてあるというよりも、山の石と混合して焼くと、だめなんですよ。

質) これを混ぜて使うといけないんですか

答) • 山の石は、コークスで焼いているが、サンゴはあたり前の火で焼かないと碎けるんですよ。

質) 碎けるのと、蒸されてできるのとでは、違いますか

答) • 石自体がそういう性質なんですよ。山石はなまぬるい火で焼くと碎けるんですよ。

質) 碎けるとは、

答) • 碎けてですね、みんな、もう、なんていいましょうか。一つになってしまいますよ。ひついて。

質) むら、むらになるという意味ですかね

答) • もう、ひっつかってですね、碎けて、窯の一杯カサはってしまう。

• コークスはこれ、燃料はコークスなんですよ。

質) 燃料のことなんですか。炭みたいなものですね

答) • 今はこれで焼いています。

質) これは何処からですか

答) • 内地からです。これは石灰から油を絞ったあとのカス。三菱化成から買うときには10トンや20トンという具合に那須まで取りに行きます。

質) どこに入れるんですか

答) • （機械を指差して）ずっと上にです。

質) 山原の石は、コーリーというものですか

答) • クルイサーといっています。クルイシ、ヤンバルイシ。

質) 全部機械で上にあげてから造っているのですか

答) • はい。上からバケットをおろして、バケットに石を入れて機械に投入してコークスを入れて……。

質) コークスと石は交互にですか

答) • はい。作る場合には風化してしまって粉になっちゃってダメなんですよ。あれは一応窯から出して、4~5日すれば風化するんです。そうしたら、消石灰になってしまって、熱を持たないので漆喰を作る藁は蒸しきれなくて、ムチをつくることができず使えない訳です。

質) それじゃあ、ムチをつくる時の石灰は新鮮なものでなければ……。

答) • そう、そう。モチろん。

質) 漆喰を作る時に大切なものは、新鮮な石灰を用いるということが大切なんですね

答) • だから消石灰が長らくなると、石灰分がなくなって、使えなくなるわけですよ。

質) それなら、漆喰を作る時にあわせて石灰も作らないといけないんですね

答) • いえ、いえ、漆喰だけではなく、沖縄本島方々から注文がきますのでどんどん作っているんです。

質) これだと別に何日たってもいいんですよね。やっぱり新しい方がいいですか。

答) • この石ですか。これはナマだから。

質) ムチを作る時は粉にしてから。

答) • これはナマだから、何十年、何百年おいてもそのままなんですけどね。石灰焼いてから石を焼くと石灰になるわけなんですけど。窯から直ぐ取り出して、機械で砕いて袋に詰めております。そのまま置いておくとダメになるんです。

質) 山石で作られた石灰でムチを造っても差し支えないんですか

答) • でも、本当は珊瑚を焼いてから作った石灰を使うといいんですよね。だけど現在は山石を使っているということです。

質) 山石と、珊瑚を使うのとでは違いがあるんですか

答) • 今は山石に塩を入れて焼いているんですよ。

質) 普通の石灰とムチに入れる石灰とは焼き方が異なるので、別々に焼かないといけないですか

答) • そうです。

質) 塩って食べる塩の事ですよね

答) • 食塩は高いので、原塩です。

質) ムチを作る時にに入る石灰のみ原塩を入れて焼くのですか

答) • そうです。窯もそういう装置を取りつけてあります。

質) 石の量によって原塩を入れる量も決まっていますか

• はい。

質) どういうふうに決めるんですか。味をするわけにもいかないし……。

答) • これは適当に。

質) 塩が多かったらいけないとありますか

答) • そういうことはないんですけどね。塩は多ければ多いほどいいのではないか。

質) 材料と掛けを考えて……

答) • 本当は塩を入れると細くなるという意味もあるんですがね。塩を入れないでそのまま焼くと、どういうわけか、これは左官をなさる方にしかその良し悪しは分からないというところらしいですが……。

質) 以前のような窯を造るとしたら幾らかかるでしょうか

答) • 400万ほどではないですかね。レンガが…やはり、400万くらい見積らんといけないでしょうね。千枚岩の石がないので。

質) 千枚岩の代わりにレンガを使うんですか

答) • いや、窯の中はレンガでやらないとバーナーが使えないんですよ。

質) 以前の窯の中にもレンガを使用していましたか

答) • 以前のもの（昔のもの）は薪を燃やして使ってなかったんです。

質) バーナーだとレンガを使用しないとダメなんですね

答) • はい。

質) 古い窯の周りをワイヤーで巻いているのは、窯が割れないようにですか

答) • はい。

質) 石炭を作る時の辛さというのは、窯に火を入れて3昼夜寝ないで番をすることですか

答) • 本当は交代でやるんですが、あまり儲けもないし、息子は別の仕事をしていて私一人でや

っているんですよ。昭和12年頃からやっていたがつらい仕事なので、軍作業に職替えた。だけど石灰の用途が多くなり始めたので、軍作業を辞めた。……今頃は軍作業に行っておれば3,000万の退職金を貰えたのに……と後悔。今では逆にかなりの借金をしているわけなんですね。

質) 胡屋の方でも塗喰工場を持っていたというのは、いつ頃ですか

答) • 1957、8年頃。胡屋十字路からコザ中学校の間あたりにあった。道路に面している所で右手のはうであった。今はどうなっているかなあ。近くの宮城さんという人に大分お世話になったんですがね、当時はあの辺りには外人さんがたくさん住んでおった。

質) 胡屋では何年くらいやっていたんですか

答) • 3年くらいかな。

質) 全盛期の頃やっていたんですね。

答) • あの当時は塗喰工場が乱立していたので、お客様は調染みになると掛け買いが多くなり、その店に行きづらくなると、べつのところの塗喰工場へ行くというふうに、経営がなりたくなりました……。

質) 現在はどこに塗喰工場がありますか

答) • 沖縄石灰と島石灰と与那原塗喰と、糸満にもあるしね。コザにもあるし安慶名、名護それくらいですね。

答) • 島石灰の方々も戦前からやっているんじゃないかな、戦後からかな。那覇の沖縄石灰の親父も戦前から。

質) 少なくなりましたね。……それでは今日はこの辺で失礼致します。お忙しいところどうも有り難うございました。

Ⅲ) 現存する石灰焼き窯と石灰作り

瓦と塗喰は調和して赤・白のコントラストを構成し沖縄独特の赤瓦屋の景観をかもします。近年、赤瓦家も減少しつつあり、市内でも戦争前の建物は22ヶ所しか残っていない。それに伴ない塗喰も生産量が少なくなり、最近は赤瓦家以外に店舗の内装工事等でも使用されつつあるが、需要はいまひとつである。

上で石灰と塗喰作りを述べた。最近の製造はいずれも機械力を用いた生産法であるが、恩納村仲泊では、3年前まで古い要素の石灰焼き窯が県道6号線沿いの仲泊集落入口で見られた。現在、その窯はなく県道73号線沿いに移転している。新たな装いで工場が立ち、操業は古式な方法ではなく機械力を用い移転前とは大部異なる。

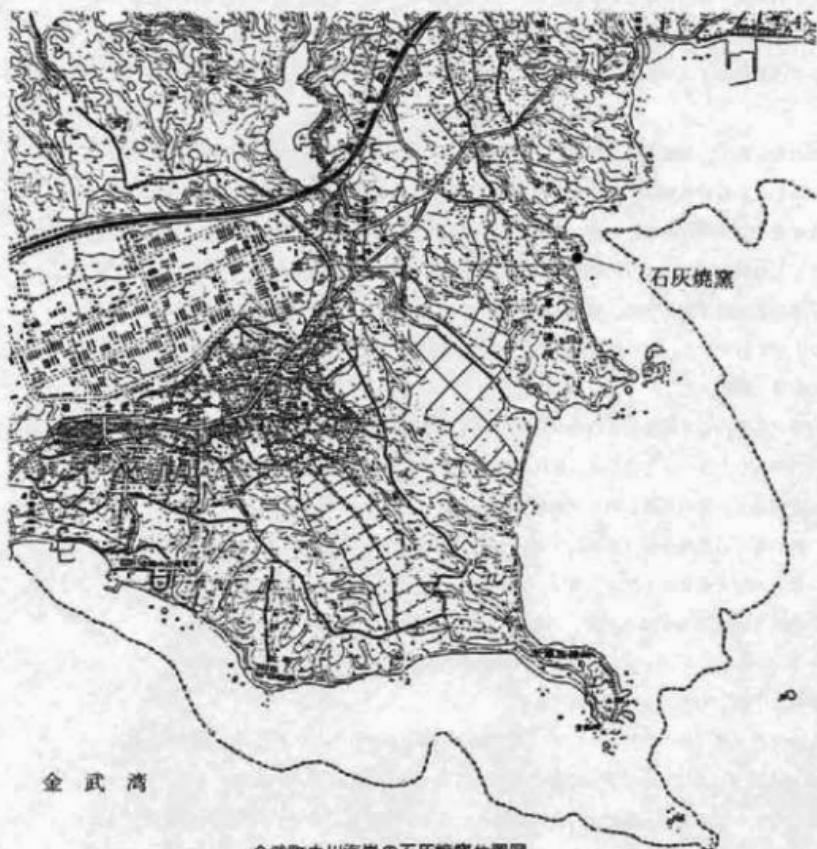
県内の石炭焼き窯の分布は年々限られつつあるのが現状で、窯の位置づけは年代的に新しさがあるが、その性格は文化財の生産遺跡のたぐいに類似する。技術が変遷し発展、もしくは消滅するのは時代の推移の1コマにすぎないが古波蔵石炭工業の以前の古式な石炭窯もそのひとつである。

以上の点をふまえ、消滅の危機に瀕している窯の分布調査と聞き取り調査を限定された時間で試みた。おおまかな分布地は先述の項で紹介済みであり、その中に当市の沿岸も含まれる。その窯は数十年前まで使用されていたが、その後、諸々の開発で現在跡形もない。そのため当時の状況は判然としない、幸い金武町に保存された窯があるので遺構の事例もそれを、聞き取りは古波蔵石炭工業の古波蔵清喜氏から、窯の名称と石炭の作り方について話を伺かがった。以下では両方をおおりまして紹介する。おおかたは古波蔵氏の御指示による。記して感謝申しあげます。

1. 窯の位置と構造

窯は金武町中川の米軍演習地内の海岸に位置する。海岸から丘陵に移行する斜面に1基立地し眼前は発達したリーフをひかえ、背後は松等の原野で近年まで使用された痕跡がある。窯はほとんど完全で、室内も原石のサンゴが密詰めされ今すぐでも火入れが可能な保存状況である。以下、窯の構造の概略を紹介する。

- ① 窯は恩納村仲泊では〔フェーガマ〕もしくは〔フェーキガマ〕という。
- ② 平面は直径3.70m前後の円形、内部は単室。
- ③ 南方向からの断面はドーム状を呈し、天井の外壁は平坦である。窯の壁の厚さは、天井部で20cm、中間で50cm、下場で80cmである。
- ④ 〔カマグチ〕(焚口のこと)はアーチ状をなし南向き、外部の寸法は高さ1.10m、間口1.30m、内部は高さ70cm、間口60cmで外側より狭くなり、ここから火入れする。
- ⑤ 原石のサンゴ(以下、原石という)の搬入口が2ヶ所ある。カマグチに向って左手(西方)の壁に〔イーチマー〕、ここは搬入路とのかねあいで右手に作られる場合もありえる(古波蔵氏の話)。寸法は高さ1.00m、間口65cm、内部は高さ75cmで外部より狭くなりアーチ状を呈する。もう一ヶ所は天井の開口部(名称不明)の中央にあり、平面は梢円形で、外部の寸法が長軸85cm・短軸70cm、内部は長軸60cm・短軸45cmをはかる。
- 以上の三ヶ所以外にも北壁に〔キップマー〕(部屋ではブーブーマー)という小規模の開口部がある。大雑把な作りで窯内部まで貫通し、寸法は幅40cm・高さ25cm・穴の奥行き50cmを計測し火入れ後の観察窓的な役割りをする。
- ⑥ 窯の周辺は南から北に3段のテラスを形成し徐々に高くなる。比高はカマグチの前庭部表土面と天井部が3.40m、北側の背面が70cmをはかる。
- ⑦ 窯の作り。窯は周辺に露頭する礫まじりの國頭マージとレンガで築窯され、煉瓦ではなく、南面以外の外壁に接し部分的に野面積の石垣が見られる。



2. 石灰作り

原石のサンゴ・薪等の入手は先述の古波藏氏の話で紹介済みであり、ここでは①窯詰、②火入れと石灰作りを述べる。

① 窯詰

原石を窯内に詰める作業。窯詰以前に原石を適当な大きさに砕く。金武町中川の事例では20~30cm大で、窯北壁のキップミー周辺は原石が散乱し、その一角に原石を碎いて加工したと思われる跡がある。

窯詰めは天井の開口部とイーチミーから行なわれる。原石積みは焰道も作りながらその周辺と上部に積み上げて行く。焰道は幅20cm・高さ70cmの溝で、窯口の内壁より反対側の奥壁まで2本設ける。上部は天井の開口部外壁より1.10m下まで積み、焰道の石積上場からここまで厚さが概算で1.80mである。

② 火入れと石灰作り

A. 火入れ後、窯内の水蒸気がなくなり煙も黒っぽく、また原石も赤く焼けた状態



B. 天井の開口部を鉄板で蓋する。

- ・キップミーから原石の焼け具合を観察
- ・キップミーから原石積みの天場をたえずカマノーサー（カキジヤー）という道具を差し込んで調整する。



C. 焼きたての石灰を〔生石灰〕という

- ・イーチミーに蓋したくちや石と天井開口部の鉄板を取り外す。普通は窯内部を24時間、注文によっては早いとき8時間冷して製品をとりだす。
- ・冬場は注文がなければ3～4日間寝かす。



D. 生石灰に水をかけて〔消石灰〕（市販されている石灰）になる。

- ・ここまでに至るのに2昼夜半から3昼夜要する。
- ・夏は温度が高いので観察を怠ると、窯内部に水蒸気が発生する。その水分が窯出し以前の生石灰に付着し、窯内部すでに消石灰になる時もある。この状態で消石灰になったのは、漆喰作りで本来の熱量でない石灰なので、製品としては好ましくない。

小 結

尚に囲まれている沖縄では資源が乏しいのにもかかわらず、身近にあり、容易に入手できるものの性格をよく知り、地域の気候や生活習慣に応じて創造し、沖縄独特の文化を築いてきた。

漆喰の材料で石灰のもととなるサンゴでも、石垣や屋根の漆喰に使われるだけでなく、黒砂糖を固めたり、藍染めの色出しや焼き物の釉薬に使われ、沖縄の暮らしと密接な繋がりを持っている。

このように沖縄の気候風土で生まれた独自の文化と技術が時代の波に押し流されていくのはあまりにも忍びない。これまで先人たちが造りあげてきた文化の上に、我々が存在しているのを忘れてはいないだろうか。自らの文化というものを知らないで、みんな捨ててしまうと、なかなか戻らないということ。

※追記……当市字古諭上原・津嘉山森西方にも市内唯一の漆喰工場が確認されているが、今回は調査不足のため省略する。

凡例

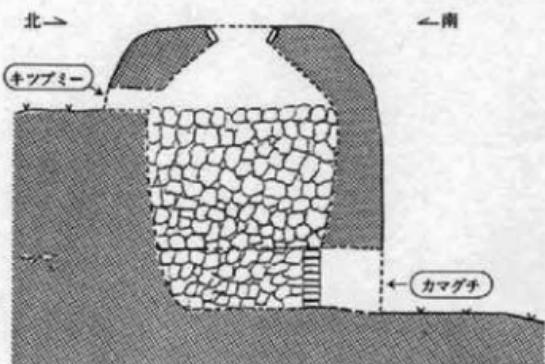
翻字について

- ① 録音したテープを忠実におこしたが、そのままでは意味が理解しにくいところや、表現が不自然になるところは適宜意訳した。
- ② 文脈が理解しにくいところは、言葉を補った。
- ③ 話者の語りに忠実に翻字した。ただし、口癖の「あのう……」などは省略した。
- ④ 語りに区別りがない場合は、翻字者の判断で適宜句読点を打った。
- ⑤ 語りの混乱や、無意味な反復などについては補正した。
- ⑥ 民俗語彙など方言が活用されたほうがよい部分は、方言音でカタカナで記し（ ）を付した。

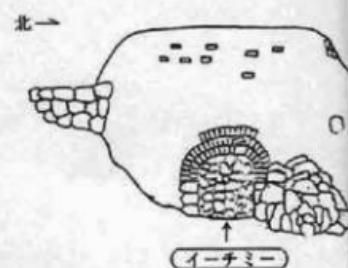
参考文献

- 歴史的町並み事典 柏書房編
「甦った古民家」 世田谷区教育委員会
青い海 1979年 8月分 '85
沖縄大百科事典 沖縄タイムス社

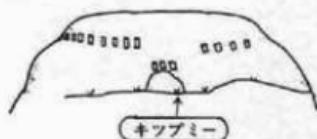
石灰焼窯



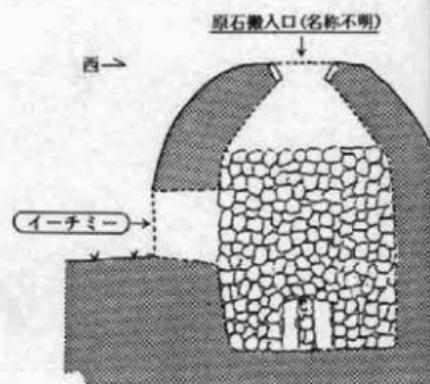
窯断面図



西立面図

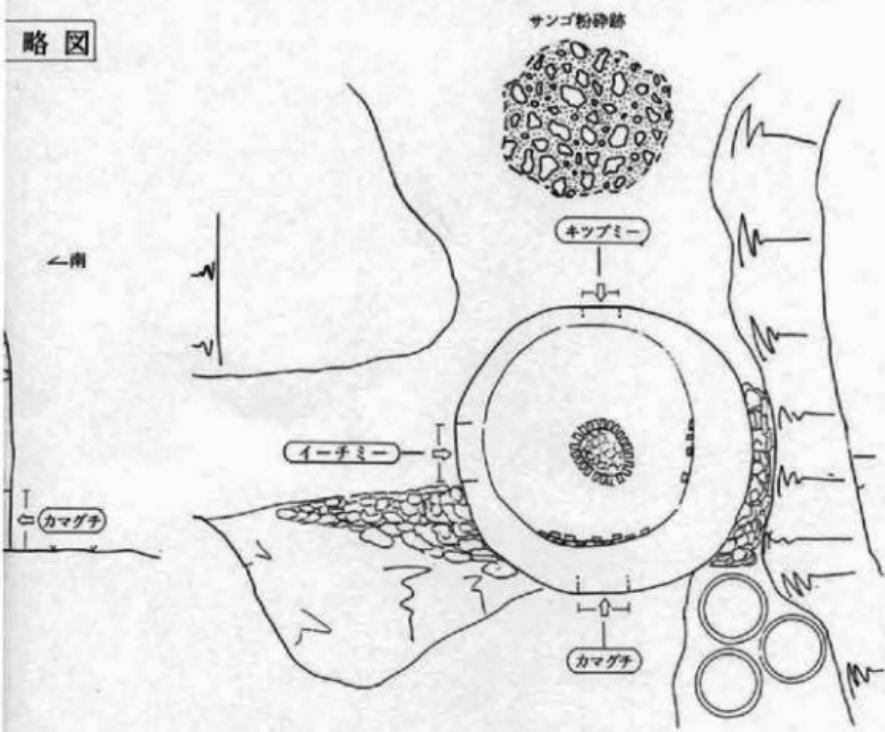


北立面図

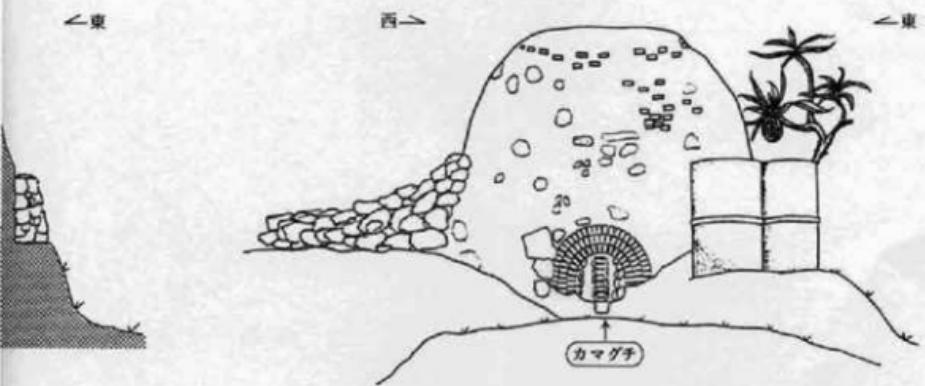


窯断面図

略図



平面図

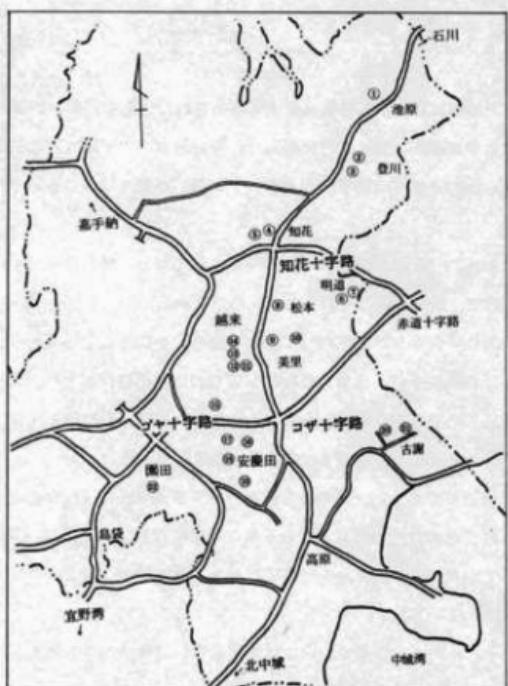


南立面図

IV 市内の古民家分布と保存の概況

I) はじめに

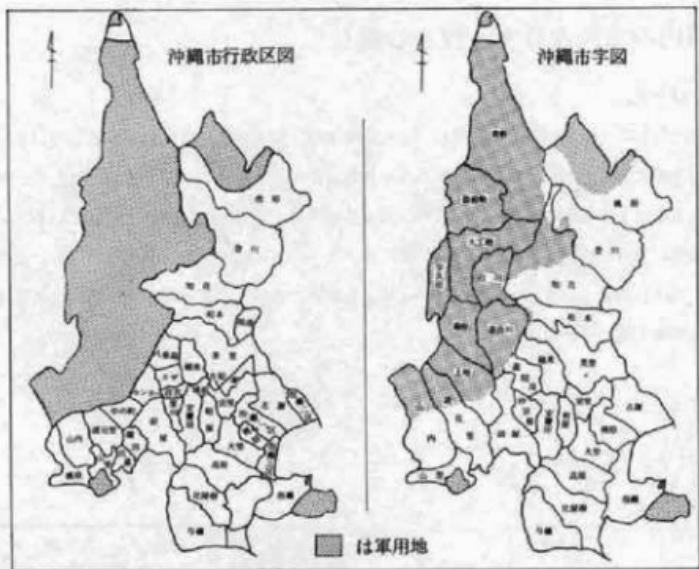
沖縄の気候風土に基づいた伝統的なつくりの民家は、去る第二次大戦以降激減している。これは同大戦において本県が激しい戦禍にのみわれ、その多くを焼失してしまったことや、戦後のコンクリート住宅の建設ブーム、老朽化による建て替えなどが主な要因となっている。沖縄市の場合も例外ではなく、年々減少の傾向を示し今日に至っている。赤瓦の美しい集落景観はすでに消失してしまっているが、少なくとも散在する個々の古民家は早急に記録保存等の調査を実施する必要がある。



市内古民家分布図

番号	行政区	古民家
①	池原	島村善幸家
②	登川	仲宗根フミ家
③		屋宣宣実家
④	知花	伊波善正家
⑤		池原清家
⑥	明道	糸洲朝栄家
⑦		大城弘家
⑧	松本	高江洲義春家
⑨		川上慶一家
⑩	美里	平武一家
⑪		仲宗根弘勇家
⑫	越來	仲宗根盛一家
⑬		仲宗根正徳家
⑭		高江洲盛喜家
⑮	住吉	久場良盛家
⑯		島袋盛政家
⑰	安慶田	神里興盛家
⑱		神里興雄家
⑲		屋宜盛輝家
⑳	古謝	宮里信栄家
㉑		知念和輝家
㉒	園田	伊波正新家

市内古民家一覧



II) 古民家の分布と概況

昭和62年3月1日現在、市内では総数22戸の古民家（戦前に建築された住宅を対象）が確認されている。これらの場合も戦災や自然的灾害、老朽化の進行、使い易さへの配慮などの諸理由によって、そのほとんどが何らかの補修・改築等が行なわれており、建築当時の姿を完全のまま保っている家は少ない。

分布状況を行政区別にみると、市内36区中11区において確認されており、最も分布の多いのは越米と安慶田のそれぞれ4戸で、他の9区はそれぞれ1～2戸である。

建築年代は明治時代が4戸、大正時代が5戸、昭和（第二次大戦前）が13戸となっており、昭和になって建てられたものが圧倒的に多い。建築した年の明確なのは明治時代が1戸、大正時代3戸、昭和（第二次大戦前）7戸である。それからすると最も古い民家は明治14年（1881年）に建てられ、今日まで106年の歴史を有する仲宗根弘勇家（越米）である。

構造的に22戸のいずれも寄せ棟造りであるが、そのうち越米の仲宗根弘勇家は正面からみると棟の中央部分で段差がつくられ、他の21戸の民家とは若干異なる棟造りとなっている。屋根は美里の平武一家をのぞくすべてが在来のアカガーラである。平家も他と同様アカガーラであったが、数年前にセメント瓦に改めている。

家の向きは、一般にヘーンケー（南向き）が多く、中には南東あるいは南西向きもわずかにみられる。

次に現在確認されている22戸の古民家をそれぞれ個別に紹介する。

① 島村善幸家

住所 字池原 240

屋号 マシクランター

建坪 24坪

1924年（大正13年）に
建築。南向き。

おじいさんの代に建て
られた家で、現在の屋主
は3代目。10年ほど前か
ら借家にしている。戦時
中、屋根の一部（正面）
が破壊され、同時にシー
サー（屋根飾子）も譲さ
れた。その後、瓦を修善
したが、その部分は未だ円形状に凹んでいる。骨組みの材料はおおかたチャーギ（イスマキ）
を使用している。戦前棟木を白蟻にやられたので取り換えし、台所は戦後、土間から床に改
造、また数年前には防音工事によって正面のガラス戸もアルミサッシに換えた。

以前は主屋のはかにアシャギ（離れ座）や畜舎などもあったが、アシャギは台風で、畜舎
は戦争で被破。井戸は今でも残っているが使用していない。フールヤー（豚舎）は主屋の西
側に位置し、現在は物置き小屋の一部となっている。ヒンブン（ブロック造り）は戦後に建
てたもので、それ以前はなかった。当時は庭中ミカンの木でいっぱいだったのでヒンブン
は特別必要でなかったという。現在、庭はほとんど花園・菜園で占める。



島村善幸家

③ 仲宗根フミ家

住所 字登川 312

屋号 メーシムジョー（前下門）

坪数 30坪

60年ほど前に建てられた。南向き。

木材はチャーギとイーク（モッコク）であったが、天井を修理したとき他の木材を使用した。台所は北東部に位置し、35年前土間から床に改造。終戦直後は石を3個置いてカマドを設けていて、ちょうどその頃までは三番座にジール（地炉）もあった。11年前に主屋の正面と西側の一部をアルミサッシに換えた。屋根は戦後3回ほどムチをぬりかえており、シーサーは終戦当時に修復したもの。

井戸は現在も残っているが、断水時以外は使用していない。ヒンブンは切石を横にして積み上げており、石材は読谷村宇座からのものという。

現在、主屋の前方西側にはセメント瓦家、東側にはトタン葺きの家が建っており、両方とも借家にしている。西側のものは本来アシャギで、東側のトタン葺きの立っている場所には以前、畜舎があったという。



伊佐フミ家

③ 屋宣実家

住所 字登川 311

屋号 マツヤージ（松屋宣）

坪数 27坪

50年ほど前に建てられた。南東向き。

戦時中、主屋の左半分が破壊され、戦後修復し復元した。

現在、三番座には玄関が増築されており、その部分だけ表に張り出している。主屋のほかには西側にセメント瓦のアシャギ、東側に倉庫が建っていて、倉庫の一画に浴室を設けている。主屋の背部（北側）にはフールヤーが残っている。3室のアーチづくりのもので、当時はカヤ葺きの屋根がついていたという。

ヒンブンはオーグマーイシと称される石灰岩（島尻で採石されている）でつくられ、石積みの最上段にはヒンブンには珍しくアイガキ造りの構造を採用している。

屋敷囲いは現在ブロック造りである。



屋宣実家全景

ヒンブン



④ 伊波善正家

住所 字知花 164

屋号 イージョー

建坪 25坪

80年ほど前に建てられた。南向き。
軒の低いのが特徴で、建築して以来ほとんど手が加えられていない。
シーサーも当時からのものである。
三番座にはまだジールが残っており、調査した22戸の古民家の中でもジールの現存するのはこの伊波家のみで貴重な事例である。ジールは90×90センチの正方形で、現在は床板で蓋をしている。

主屋の東側にトタン葺きのアシャギが建っているが、以前はここに畜舎があったという。北側にはフールヤーが残っている。

屋敷は高さが60~70センチの低い石垣によって囲まれ、屋敷内（庭）は花園とアタイグヮー（菜園）とに二分されている。



伊波善正家

⑤ 池原 清家

住所 字知花 152

屋号 メーユシジョー（前吉門）

建坪 22坪

建築して 100 年余という。南西向き。

防音工事によって一部アルミサッシに換えたが、それ以外はほとんど当時のままである。

主屋の北側にフルヤーがあり、数年前まで、はと小屋として再利用していた。畜舎跡も明瞭に残っていて、今でも部分的にイシバーヤ（石柱）が立っている。また、その前面部には当時の敷石が残っている。

主屋の背部（北側）は広々としており、そのほとんどが菜園に利用されている。

屋敷囲いはブロックであるが、以前はンチャダキ（タケの方言名）による生垣であった。

ヒンブンもブロック造りである。



池原清家

⑥ 糸洲朝栄家

住所 字明道 778

屋号 イツジグワー

坪数 約40坪

主屋は首里にあったものを沖縄市の宮里へ、それから1933年(昭和8年)に宮里から現在の場所に移築されたものである。南向き。

部分的に改築したが間取りは以前のままである。4年前には台所を延長した。

ヒンブンは切石積みで、石材はオーグェイシを使用している。屋敷囲いにも切石積みを採用しているが、現在残っているのは屋敷正面(南)と東側の一部だけである。

昔のおもかげを残すのはこのヒンブンと屋敷囲いの石積みのみで、主屋の西側には、隣接してコンクリート二階建てのアパートを建てている。



糸洲朝栄家

⑦ 大城 弘家

住所 字明道 716

屋号 メースウフグシクグー

建坪 28坪

1917年（大正6年）に建てられた。南向き。

柱の頃いていたところがあるので数年前になおした。木材はチャーギとイークであったが、改築のとき一部材料をかえた。「台所を土間から床に改造、便所、浴室を屋外から屋内へ入れた。」（註）。

主屋の西側に車庫を設け、道路から車庫までコンクリート敷きにしてある。屋敷内は広々とし、庭は一面芝生が植えられている。屋敷囲い及びヒンブンは長方形の切石を横に積んでいる。

今でも井戸が残っているが、蓋をして使用していない。



大 城 弘 家

⑥ 高江洲義春家

住所 字松本 93

屋号 メートゥクマチ（前徳松）

建坪 約20坪

池武当にあったのを終戦直後前の屋主が購入し、現在の場所に移築。その後（B円時代からドル時代に代わった頃：1958年頃）、現屋主の高江洲さんが買いとった。家そのものの歴史は100年を下らないという。南向き。

戦争で破壊された部分は前屋主が移築するときに修理し、台所は14～15年前、土間だったのを高江洲さんが床に改めた。最近では防音工事によって二・三番座にアルミサッシに入れられ、このときチャーガとイーケであった木材がスギに代わった。一番座とクチャ（裏座）も工事の予定が入っている。屋根の修理は雨もりのためムチを1度塗りかえたのみである。



高江洲義春家

⑨ 川上慶一家

住所 美里三丁目 2-17

屋号 ミーシマブク(新島袋)

建坪 29坪

70~75年前に建てられた。

南向き。

内部の骨組みはチャーギ・

イーク・スギ材を使用して

いる。仏間と床間はチャー

ギ、クチャグゥーはスギ材、

他はイークである。



戦後、壁板をベニヤに取りかえ、また、台所のカマドの部分も改造した。台所は現在も一畳は土間である。屋根の修善は三番裏座の部分が戦争によって一坪ぐらいの穴が開いたので修復し、30年ほど前に雨漏りのためムチのぬりかえをした。シーサーは当時からなかった。

主屋の前方東側はプレハブの二階建て(子供部屋)、西側にはセメント瓦葺きの事務所がある。後者は以前、畜舎と納屋のあった場所で、事務所は畜舎のイシバーヤ・イシカベにセメントをぬってそのまま利用した。事務所の前方には井戸があり、上部にポンプが設置され、今でも道具洗いや庭への散水に使用している。

便所は主屋の西側に位置し、その北側に物置き小屋がある。主屋・便所・物置き小屋の間に屋根がとりつけられ、雨降りでも往来がしやすいように配慮されている。

庭は全面セメント敷きで、ヒンブンは30年ほど前に取りのぞいた。現在、屋敷周辺はブロックである。



川上慶一家

⑩ 平 武一家

住所 字美里 354

屋号 イームトウ（伊元）

建坪 約30坪

1937年（昭和12年）に建てられた。南向き。

県農林水産部営農指導課発刊の「沖縄の伝統的農家住宅」で次のように紹介されている。

「昭和46年に台所、居間の改築、アルミサッシにして明るくした。昭和54年に赤瓦からセメント瓦にした。同時に浴室、便所を増築した。納屋を改造して子供部屋を2室設けた。」主屋には現在シーサー（陶製）が据えられているが、セメント瓦に替えたときに設けたもので、赤瓦の頃はなかったという。

ヒンブンは長方形の切石で、戦後に建てた。石材はオーグマーイシ。

井戸は現在も使用しているが、生活用水ではなく、もっぱら家畜の飼育用水となっている。



平 武 一 家

⑪ 仲宗根弘勇家

住所 越来3丁目3-2

屋号 メントーグー（前当小）

建坪 23坪

1881年（明治14年）に建築。最初で述べたように建築年代の確実な事例では今のところ市内で最も古い家である。南向き。

軒の低い点に特徴があり、屋根の様のつくりも他の古民家とは異なっている。

1951年（昭和26年）に内部改造と瓦の補修が行なわれ（註）、数年前、一番座にアルミサッシが入れられたほかは、ほとんど手が加えられていない。

主屋のほかにアシャギ、井戸、ヒンブン等がある。アシャギは主屋の東側に位置し、現在、長男夫婦が住んでいる。井戸は現在使用されていない。ヒンブンは石灰岩の切石で、車の出入りをスムーズにするために一部改造している。



仲宗根弘勇家全景

主屋の背部
(北西より撮影)



⑯ 仲宗根盛一家

住所 越来3丁目3-4

屋号 ナカメーツー（仲前ン当）

建坪 28坪

1933年（昭和8年）に建築。南向き。

「台所部分は2回改造している。2回目は1974年（昭和49年）であるが、また落差の部分がある。壁の張りかえは昭和51年で、玄関と正面の一部は今年（昭和56年）、アルミサッシに切り換えて明るくした」（註）。

井戸は現在でも洗濯や入浴用の水に使用しており、屋敷の門はきれいに剪定されたガジュマルに覆われている。屋敷囲い、ヒンブンはブロックである。



仲宗根盛一家

⑬ 仲宗根正徳家

住所 越来3丁目3-12

屋号 アガリジョー（上門）

建坪 約26坪

60年頃前に建築された。南向き。

木材はチャーギとイークが主で、部分的にスギが入っている。防音工事の際、アルミサッシに改めた。

主屋の西側には井戸がある。ほぼ完全な形のまま残っており、現在でも水は風呂用に使用している。井戸のすぐ前にはウムアラヤートーン（ツツマイモ等を洗う石製容器：直径70cm前後のボウル状を呈している。）が置かれている。

屋敷囲いの石垣のうち、西側（門のある側）は20センチ前後の小型の石を高く積んである。面は整えられ、全体的に緻密に仕上がっており。



仲宗根正徳家主屋近影



井戸とウムアラヤートーン



屋敷囲いの石積み

⑯ 高江洲盛喜家

住所 越来3丁目6-9

屋号 ト一(当)

建坪 33坪

1926年(昭和元年)に建てられた。南向き。

昭和48年に主屋の後部と左側の壁をブロックに改築し、2~3年前、防音工事の際にアルミサッシを入れた。

8年項前までは赤瓦葺きのアシャギもあったが、白蟻にやられて取り壊わした。現在、その場所にはコンクリート家が建っている。

井戸は今でも洗濯、トイレ、庭木の散水などに使用している。

ヒンブンは切石によるもので、戦後に立てられた。



高江洲盛喜家

⑭ 久場良盛家

住所 住吉1丁目9番19号

屋号 クバ（久場）

建坪 35坪

1936年（昭和11年）に建てられた。

南向き。一・二番座はチャーギ、三番座はイークを使用している。防音工事でアルミサッシを入れたとき、天井の材料を換え、同時に雨戸も新しくつくりかえた。

台所は土間であったが、20年頃前に床をつくった。台所の前にはセメントの水タンクを2個設置してある。



主屋の東側のアシャギ（セメント瓦）は、戦後建て直したもので、それ以前はカヤ葺きだった。内部の木材は戦前のものをそのまま再利用した。現在、物置き小屋にしている。

主屋西側にはコンクリート2階建て（子供部屋）がある。昨年（昭和61年）建てられ、それ以前は畜舎があった。

井戸は現在も残ってはいるが使用していない。

ヒンブンと屋敷囲いの石垣は長方形の切石を横に積み、前者はンナトゥガーライシ（鹿川石）、後者はンナトゥガーライシとユンタンインシ（読谷石）を使っている。ユンタンインシは陸路馬車で運んだが、ンナトゥガーライシは泡瀬まで船で運搬し、泡瀬から馬車で運搬した。



久 場 良 盛 家

⑯ 島袋盛政家

住所 安藤田1丁目5-19

屋号 カマアガリイー（蒲東り上）

建坪 36坪

65年頃前に建てられた。南向き。

昨年5月に屋根のムチぬりをしたが、未だ部分的に雨漏りがするという。クチャ（裏座）側の柱を修復するので、これと同時に再度、ムチぬりかえを行う予定である。

アシャギは戦後立て直した。

以前はフルヤーや畜舎もあった。畜舎は2階建てで、1階はウシ・ウマなどの家畜小屋、2階は物置き（ワラ・マメ等）と子供の部屋に分かれていた。

井戸は当初からなく、代わりに溜池が5ヶ所あった。そこで洗濯やイモ洗いを行なっていた。

ヒンブン・屋敷囲いは石灰岩の切石積みである。



⑯ 神里興盛家

住所 安慶田1丁目8-20

屋号 カンジャトウ（神里）

建坪 32.5坪

1938年（昭和13年）に建築。南向き。

昭和45年頃、土間の部分を改造し、台所を東側へ増築した。主屋を改築したのはあとにもさきにもこのときだけで、間取りやシーサーは以前のままである。

アシャギは戦後に建てた。

もともと井戸ではなく、そのかわり地下式の貯水タンクを埋設してある。

屋敷囲いはブロックであるが、戦前は生垣であった。

⑰ 神里興雄家

住所 安慶田1丁目9-18

屋号 カンザトゥグマー（神里小）

建坪 28坪

1925年（大正14年）に建てられた。南向き。

屋主は二代目。これまで屋根のムチぬりかえを3度行なったが、内部の構造は以前のままである。主屋の前方東側にセメント瓦のアシャギがある。

ここも前述の神里興盛家同様、井戸ではなく地下式の貯水タンクが設置されている。

屋敷囲いは現在ブロックであるが、以前は生垣であった。

⑲ 屋宣盛輝家

住所 安慶田2丁目24-13

屋号 タルヤージー

建坪 26坪

約60年前に建築された。南向き。

主屋の西側にコンクリートで便所を増築、正面の一部もアルミサッシに換えている。以前は畜舎があって牛1頭、馬2頭のほかヒーラー（山羊）も飼っていた。

屋敷囲いは当時の切石積みが南（正面）と西（道路側）に残っているが、西側の上半部はブロックに改めている。

屋敷内には主屋のほか、東西両側にコンクリートづくりの離れ家が建っている。



島袋盛政家



神里興盛家



神里興雄家



屋宜盛輝家



宮里信栄家



知念和雄家

② 宮里信栄家

住所 字古謝 69

屋号 イリマターシグワー（西又吉小）

建坪 20坪

1933年（昭和8年）に建築。南向き。

当初、カヤ葺きだったのを戦後、赤瓦葺きに改め、同時にシーサーも据えた。終戦直後はアメリカ軍の事務所に利用されたことがある。

主屋の東側にトタン葺きの物置き小屋が設けられているが、以前、ここには畜舎があった。物置き小屋の前方に井戸が残っていて、現在でも飲料水に使用されている。

屋敷囲いはアカバナ（ブッソウゲ）であるが、戦前はシマダキの生垣囲いであった。

③ 知念和雄家

住所 字古謝 96

屋号 ナカシグワー

建坪 28坪

60年前頃に建てられた。南西向き。

現在、人は住んでなく知念さんが管理している。木材は4寸角のスギを使用。建築以来、ほとんど手が加えられてない。

庭は菜園に利用され、主屋の背部にはバナナが植えられている。

主屋の西側にはフールヤーや畜舎が残っており、現在はいずれも納屋として利用されている。



② 伊波正新家

住所 園田1丁目8-6

屋号 クシガネコ

建坪 22坪

58年頃前に建てられた。南向き。

屋根は部分的にムチをぬりかえしているが、内部はほとんど手を加えてない。木材はチャーギとイーグである。

主屋の後方（北東部）に井戸があるが、戦前は門から入るとすぐ左手にあった。井戸にはポンプが設置され、これによって水揚げをしている。

主屋の左右には戦後建てられた離れ家がある。



伊 波 正 新 家

小 結

以上、22戸の古民家を簡単に紹介したが、今回は時間の都合上、詳細な調査を実施するには至らなかった。しかし、先述のように沖縄の伝統的な住宅は減少の一途を辿っており、近い将来、完全消滅に至ることは確実といえよう。したがって、今後、建築学の立場から家屋の構造、間取り、付属建造物等、植物学の面から屋敷内の植栽、民俗学の分野から家にまつわる諸儀礼など、関連する諸科学のそれぞれの視点にもとづく本格的な記録保存調査が早急な課題といえよう。

註) 「沖縄の伝統的農家住宅」 沖縄県農林水産部営農指導課 昭和56年7月

参 考 文 献

- 「沖縄の伝統的農家住宅」 沖縄県農林水産部営農指導課 昭和56年7月
- 鶴藤鹿忠 「琉球地方の民家」 明玄書房 昭和47年4月30日
- 又吉真三 「沖縄県の民家Ⅰ」「民家」 西日本新聞社 昭和53年2月25日
- 山田水城・古川修文・武者英二 「沖縄久米島の総合的研究」 法政大学百周年記念久米島調査委員会編 昭和59年2月



仲宗根フミ家／井戸

V ふるさと園の活用及び施工業者一覧

ふるさと園の活用

(趣旨)

第1条 この条例は、地方自治法（昭和22年法律第67号）第244条の2の規定に基づき、沖縄市立ふるさと園（以下「ふるさと園」という。）の設置及び管理について必要な事項を定めるものとする。

(名称及び位置)

第2条 ふるさと園の名称及び位置は、次のとおりとする。

名称 沖縄市立ふるさと園

位置 沖縄市字胡屋 831番地

(事業)

第3条 ふるさと園では、次の各号に掲げる事業を行う。

- (1) 郷土の生活様式及び生活技術の伝承に関する事。
- (2) 郷土の生活用品の展示及び鑑賞に関する事。
- (3) その他市長が必要と認める文化事業。

(使用の拒否)

第4条 市長は、ふるさと園を使用しようとする者が、公の秩序又は風俗をみだすおそれがあると認めるとき、又は管理上支障があると認めるときは、使用を拒否することができる。

(禁止行為)

第5条 ふるさと園においては、次の各号に掲げる行為をしてはならない。

- (1) ふるさと園の施設、設備を汚染し、又は損傷するおそれのある行為
- (2) 所定の場所以外での喫煙、又は火気の使用
- (3) 聴音の発生または暴力等により、他人に迷惑を及ぼす行為
- (4) 前各号のほか、ふるさと園の管理に支障をおよぼすおそれのある行為

(損害賠償)

第6条 ふるさと園の施設、設備を損傷し、又は滅失させた者は、その損害を賠償しなければならない。

(管理の委託)

第7条 市長は、地方自治法第244条の2第3項の規定により施設の管理を財団法人沖縄こどもの園に委託する。

(委 任)

第8条 この条例の施行に関し必要な事項は、市長が別に定める。

附 則

この条例は、公布の日から施行する。

ふるさと園の利用案内

ふるさと園の一般見学は、こどもの他の施設と同様に自由にご覧なれます。下記のことについては施設を御利用できますので、詳細は「こどもの国」事務所にお問い合わせ下さい。

- ・郷土の生活様式や生活技術の伝承に関するものに利用したい場合
- ・郷土の生活用品の展示や鑑賞に関するものに利用したい場合
- ・その他の文化事業関係に利用したい場合

利 用 時 間	料 金
午前9時～午前12時まで	2,000円
午前1時～午後4時半まで	3,000円
午前9時～午後4時半まで	5,000円

(10名程度から50名程度の団体に限る)

ふるさと園利用上の注意

- ・営利を目的とした行為はしないこと。
- ・使用に際し、お食事はできますが「宴会」等はしないこと。
- ・ふるさと園の施設、設備を汚染し、又は損傷する行為をしないこと。
- ・所定の場所以外での喫煙、又は火気を使用しないこと。
- ・騒音の発生又は暴力等により、他人に迷惑をおよぼす行為をしないこと。
- ・その他、ふるさと園の管理に支障をおよぼすおそれのある行為をしないこと。

施工業者一覧

・一期施行業者（昭和60年度）	・二期施行業者（昭和61年度）
・図南建設コンサルタント	・嘉陽田建設
・創建設計	・徳里造園土木
・島田建設	・高橋産技工業
・三協土建	・創建設計
・美光電気工事店	

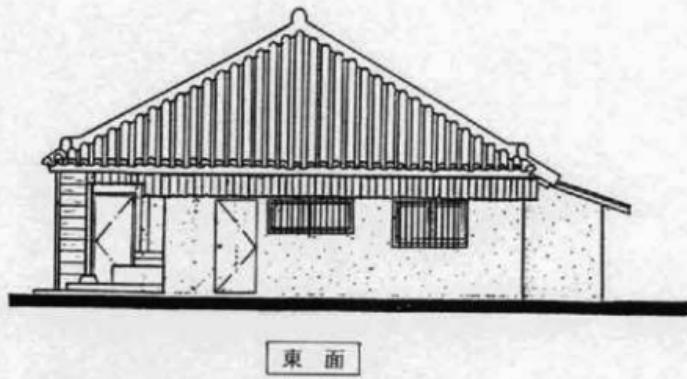
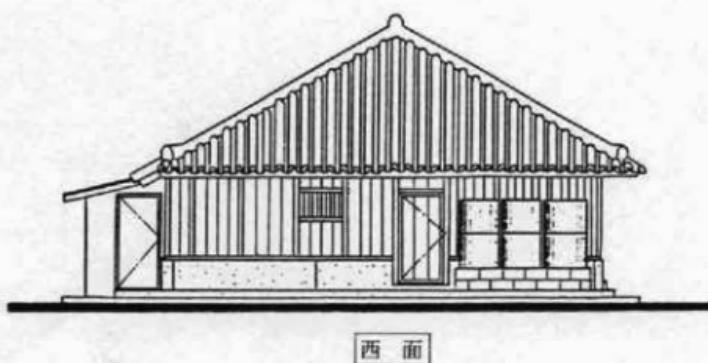
図 面

母屋移築前面図
母屋移築前平面図
母屋竣工骨組図
母屋竣工矩計図
アサギ竣工図
マチフル竣工図
井戸竣工図
畜舎竣工図

図 版

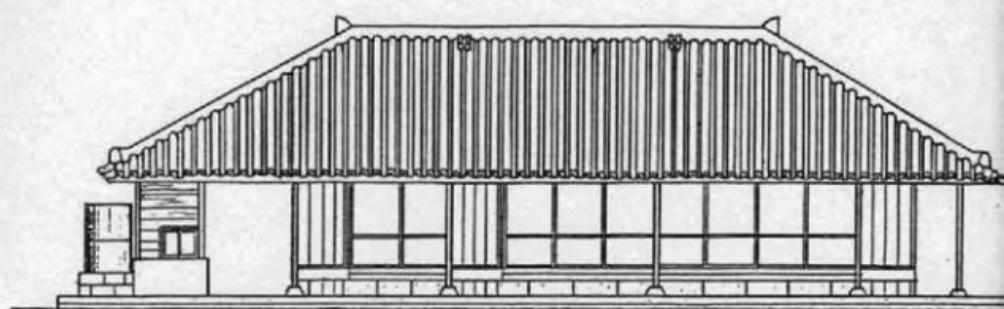
母屋解体前
母屋解体
母屋移築復元
アサギ復元
マチフル解体前
マチフル移築復元
井戸復元
畜舎復元
高倉復元
南面石積み
金武町中川と海岸の石灰焼窯
読谷村残波岬海岸

立面図

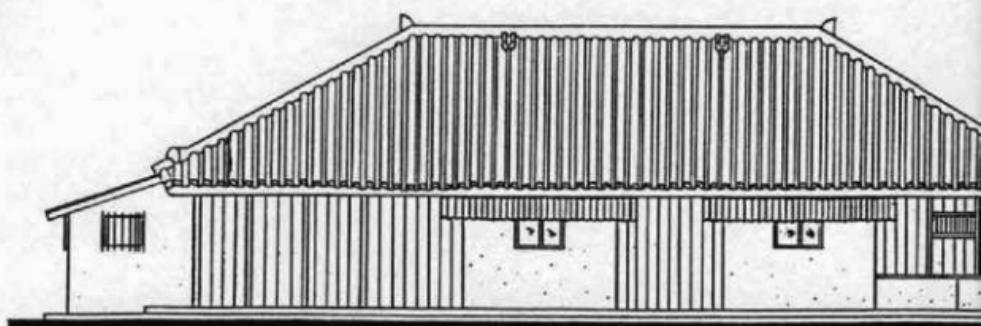


6 m

*図面は市建設部建築課
並里清隆氏の提供による



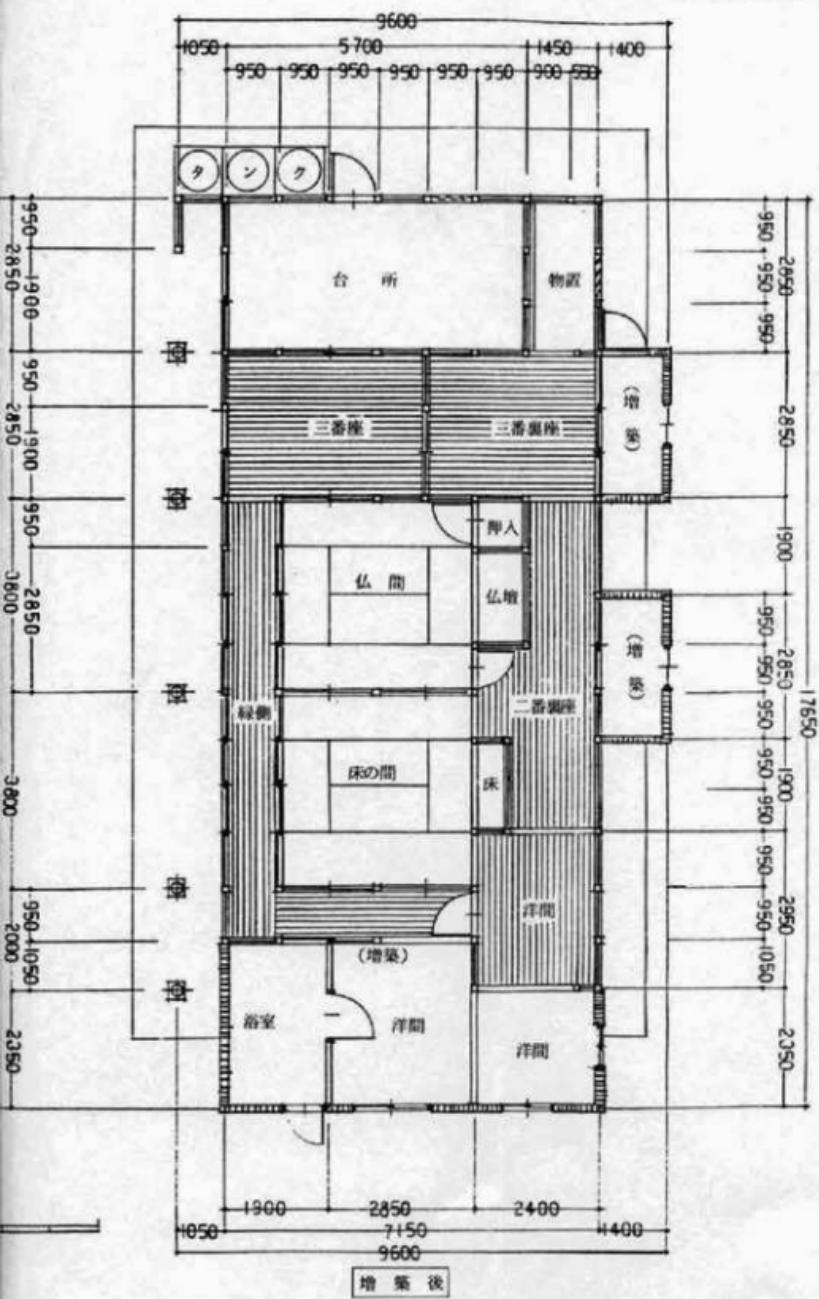
南面

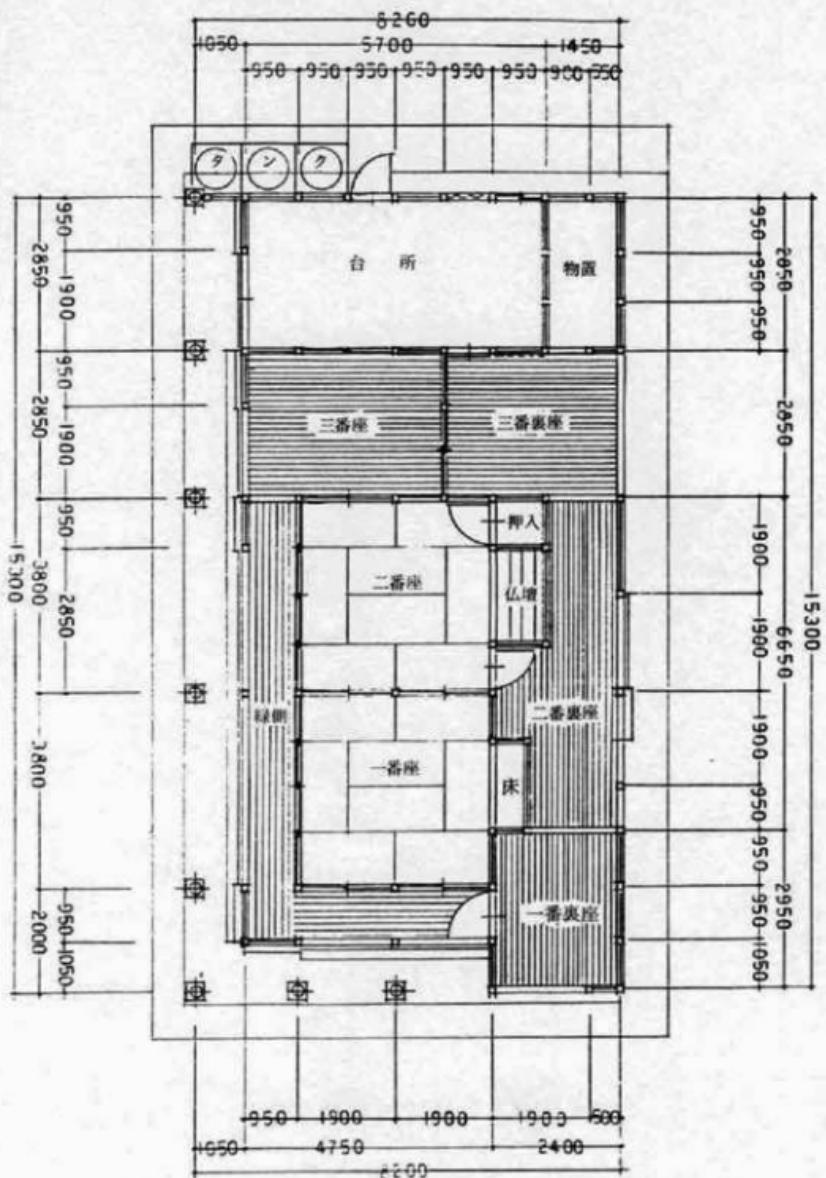


北面

0

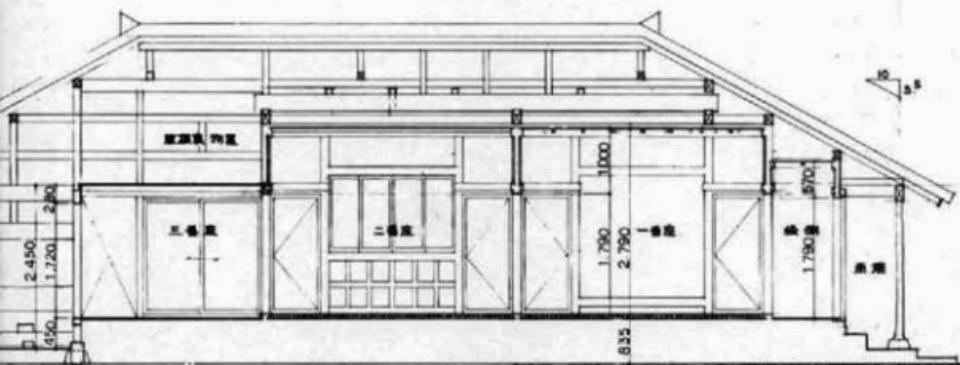
母屋移築前平面図



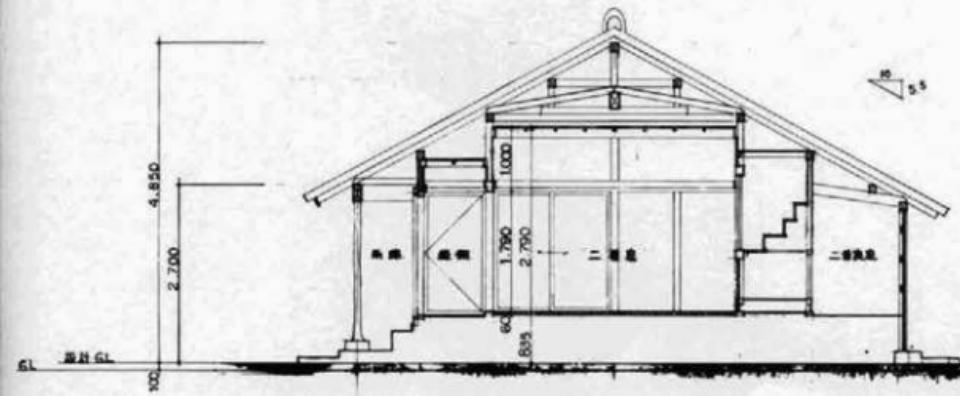
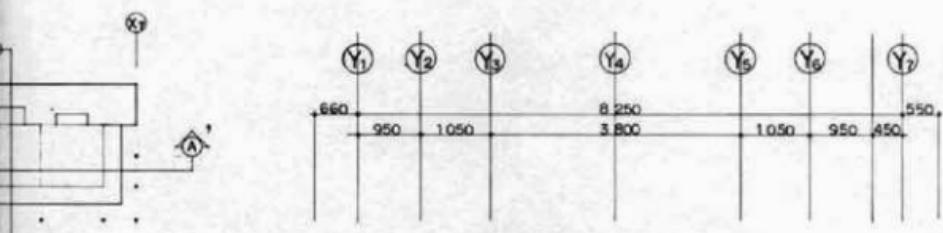


増築前想定図

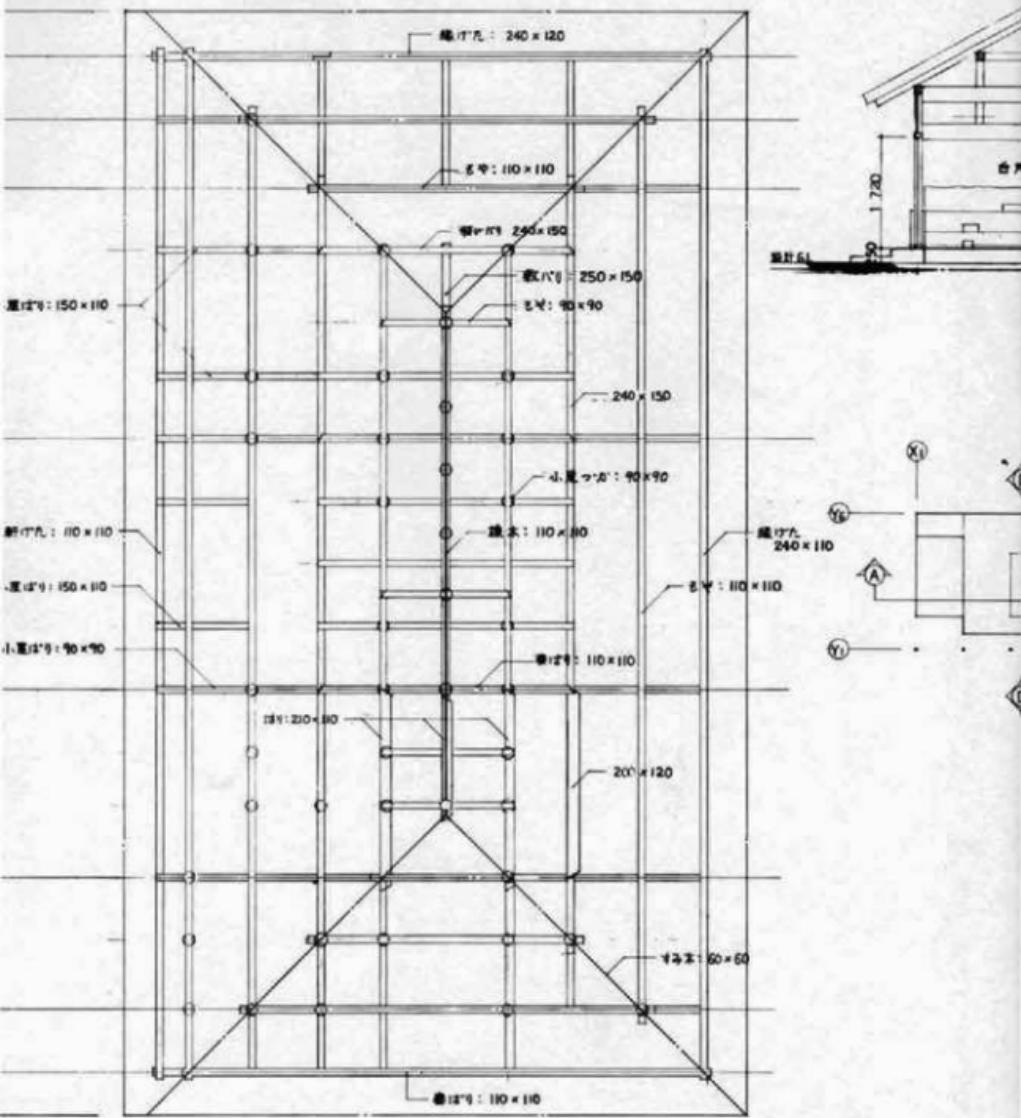
竣工骨組図



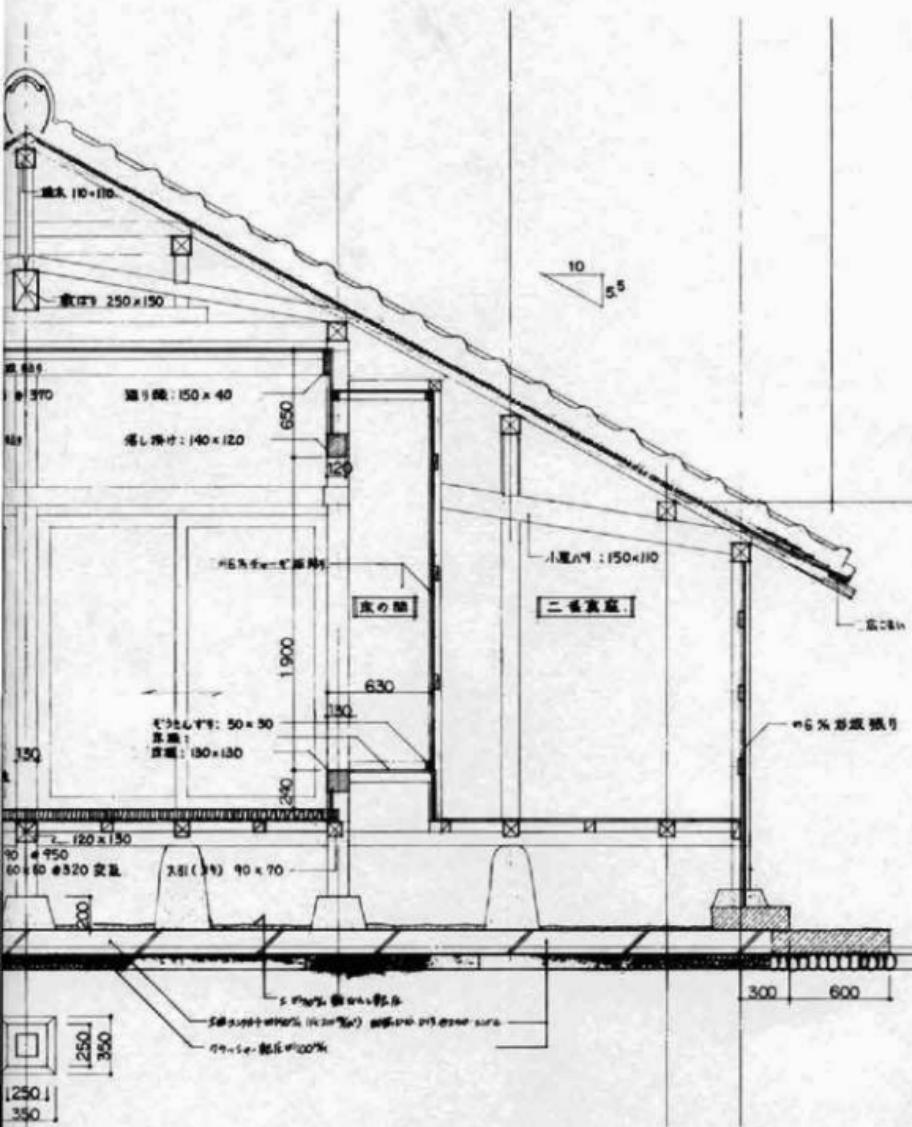
断面図 S = 1/50

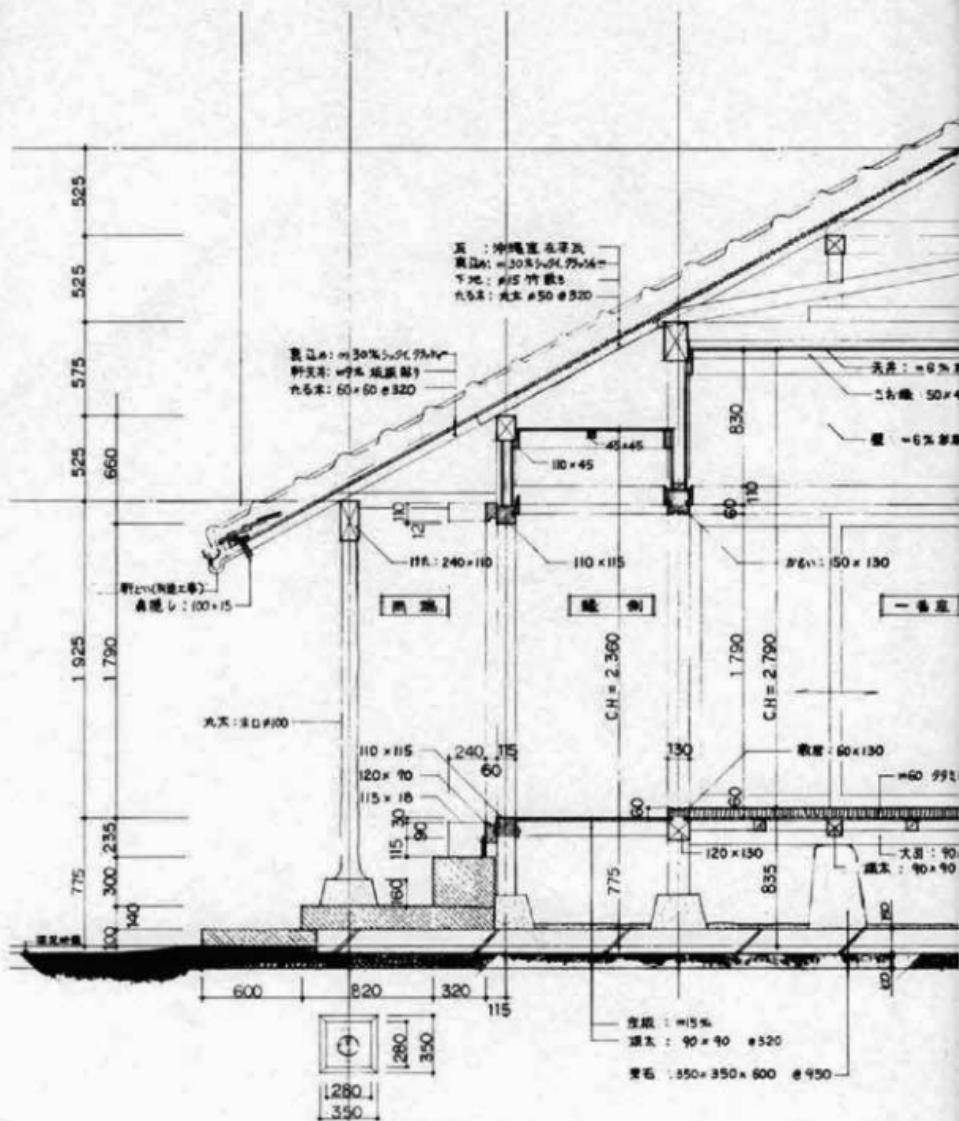


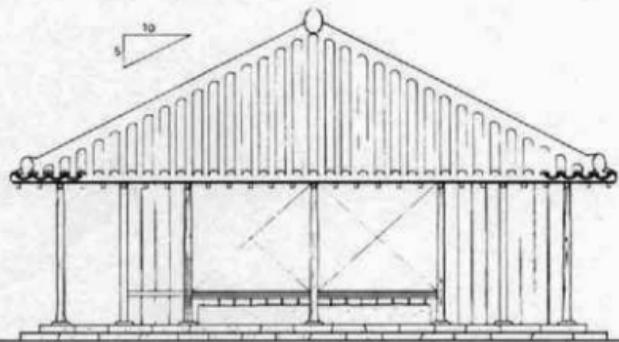
断面図 S = 1/50



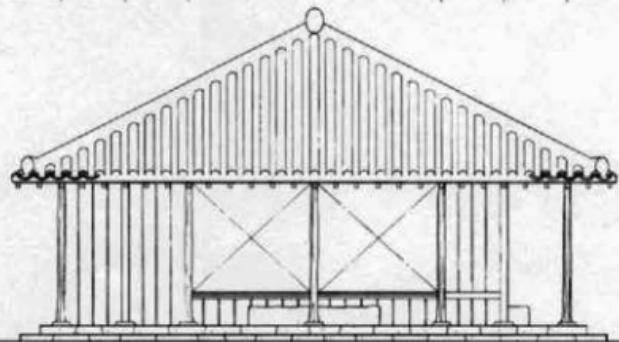
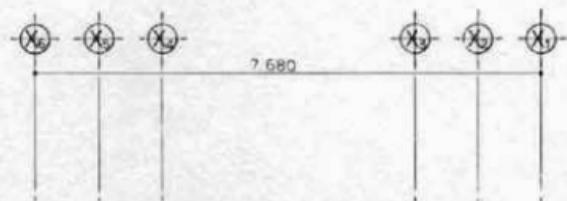
矩計図



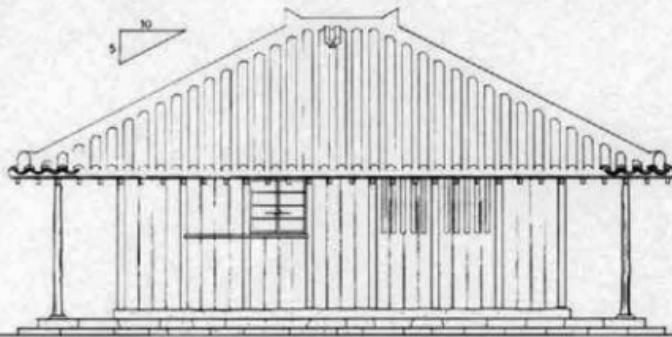




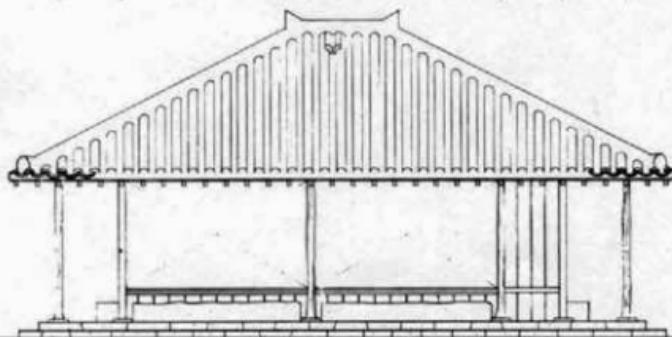
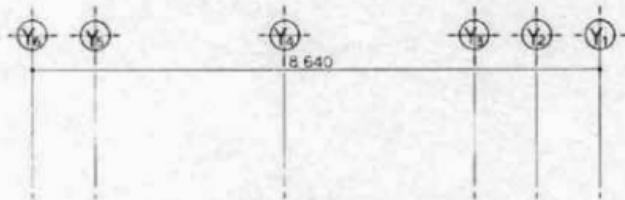
南立面図 1:50



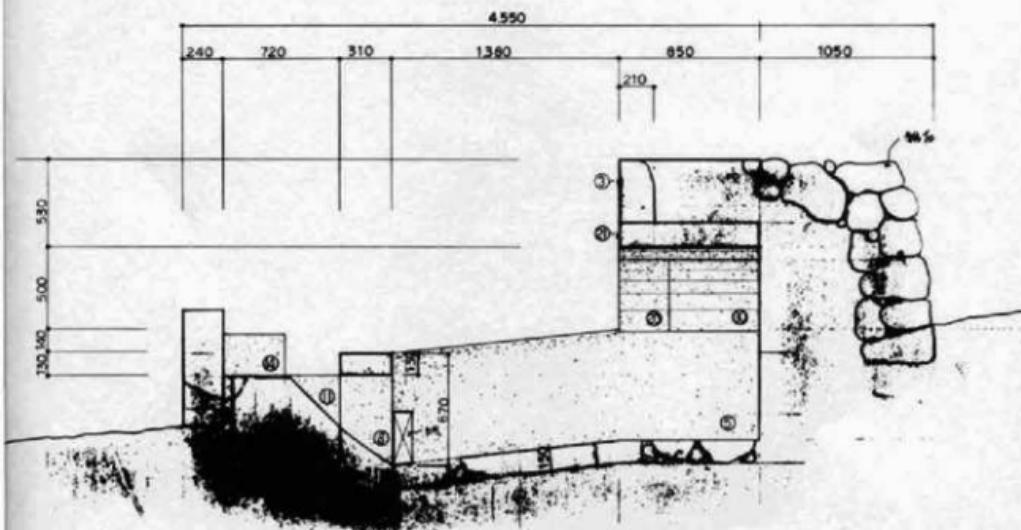
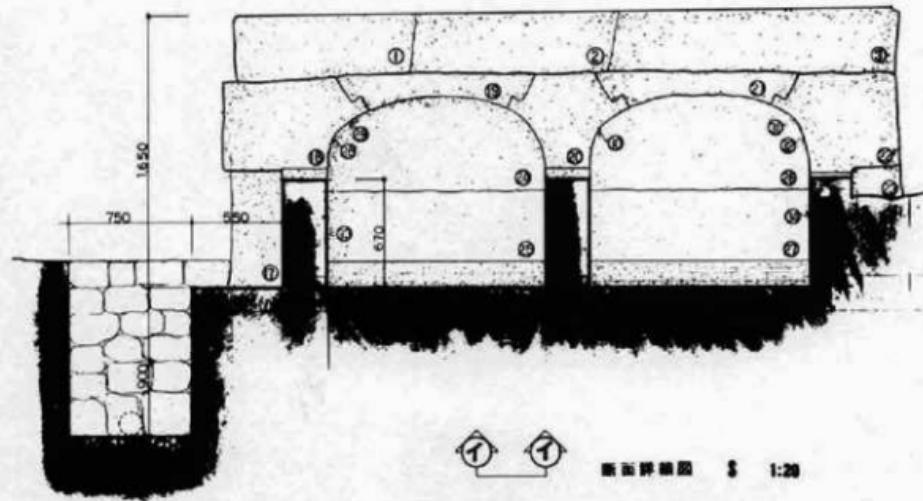
北立面図 1:50

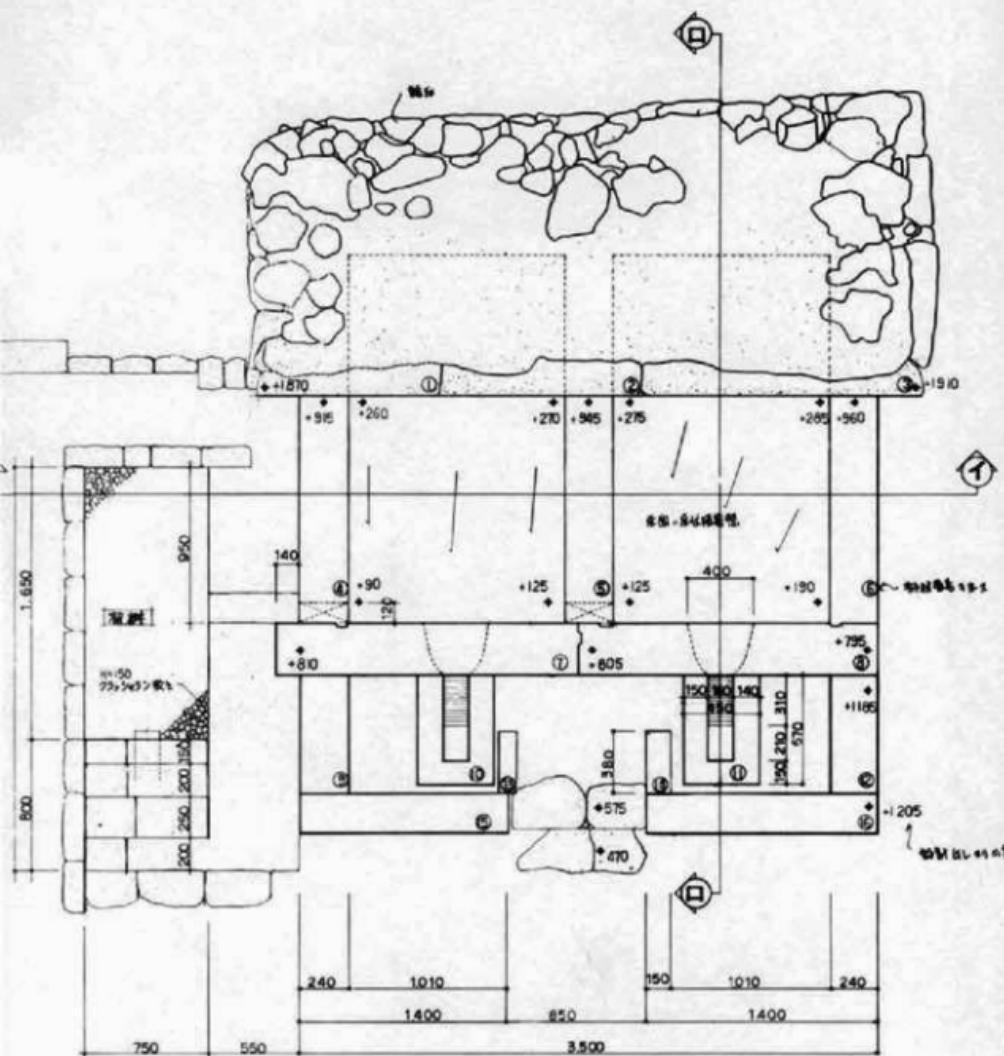


スパン図 1:50

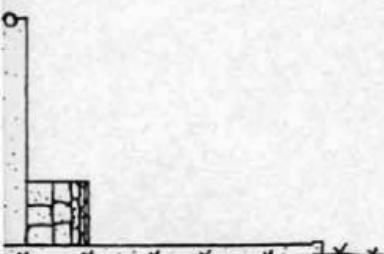


スパン図 1:50

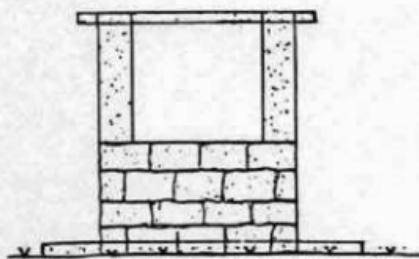




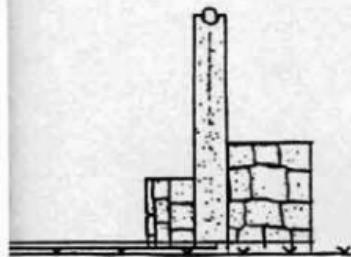
井戸竣工図



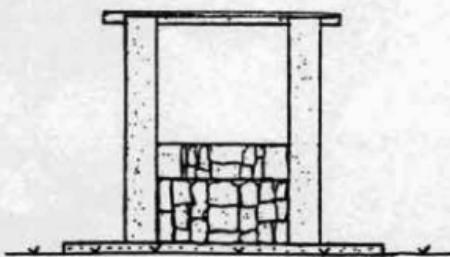
東立面図



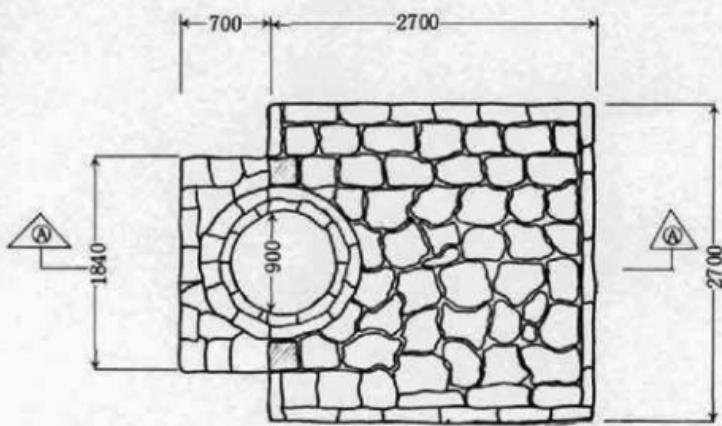
南立面図



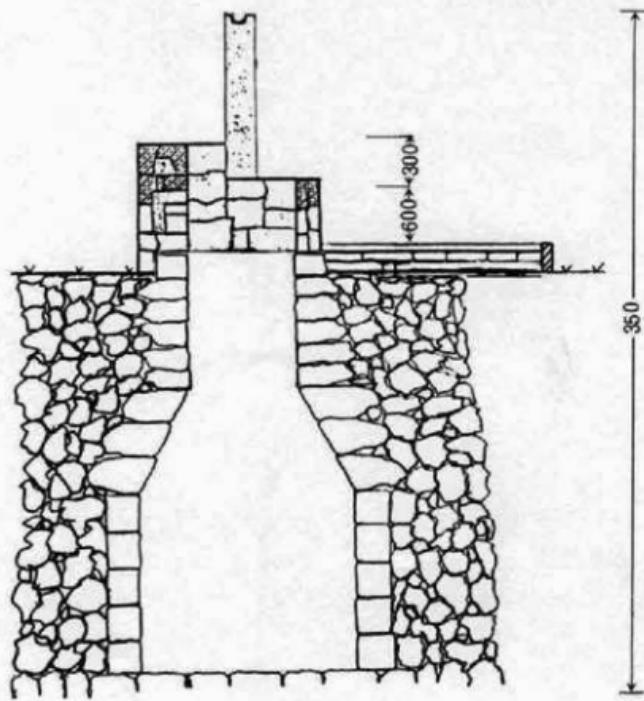
西立面図



北立面図

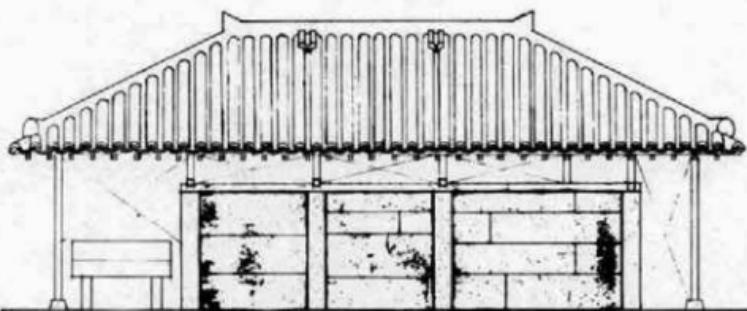


平面図

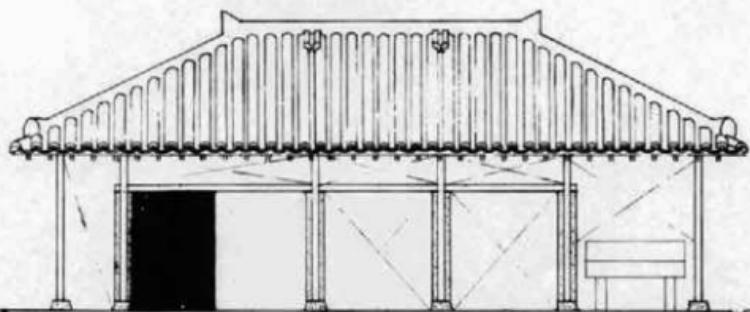


① ~ ② 断面図

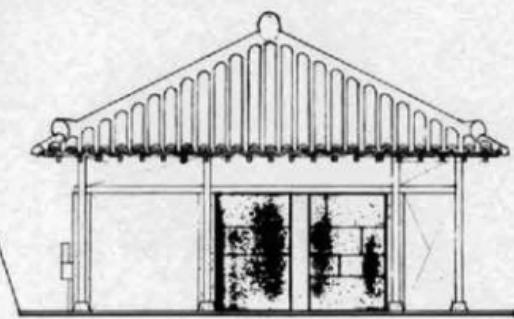
工図



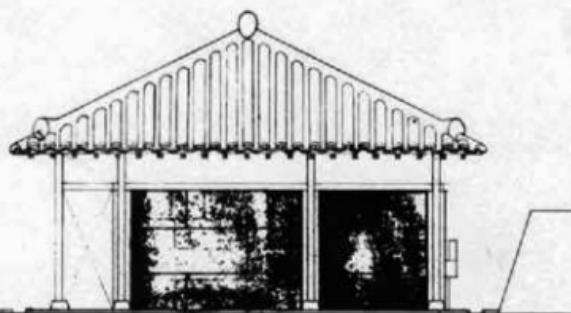
西立面圖 S=1/50



東立面圖 S=1/50



南立面图 S=1/50



北立面图 S=1/50



母屋／解体前／南面



母屋／解体前／南西面



母屋／解体前／東面



母屋／解体前／北面



母屋／解体前／屋根裏の小屋組



母屋／解体前／屋根裏の小屋組



レ 母屋／解体中／瓦取り外し／北西面



マ 母屋／解体中／瓦取り外し（北面）



母屋／解体中／瓦取り外し（南面）



母屋／解体中／瓦取り外し後の表面加工



母屋／解体中／瓦取り外し完了
／野地状態／東面



母屋／解体中／小屋組・桟木の状態／西面



母屋／解体中／小屋組・棟木の状態／北面



母屋／解体中／樋取り外し後の状態



母屋／解体中／軸部の状態／北西面



母屋／解体中／軸部と増築の状態／東面



母屋／解体中／二番座廊下より三番座を望む



母屋／解体中／二番座裏座より三番座裏座を望む



母屋／解体中／床組／根太・大引配置



母屋／解体中／台所より三番座を望む



母屋／解体後／東石とイシジ（礎石）



母屋／移築復元／台所壁石／北西面



母屋／移築復元／軒石の取付／南面



母屋／移築復元／軸部組立／北面



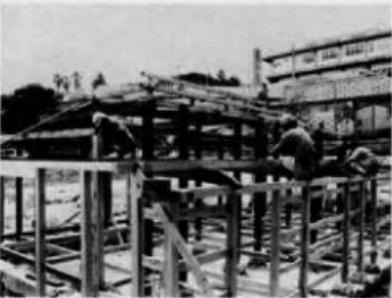
母屋／移築復元／小屋組組立中



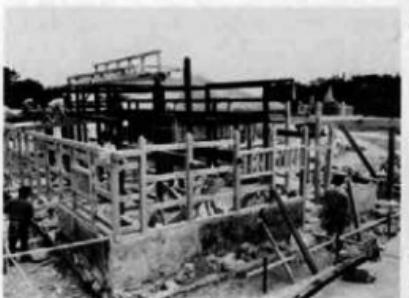
母屋／移築復元／組立中／南面



母屋／移築復元／組立中／西面



母屋／移築復元／組立中／北東面



母屋／移築復元／組立中／北西面



母屋／移築復元／組立中／南西面より全景



母屋／移築復元／組立中／南西面



母屋／移築復元／組立中／北西面



母屋／移築復元／棟取付／北西面



母屋／移築復元／東石・大引等の状態



母屋／移築復元／野地竹の取付／北西面



母屋／移築復元／ルーフィング貼り／南西面



母屋／移築復元／三番座裏座の壁板貼り／北面



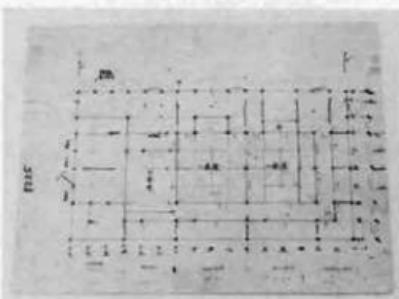
母屋／移築復元／床板貼り



母屋／移築復元／瓦搬入



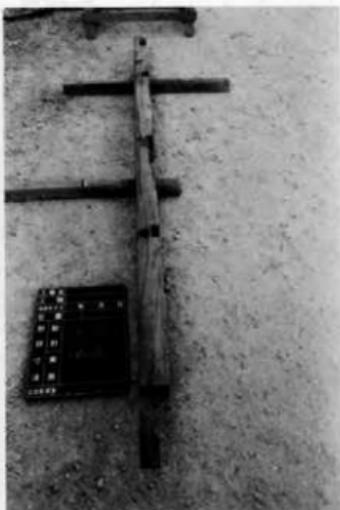
母屋／移築復元／瓦葺き／西面



母屋／絵図版

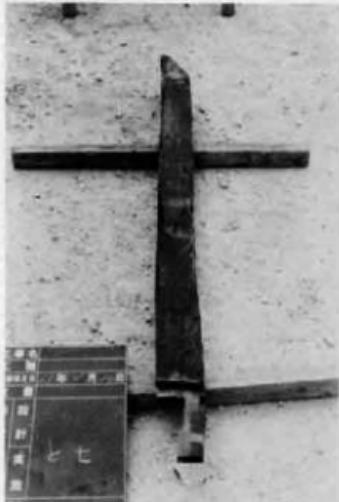


母屋／軒替役の材料休仔



母屋／解体後の骨組／大引（一番座）





母屋／解体後の骨組材料／仕口



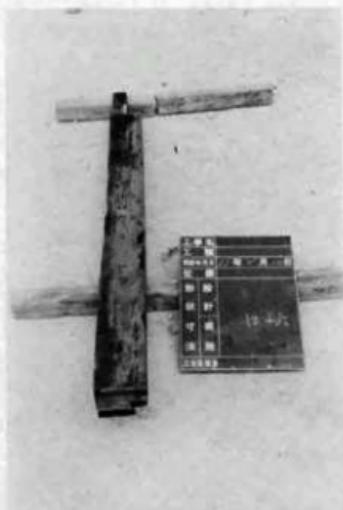
母屋／同上



母屋／同上



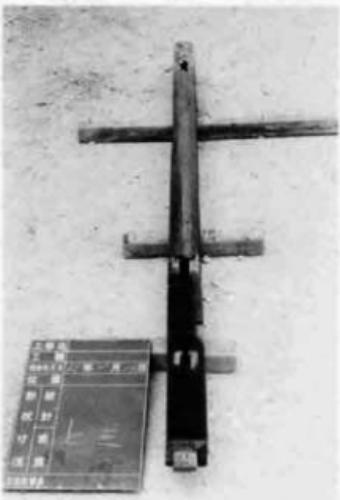
母屋／解体後の骨組材料／仕口



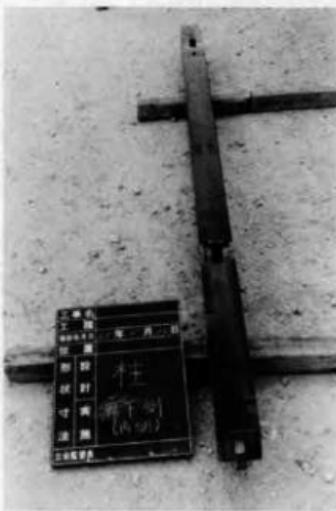
母屋／同上



母屋／同上



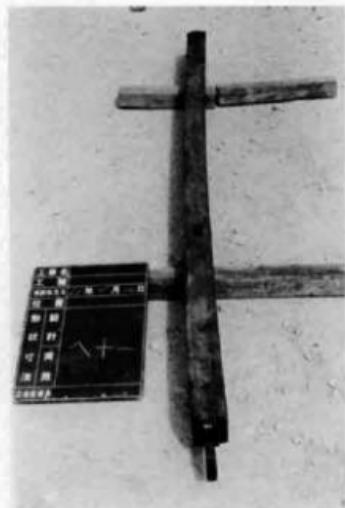
母屋／解体後の骨組材料／仕口と柄穴



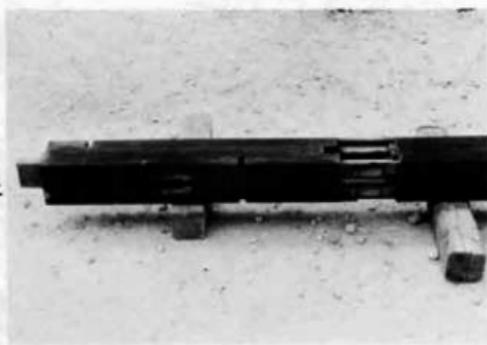
母屋／同上



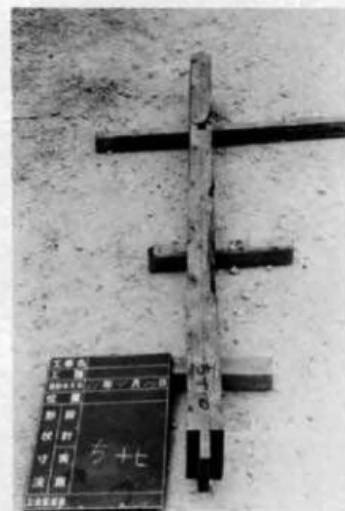
母屋／同上



母屋／解体後の骨組材料／仕口と柄穴



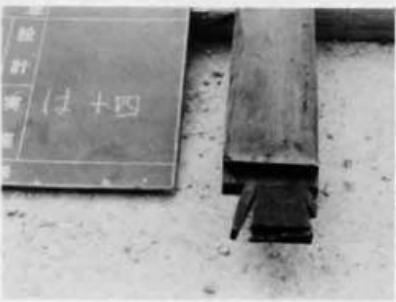
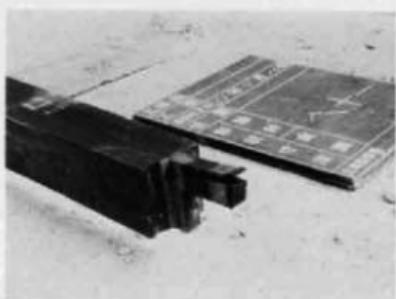
母屋／同上



母屋／同上



母屋／解体後の骨組材料／仕口

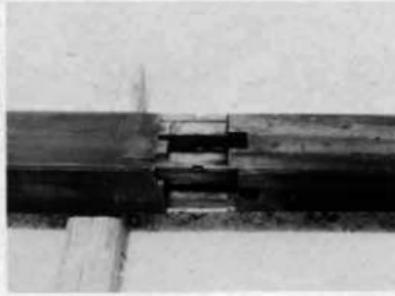
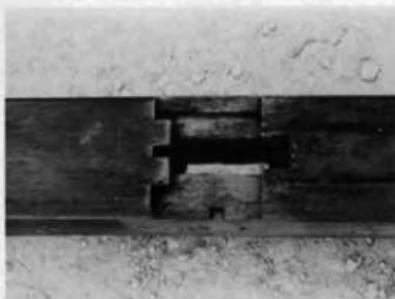
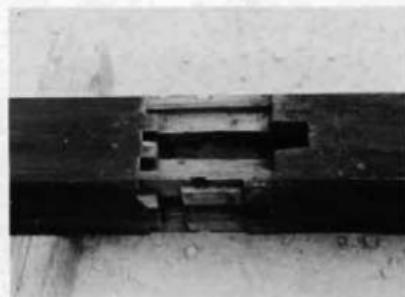




母屋／解体後の骨組材料／仕口と柄穴



母屋／解体後の骨組材料／仕口と柄穴





アサギ／基礎工事



アサギ／棟取付／北面



アサギ／組立中／西面



マチフル／解体前／南面



マチフル／解体前／平面



マチフル／解体前／東面



マチフル／解体前／番付



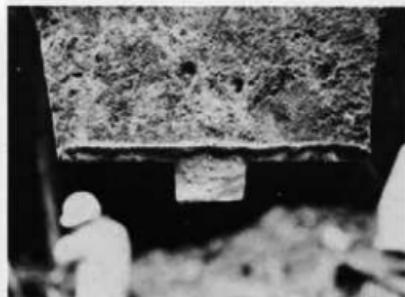
マチフル／解体／アーチ部分



マチフル／構造上の特徴／アーチ支柱
(仮称) 部分



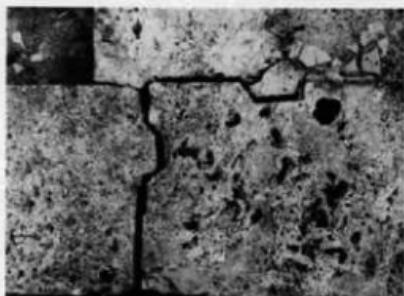
マチフル／構造上の特徴／アーチ支柱
(仮称) とアーチ部分の組み重



マチフル／構造上の特徴／アーチ支柱下部
の楔 (凸)



マチフル／構造上の特徴／アーチ支柱下部受け (仮称)
の楔 (凸) / 左図版の楔 (凸) とセットになる



マチフル／構造上の特徴／あいがき
(勝連町の方言)



マチフル／構造上の特徴／あいがき
(勝連町の方言)



マチフル／解体移築後に現場で保存



マチフル／復元／クワイー(方言名)
を用いた加工石への輪郭線記入



マチフル／復元／クワイーの形合わせ



井戸／基礎掘り工事



井戸／基礎周辺パイル打ち工事



井戸／基礎工事／栗石敷き



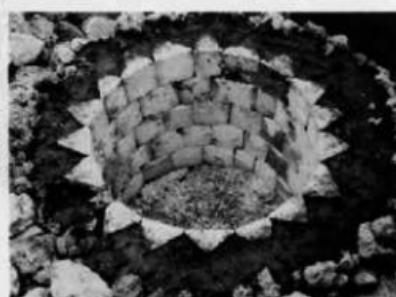
井戸／基礎工事／根石据え付け



井戸／石積の中心線と決定



井戸／第1段階石積途中



井戸／第1段階石積完了



井戸／第2段階石積勾配の測定



井戸／第2段階石積のはじめ作業



井戸／第3段階石積途中



井戸／筒据え付完了



井戸／石敷



井戸／筒背面の石積



井戸／クワイー（方言）／型取り道具／ベニヤ
板で半円状



井戸／石加工／セットハンマーとハツリノミ



井戸／石加工／ユーキ



井戸／石加工／截断器



井戸／石加工



蓄舍／基礎工事



蓄舍／石柱取付



蓄舍／石壁取付



蓄舍／石壁取付完了／東面



蓄舍／石壁取付完了／南面



蓄舍／小屋組開始／南西面



蔵舍／軒柱取り付け



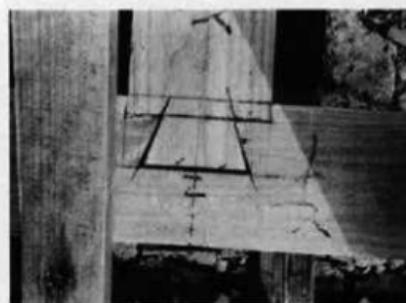
蔵舍／石柱直上の小屋組み



蔵舍／小屋組の軒手



蔵舍／小屋組の軒手



蔵舍／小屋組みの仕口



蔵舍／柱・小屋組（東面）



畜舎／柱・小屋組み（西面）



畜舎／柱・小屋組（北面）



畜舎／柱・小屋組（北西面）



畜舎／棟取付け後の全景（南西面）



畜舎／石組みの飼料箱作製



畜舎／野地竹の取付



蓄舎／瓦葺き開始／北西隅



蓄舎／瓦葺き



蓄舎／瓦葺き



蓄舎／漆喰塗り



蓄舎／調査／具志川市赤道・久田友光氏宅



高倉／基礎工事／素石敷きと転圧



高倉／基礎工事／台座枠取り付け／西面



高倉／基礎工事／イシジ（礎石）
用のセメント台座



高倉／基礎工事／イシジ（礎石）据え付け及
び脚柱用の柄穴



高倉／基礎工事／ワイヤロープ引っ掛け用の
台座



高倉／下部構造と上部架構組付／柱・貫・受梁
／南東面



高倉／上部架構組付／胴柱の取付／南東面



高倉／上部架構組付／銅桁の取付／東面



高倉／銅桁の鼻蓋



高倉／構造／株木とサス及び妻サス



高倉／構造／株木とサス及び横サス／キチモタッピと樺／南西面



高倉／小屋組完了



高倉／竹茅刈り／宜野座村漢那カニンドウ山



高倉／竹茅の束



高倉／竹茅の搬入



高倉／ヤーフチバーイの作製



高倉／ヤーフチバーイの先端



高倉／各部材と茅葺で使用するスルガーナー



高倉／ユチブクの取付



高倉／竹茅葺き／ニーブチ／北面



高倉／竹茅葺き／ニーブチ・上からウシブク
でおさえる／北面



高倉／同上・櫓でウシブクを叩く／北面



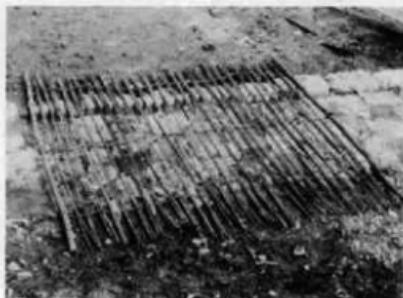
高倉／ニーブチ途中／東面



高倉／竹茅葺き／内側から外側にヤーフチバーイを突き刺す



高倉／イリチャアンムンの作製



高倉／イリチヤアンムン完成



高倉／イリチヤ葺き



高倉／イリチヤアンムンの取付／南西面



高倉／イリチヤアンムンの取付／近景



高倉／竹茅葺き後の辺りそろえ



高倉／チニブ編み／横束作り



高倉／チニブ編み開始



高倉／チニブ編み途中



高倉／同上



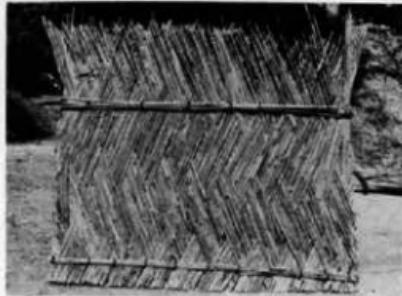
高倉／同上



高倉／同上



高倉／チニブ編み後事の調整



高倉／チニブ編み完了



高倉／チニブ壁の取付



高倉／同上



高倉／調査／大宜味村喜如喜・平良真次氏宅



高倉／梯子の作製



高倉／梯子の作製／近景



南面の石垣／東側石積より作業開始



南面の石垣／東側石積途中



南面の石垣／東側石積内側



南面の石垣／石加工



南面の石垣／西側石積ほぼ完了



石灰焼窯／金武町中川／東面遠景



同上／東立面



同上／カマグチ／東面



同上／南立面



同上／イーチミー／南面



同上／キツヅミー／西面



石柱用の石材掘削跡／読谷村字字座浜屋原海岸



同上

竣 工

母			屋
ア	サ		ギ
マ		一	ル
井			戸
畜			舍
高			倉



竣工／ふるさと園全景（南西より望む）



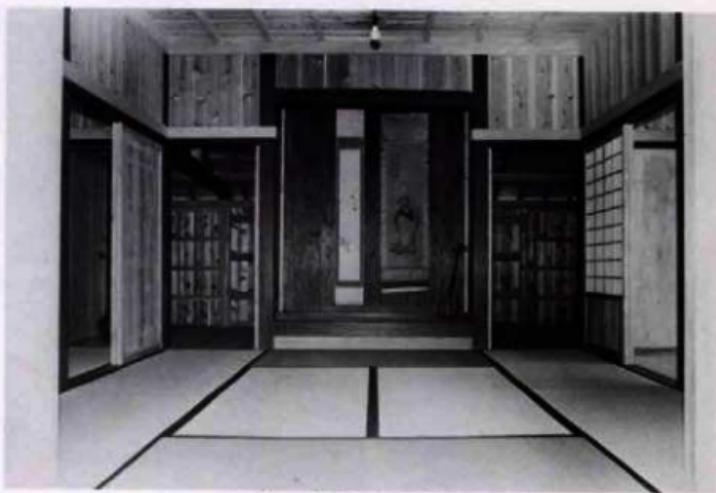
竣工／母屋／南立面



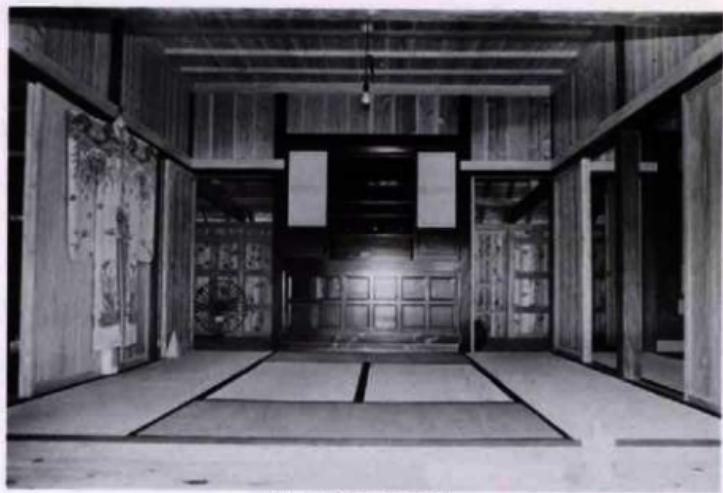
竣工／母屋／東立面



竣工／母屋／北東立面



竣工／母屋／一番座



竣工／母屋／二番座



竣工／母屋／一番裏座より三番裏座を望む



竣工／母屋／三番裏座より一番裏座を望む



竣工／民具展示／台所（シム）／三番座／三番裏座



竣工／民具展示／台所（シム）裏の保存用の瓶・壺



竣工／アサギ／西立面



竣工／アサギ／北立面



竣工／マチフル／南立面



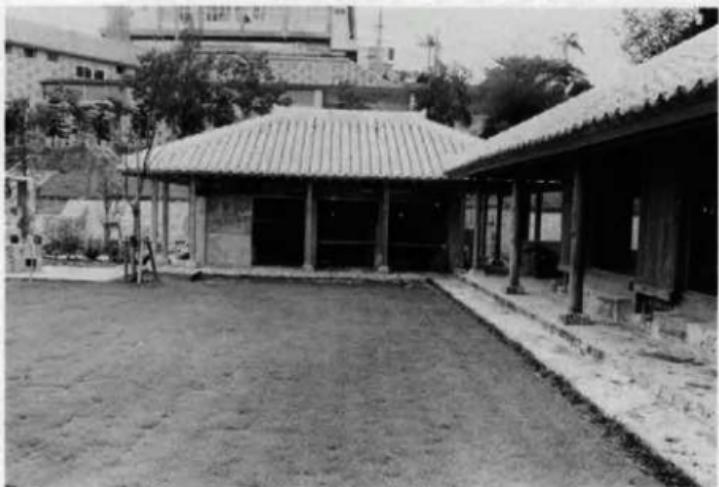
竣工／マチフル／西面



竣工／井戸／北立面



竣工／井戸／西面



竣工／畜舎／東立面



竣工／畜舎／東面近景



竣工／畜舍／南立面



竣工／畜舍／北立面



竣工／高倉／南東立面



竣工／高倉／西立面



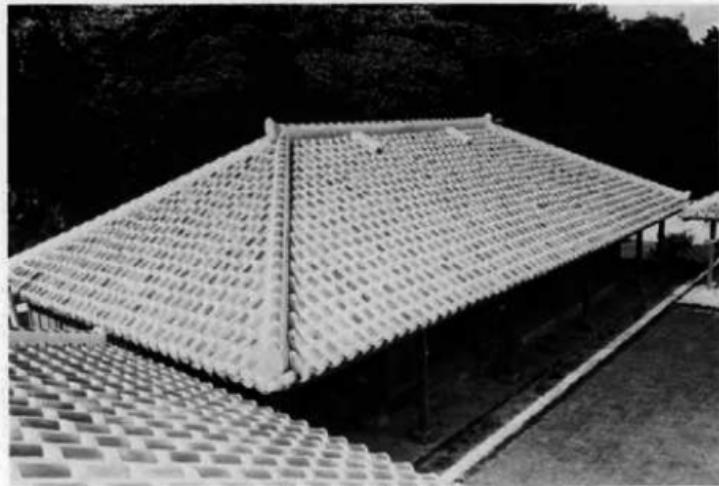
竣工／東面より望む



竣工／南西面より望む



竣工／南西面より望む



竣工／南西面より望む



竣工／西面より望む



竣工／西面より望む

あとがき

あとがき

本概報は、I・環境、II・古民家保存の意義と移設に至る経緯、III・ふるさと園の復元、IV・市内の古民家分布と保存の概況、V・ふるさと園の活用及び施工業者一覧表、図面・図版等を収録している。

今回のふるさと園復元は、母屋、アサギ、畜舎、マチフル、井戸、高倉、ヒンブン、石垣、植栽、その他の付帯施設（電気・水道等）からなり、その中で母屋・マチフル・ヒンブンは文化財の移築で、外は模築である。

以下、事業をとおして感じたことを述べる。

- ①事業は、昭和60年度～61年度に行なわれた。実質は1ヶ年弱の短期間で諸調査と施工を実施したため、全体的にかなりの無理が生じた。
- ②事務局内部の問題。例えばスタッフで古建築に詳しい職員、関連分野の民俗学等のエキスパートでチームを作り、調査・図面・施工等が文化財的立場からの検討がほとんどできなかったこと。これは概報作成にも当てはまる。
- ③施工段階では、古建築に関われる大工の高齢化が目立った。この点は近い将来、同種の事業を行なう場合と文化財の修復を実施する際、人材の確保がむつかしい事を暗示している。例えば、茅葺き／マチフル・石垣・井戸等の古建築的な石積みができる石大工／チニブ編み等の竹細工ができる方／貫構造の建築に関われる木大工（キーイーク）／在来瓦を葺く瓦職人

以上、概報の項目紹介と事業後、痛感した事を記述した。本概報が文化財の文献資料として利用されれば幸いである。

最後に、調査その他、諸々の分野でご協力を賜わった方、及び原稿を執筆された諸先生方のご労苦に対し、心から厚く感謝申し上げます。

＜協力者＞

- ・母屋とヒンブンを寄贈した 久場良昌氏
- ・マチフルを寄贈した 平田銅友氏と平田銅豪氏
- ・畜舎と井戸の石柱と石壁に使用した石材を心よく提供した方々、具志川市赤道414番地 志喜屋孝輝氏／具志川市江洲34番地 徳田有堅氏／具志川市江洲96番地 島袋武夫氏／具志川市江洲 仲松弥真氏
- ・久場家関係の聞き取り調査にご協力を賜わった 久場マツイさん
- ・石大工と瓦大工、及び施工業者一覧で紹介できなかった方々
- ・設計図、施工等の調整、及び現場での実勢を担当した市建設部建築課

＜調査主体＞

沖縄市教育委員会

教育長 比嘉徳進

「文化課長 島袋芳則（昭和60年度～昭和61年度7月）

　　山田義夫（昭和61年度8月～）」

＜原稿執筆及び概報作成体制＞

報告書の分担執筆及び調査主体は次のとおりで、編集は宮里と宮城が行なった。

1. 沖縄市の位置と環境	宮里信勇
2. 嘉間良の沿革	"
3. 久場家の沿革	宮城昭美
4. 古民家保存の意義と移設に至る経緯	島袋芳則
5. 復元の構想	"
6. 工事経過	桑江良秀
7. 造成工事に伴なう地盤調査	宮城利旭
8. 旧久場家母屋の解体と移築の概略	"
9. アサギ	"
10. マチフルの解体と移築の概略	"
11. 井戸	"
12. 畜舎	"
13. 高倉	"
14. ヒンブンの移築と南面石積み	"
15. 植栽	"
16. 技術伝承	宮里信勇、宮城昭美 宮城利旭
17. 市内の古民家分布と保存の概況	"
18. ふるさと園の活用及び施工業者一覧	山田義夫
19. 図版作成及び諸整理	桑江良秀、宮里信勇 宮城昭美、宮城利旭
20. 調査及び概報作成庶務	昭和60年度 文化課長 島袋芳則 文化財係長 金城茂雄 昭和61年度 文化課長 山田義夫 文化財係長 桑江良秀

ふるさと園復元概報

沖縄市文化財調査報告書第9集

昭和62年3月10日印刷

昭和62年3月31日発行

発行 沖縄市教育委員会

編集 沖縄市教育委員会文化課
〒904

沖縄県沖縄市字八重島1-1-1

TEL (09893) 9-0022

印刷 損業組合丸正印刷

TEL (09893) 3-4951㈹